
ニューキーツ

奈備 光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ニューキーツ

【Nコード】

N8460J

【作者名】

奈備 光

【あらすじ】

20111013 連載を開始しました。

SFミステリー。

作者はあくまでミステリーのつもりです。

――――

それなりに先の未来。

人々は不自由な暮らしを送っていた。失われたものがたくさんある。

自由、希望、平等、平穏……。残されたものは友情と愛。しかしそれらの意味も、変質していた。

人類と人造人間の葛藤。そこに宇宙から帰還した者たち。もう戦いは避けられない。

数世紀を貫く「愛」の行方は。それはすでに「愛した記憶」なのか。はたまた現実を生きている愛なのか。そう、まだ君を、これからもっと愛せるのか。

一人の女性兵士が殺された……。ひとつの物語が動き始める。

――――

「生駒&優 長編ミステリー小説シリーズ5」

同シリーズ「ノブ、ずるいやん」を先にお読みくださると、「ニューキーツ」の心的背景が少しわかります。でも、「ニューキーツ」からお読みくださっても、それほどハンデイはありません。

では、よろしくお願いします。

(目標完結時期 2012早春です)

プロローグ 冷静におなり

兵士が街を駆け抜けていく。

しなやかで光沢のあるピンクのバトルスーツを身につけ、女性が好んで使用する軽くて機動性の高いショットガンをわき腹にさげている。

動きが若々しい。

兵士はコンフェッションボックスに駆け込み、ドアノブをガシャリとロックすると、緑色のランプを睨みつけた。

所詮ちゃんなセキュリティ。作動に、なぜこんなに時間がかかるんだ！と。

きっかり二秒後にランプが緑に変わり、それを待ちかねたように、兵士はヘッドギアからゴーグルをはずした。

エメラルド色の瞳を生体認証にかけ、29桁のアイデューを一瞬のうちに打ち込む。

コンマ三秒後にコンフェッションボックスのコンソールは内壁もろとも消えうせ、五、六十平方メートルほどの部屋に立っていた。

「パパ！ 大変！ サリが死んだ！！」

部屋の中央に男がいた。

「さ、どこにでもお座り」

女性兵士の言葉を見殺したわけではないだろうが、にこやかな表情のまま、男はいつものように泰然と座っていた。

「おかしいのよ。殺されてからもう一週間も経つのに、再生しない

のよ!」

部屋には、至るところに様々な椅子が置かれてあった。

女はいつものように、お気に入り紫色のベルベットの小さなチェアに腰掛けた。

「今日は珍しくバトルスーツのままかい？」

「あーん、そんなことより」

「サリが死んだって？」

「パパ」の部屋には様々な二十脚くらいの椅子が置かれてあるが、その配置は毎回違う。

女がいつも座るスツールは、今日は「パパ」の真正面に置かれてあり、まるで面談用の椅子に座ったような気分だった。

「うむ」

「ウンじゃないわよ。こんなことってある？ 一体どうしたっていうのよ!」

男が静かな微笑を消した。

「サリって、だれだい？ 急がないのなら、詳しく話してごらん」

「サリがやられた!」

ゴーグルに流れた緑色の文字は、ンドペキが発したものだ。チャットマは、その言葉を記憶に留めただけで、作業に没頭していた。

先ほどから、執拗に攻撃してくる自動殺傷装置系ロボが放つ電流系エネルギー弾を、ハンディシールドで受け流しながら、小さな箱を地面に据えた。

箱は超密度の金属できており、上部にふたつのスイッチが付いている。手の平に軽々と乗るシンプルなものだ。

スイッチを押すと、チョットマは振り返りざまにショットガンの引き金を引き、装置系ロボを粉碎すると、ゴーグルのモードを切り替えた。

小箱からは既に大量の髪が伸びていた。箱の金属そのものが目に見える程のごく微細な糸となって周辺の希少金属を採取してくるのだ。

周りにはありとあらゆる瓦礫で埋め尽くされていた。

見慣れた光景である。

というより、チョットマはこんな光景しか見たことがなかった。

どこまで行けども、コンクリートと金属と樹脂系のゴミの山と砂塵舞うばかりの原野。

これが地球の光景なのだと思っていた。

もつとも、チョットマの移動能力は高くはない。

ねぐらとしている街から遠出をしたとしても、距離にしてせいぜい数百キロメートルほどだろう。

その向こうに何があるのか、チョットマは知らなかったし、知りたいとも思わなかった。少なくともこの瓦礫の山より、いいものが待っているとは想像さえしなかったからである。

誰かがやられる。

これは、それほど珍しいことではなかった。

毎日のように起こるかという、そうでもないが、チョットマ自身もついひと月ほど前に、手に負えない相手に挟まれてしまい、命を落とした。

政府が管轄する再生機構によって、わずか三日後にはほとんど元

のような体となって、街に出て行くことができ、その二日後には小箱を抱えて瓦礫の山に突入したのだった。

甦ったのかというところではない。

再生されたのである。

通常は五日以内に再生される。

しかし、サリが死んでから、既に七日も経っていた。

「ね、パパ。仲間みんなは、サリは政府に殺されたんだって騒いでる。ね、こんなことってあるの？」

男は迷ったような表情を見せ、しばらく黙っていた。

「みんなは、どんなことを言ってるんだい？」

男の声音に、女は苛立ちを隠そうともせず、

「知ってることがあるのなら、教えてよ！」

と、叫ぶように言った。

サリ、そしてチョットマの仲間達は、サリが政府によって処分されたと騒いでいた。

なんらかのペナルティを課されたのだと。

ただ、どんな違反行為によるペナルティなのかというと、全く見当もつかないのだった。

半ば愚連隊にも劣る墮落したものたちが多い中で、サリは規律を守り、成績も優秀な第一級の兵士なのである。

ただ、表向きは兵士ということにはなっているが、実際は軍隊としての行動は既に無くなって久しい。

戦争ないし紛争らしきものは、ここ三百年以上も起こっていない。

ただ、連日、瓦礫ヶ原に巣くう先時代の殺傷兵器の処理と有用品の回収という「任務」をこなすだけの毎日である。

そんな日々の中で、サリは、再生不可処分になるほどの、どのような不始末をしでかしたというのだろう。

「サリという子の処分について、僕は知らない。ただ、言えることは、ペナルティによる再生不可処分しか考えられないかということ、そうでもない」

「どういことなの？」

男がかすかに笑ったようだった。

「チョットマ、君は勉強をしなかったのかい？」

女は肩を落とした。

「私さ…」

「ゴメン。傷つけるつもりはないんだ。ちょっと冷静におなり」

「うん…」

再生不可処分は、必ずしも再生拒否ではない。

むしろ、より良いステージに上がるために、同等、あるいは類似系の再生ではなく、人としての多くの才能を付加した再生も現に行われているのだ。

そんなとき、元いた仲間達の元に返るということはまずない。当然ながら、新たな使命が与えられるからである。

また、本人が望んで、別の人格として再生することもできる。この場合も、通常は元の仲間達とは疎遠になるだろう。

「分っているんだろ。サリという子が、必ずしもペナルティによって再生拒否されたわけではないことを」

女は黙って下を向いていた。

チョットマにしてみれば、いや、毎日を精一杯生きている仲間たちにしてみれば、サリがなんらかの形で、つまり政府のお声掛けによって、あるいは自らの意思で「抜けた」のかもしれないことを、認めたくはないのだ。

サリの成績が優秀であればあるほど、品行が正しければ正しいほど、ペナルティによる再生拒否ではなく、その可能性は高いということも分かつてはいるが。

「でも、パパ…」

「なんだい？」

「サリは、私たちを出し抜くような人じゃない…」

「うん」

「それに…」

男は、記憶の中から、サリという女性の輪郭を思い出していた。

目の前にいるチョットマより背丈はかなり高い。体にフィットする柔らかいカーボン繊維のバトルスーツではなく、硬い装甲に身を包んでいた。

ボデイスーツにもヘッドギアにも、ハードな戦闘を潜り抜けてきたものが持つ、容赦ない傷が無数に入っていた。

ただひとつ、ブーツに金糸がバラの花を描くように使われていて、女性であることを物語っていた。

その女性の名がサリであるを知ったのは、気まぐれで彼らの会話を傍受したからである。

男はたまたま送られてきた、送信者不明の情報に記された方法によって、街の人々の会話を傍受するスキルを身に着けていた。

システムの不備なのか、あるいは最初から組み込まれた機能なのかは分らなかったが、試してみると、いとも簡単に内容を把握することができた。

盗み聞きの後ろめたさで、気持ちのいいものではなかったし、娯楽としては低俗過ぎて、すぐにやめてしまったが、男は、一度でも脳に収められた記憶を忘れることはない。

サリという名を聞いたその時から、すぐにそんな記憶を呼び出していたのだった。

「パパ、私たち、どうしたらいい？」

女は、涙を流していた。

「生き返らせたいのか？」

「……」

この女は、サリを愛しているのだ、と男は思った

「今、どうしているのか、知りたいのかい？」

男はサリの消息を知らない。

ただ、調べることはできるかもしれぬ。

政府が取った処置を調べることは、不法行為でもなんでもない。意図して隠されていなかった場合は。

「うん」

女は頷いた。

そして涙を拭った。

男はいとおしい目で女を見つめた。

自分の記憶量に比べて、チョットマの記憶量は一万分の一にも満たないだろう。

しかし男は、チョットマが、世間の簡単な仕組みさえ勉強しなかったのだ、とは思っていなかった。

現実には目の前にあるものを激しく吸収するあまりに、少し前に仕入れた知識、むしろ常識といえるような事柄までも次々に捨てていくタイプの人であることを知っていた。

1 記憶の泉

チョットマが出て行ってから、生駒は知人に連絡を取った。

サリという女性兵士について、詳しく知りたいと思ったのだった。

「わかるかい」

「ん？ 成功報酬だ。金額は内容による。その時点で、こちらの言い値を支払ってもらおう」

相手は、いつものようにぶっきらぼうに言ったが、探してくれるだけでも儲けものだ。

サイバー空間で調査会社をやっている男で、生駒は勝手に、単に探偵さんと呼んでいる。

生駒が入り込めない政府のデータベースにアクセスできるのか、あるいは性能のよいネットワークを構築しているのかわからないが、たいていは数日後にはそれなりの報告をしてくれる。

生駒が普段頼む調査は、探し人のようなことではない。趣味の世界のようなことで、たとえば西暦二千三十一年八月八日の大阪梅田付近の航空写真のありかなどだ。

探せば生駒自身でも、いずれ見つけることはできるのだろうが、サイバー空間に溢れているデータ量が膨大すぎて、簡単なことほど見つけにくいのである。

年齢は。性別は。本名は。出身地は。瞳の色は。人種は。

などと探偵は聞いてくるが、どれも知らないと答えるしかない。

ニューキーツの街に住んでいる兵士で、街の東部で消息を絶ったということだけ。

性別さえも、たぶん女だというだけだ。

人種という言葉は昔は肌の色で区別をしていたが、今は人間としての生まれ方で区別をしている。兵士であるということは、再生人

間か再生人間から生まれた子である可能性が高い。

「あまり期待するな」

という言葉を残して、探偵は通信を切った。

生駒は自分の意識を二つに分けた。

ひとつは人の姿をとって面会者用にスタンバイさせ、ひとつは精神のまま移動用チューブに放った。

出かけるときは必ず、意識を複数個用意しておかねばならないきまりだ。

移動用チューブの実態はビジュアルだけのもので、移動していることを実感する以外に用途はない。

生駒は移動用チューブを出ると、宇宙空間に伸びている光の柱に入った。

数秒間はエレベーターのように上昇していくが、それも同じことだ。エレベーターの窓からは、みるみるうちに青い地球の輪郭が見え始め、宇宙の暗さを実感する。

上空には巨大な円盤の底が迫ってくる。

円盤はまるで光の柱に支えられているかのように浮かんでいる。

この絶景もリアルタイムモニタだが、違和感はまったくくない。

「英知の壺」と呼ばれる静止衛星。

それは、光と宇宙線のエネルギーを受けて、建造後六百年ほど経った今も稼動し続けていた。

約十平方キロメートルの広さを持つ円盤。

人類の記憶を留めた無限の集合脳。

そして人類の食料生産基地の機能を併せ持つ。

地球人口三億人の命の源。

高度二千キロの地球周回軌道に散らばる四十八個のもうひとつの大地。

円盤下部は地球と光のエネルギーを交換する面で、びっしりと受光板が敷き詰められているが、上部は金属製の建物で埋め尽くされている。

以前、あらゆる食物はここで人工の水を使って生産されていた。現在、その重要度は低下したが、役割そのものに変化はない。

太陽の陽を浴びて光だけはふんだんに降り注いでいるが、それ以外はすべてここで作られたものだ。

かつて無重力体験を遊んだ観光客の姿はなく、守人たちの姿さえ消えた。

すでに生あるものはなにもいないといわれていた。

生駒は、その英知の壺のひとつ、ジェーピーエヌの景観を眺めた。建物外に大気はなく、空は暗く星が瞬いている。

巨大な満月が、青白い光を放って東の空に掛かっていた。

隙間なく建ち並ぶ工場群の壁は、極寒の中で光を反射し白く硬い光を放っていた。

生駒はよくこの円盤にやってくる。

地上にいても同じシーンを見ることはできる。同じように考えることもできる。

事実としての記憶と、それと対をなすその時の心の様相はデータ化され、古びることなくいつでも引き出してくることができる。

この円盤に来たからといって、自分の思考に変化があるわけでもないし、深まるわけでもない。

しかし、あらゆる記憶が本来はまどっているだろう感傷的ともいえる味覚や匂いが、自分の脳の機能そのものが保管されているこの場所だからこそ、強く感じると思うからだ。

円盤の中央部、建物内のコリドールの先に、目的の泉はある。

泉の水はどこまでも深く青く澄み、鏡のような水面に自分の顔がくつきりと写っていた。

生駒の意識は、泉をゆっくりと沈んでいく。
まるで重力がそうさせるかのように。

脳裏に浮かんだひとつの光景。
それは生駒がかつて体験した光景。
記憶に残る一片のフォトグラフィ。

見つめていると、たちまちその光景は脳裏を離れ、体を包み込む。
意識は自我を離れ、その光景に誘われるように、記憶の元となったその瞬間に立ち戻っていく。

あたかも生まれ変わったかのように、その体験を繰り返すのだ。
寸分違わぬあの体験を。

生駒がこの円盤に来て見つめなおすことが習慣になった記憶。
それは、このシーンから始まる。

強い光が溢れていた。
昼なのか夜なのかも分らない。

巨大な光の束が大気を突き破り、宙に向かって突き立っていた。
なだらかだが石ころだらけの丘陵が続く、その先に。

光の束。

英知の壺が消費する膨大なエネルギーを、地上から送り込み続けている。

その中心に向かって、グネグネと折れ曲がった小道が丘陵地帯を巡っていた。

人影が見えた。

ふたつの長い影。

岩肌を移動していく。

年老いた男に、数歩遅れて続く女性の姿。

それは、はるか昔の自分自身の姿。

2 記憶の駅

車窓には単調な白い景色が広がっていた。

ここ数年、日本に雪が積もるということはなくなっていたが、今年は例外で、関西でも時折雪が舞った。

この雪景色が隠しているもの。

大地の様子を、生駒は知っていた。

生駒が知っていただけではない。日本中の誰もが知っていることだった。

かつての豊かな田園地帯と陽光溢れる街々。多くの観光客を集めた著名な温泉地。

そういう郷愁を生む風土だけではなく、道路も信号機も、家々も、そして人々の姿も、何もかも、雪が覆っていた。

サンダーバード号は、特急列車とはお世辞にもいえないギクシャクとした動きで、ノロノロと雪を掻き分けつつ北陸の地を進んでいた。

生駒は、前に座った綾の顎の辺りを見つめていた。

横顔に夕陽が当たっている。

痩せた頬。

美しい顔立ちに似合わない、がさついた肌。

長い髪は健在だが、少女の頃の艶やかさはもうすでにない。

「雪よね」

大阪から列車に乗り込んでから、はじめて口を開いた綾は、目の前に広げた食べかけの弁当に蓋をした。

「ああ、珍しいね」

「おじさんとの旅行も、これが最後になるのかな」

生駒はなにも応えることができなかった。

最後……。

そうかもしれない……。

「死にやしないよ」

「うん」

「何しろ相手は、女神なんだから」

女神という言い方に、綾は久しぶりに目を合わせて、少し笑った。

もう、どれだけ話し合ったことだろう。

この旅は、自分が行かなくては。いや、自分のための旅なのだから、と主張続けた生駒。

私の出した結論に、自分で決着をつけたいという綾……。

三カ月間、準備の傍ら、その議論は膠着し、こうして二人して日本海に沿って北上している。

列車は加賀を過ぎた。

もう何年も前に無人化された列車に、到着駅のアナウンスはない。そもそも、このあたりになると、乗客は数えるほどしかない。

二人が乗る車両にも他の人影はない。

窓の外の景色が、微妙に変化し始めていた。

「ほら、見て」

綾が久しぶりに声をあげた。

「雪が」

深く降り積もり、白一色だった雪原に変化が起き始めていた。家屋の残骸が垣間見えるようになっていた。時折、かつては田園であったと思しき地形が見えたりする。

雪解けのように、斑に。

山の緑が濃くなったようにも感じる。

そして、陽の光が少し強くなったようにも感じた。

「こっちは暖かいんだ」

終着駅、金沢まで後四十キロほどだろうか。

金沢駅。

日本中、どここの町もそうだが、しんと静まり返っていた。

プラットホームにもコンコースにも人影はない。改札さえも、無人だ。

駅だけではない。

街中に、動くものの気配は感じられなかった。

かつてはあれほど賑やかだった大きな天蓋のある駅前広場には、崩れかけた数台のバスや車が放置されてまま。

もてなしドームと呼ばれた門や、歩行者通路の屋根のガラスはすべて割れ落ち、骨組みだけとなっていた。

それさえも錆び付いて、薄暗くなりかけた空に白い残骸を晒すのみである。

店という店、ビルというビルはシャッターを降ろし、あるいは略奪の跡を残したまま、既に廃墟と化していた。

雪は全く積もっておらず、むしろ蒸し暑いとさえ感じた。

ただ、空だけは冬空らしくどんよりとして、今にも振り出しそうな雲行きだった。

ただ天空の一点を除いて。

生駒は駅前広場への階段を下りようとはせずに、街の様子を観察した。

大通りを遠く、ぼろをまとった人間がふらふらと横切っていくのが見えた。

コンコースへ戻った方がいいだろう。

自分は老人である。連れは女。

この街の住人に好奇の目で見られて、良いことが起こるとは思えなかった。

今晚は、コンコースの人目につかないところで眠ることになるだろう。

「どこに行くのか」

唐突に呼びかけられて、生駒は思わず躓きそうになった。

綾が生駒のコートの影に身を隠そうとした。

そのまま逃げ出したい衝動に駆られたものの、体が自然と振り向いた。

「聞こえないのか。質問している！」

戦闘服に身を包み、武器を携えた男が二人立っていた。

「……」

若い兵士がゆっくりと軽機関銃を水平に構えるのを、上官らしき方が押し留めた。

「我々は、陸上自衛隊中部方面隊金沢駐屯地のものである。改めて聞く。どこに行こうとしているのか」

生駒は肩の力が抜けた。少なくとも、この男達は自分達に危害を加えるものではない。

しかし、生駒は嘘を言った。

「故郷なのでね」

この街の住人ではないことは、この自衛隊員の目に一目瞭然だ。自分達を誰何する目に、強い不信感が表れている。本当のことを話したところで、理解してくれるとは思えなかった。むしろ、自分達の目的を阻まれることは目に見えていた。

「観光に」

この街に、なんと似つかわしくない言葉だろう。

見え透いた嘘に自衛隊員が納得するとは思えなかったが、それ以外にいい言い訳は思いつかなかった。

3 記憶の街

若い兵士は、馬鹿にされたと感じたのだろう。明らかに怒りの表情を見せたが、上官の方は心なしに笑ったように見えた。

そして、言葉を和らげた。

「金沢によろこそ。と、歓迎したいところですが、ご覧の通りです。危険でさえあります」

都会の老人と女性が来るところではない、という。

「この駅から外には出ないように。駅のコンコース周辺は我々が掌握していますから安全です。そろそろ暗くなります。街のほとんどのエリアには電気が来ていません。危険です」

次の大阪方面行きの列車は明日の朝までないという。

「それでお帰りください。それまでは、ここでお過ごしください。観光で来られた方をおもてなしすることは何もできませんが」

帰るわけにはいかなかった。

しかし、今は彼らの言葉に従っておくしか手はないようだった。

生駒は、綾を連れて駅のコルコースを歩き回った。さも、観光客がみやげ物を探すかのように。

埃をかぶった金沢の街の鳥瞰模型。ショーウィンドウの中のガラス。色あせたパンフレットの類。動かなくなって久しい天井の大時計。至るところ欠けて無残な姿となった大きなレリーフなどを見てまわった。

若い兵士は姿を消し、上官だけが東口の階段の上に立っていた。街を警戒しているのだ。

生駒は迷った。

この自衛隊員の目をごまかして、どこから抜け出るか。
あるいは、事情を話すか。

武装した自衛隊が掌握しているということは、駅を抜け出るのはたやすいことではないということだ。ここで一晚を過ごし、明日の朝になってから出て行くとしても同じことだった。

そしてもうひとつ。

この街の状況を見て、やはり綾は連れてはいけない、という思いを強くしていた。

彼女には、どうしても無事に大阪に帰って欲しかった。

綾は思い詰めた表情をしている。

眼を合わせようとはしない。

芯の強さは筋金入りであることは重々分っている。

街のこの状況を見ても、彼女ならひるむことはないだろう。むしろ、老人である生駒をここへ駆り立てた原因を自分が作ってしまったと考えるだろう。生駒を守らねばならないと。

「ちょっと、お聞きしたいことがあるのですが」

生駒は勝負に出た。

ここで、自衛隊員にやんわりと監視されながら朝を待っていても、勝機はめぐってこない。そう判断したのだ。

「どこかで食べるものや飲むものを手に入れることはできるでしょうか」

上官は、顔色も変えずに言った。

「あなた方が買い物に行くようなところはありません」

「でも、市民はどうしているのでしょうか。どこかにお店があるのではないですか」

「市民、ですか。彼らに対して市民という呼び方が正しいとは思いませんが、彼らには彼らなりの暮らしがあります。もちろん、こんな街でも商売をしている者がいます」

「では、そこに案内をしてもらえませんか。あるいは場所を教えてくださいませんか」

「今も言いましたように、私は彼らを市民だとは思っていません。この街を見てください。日本中、どこの街もよく似た有様だとは思いますが、彼らは既に暴徒と呼ぶにふさわしいでしょう。たびたびの退避勧告も聞き入れず、街中を略奪しつくした挙句に殺し合いまですべてしています。普通の市民は、もう数年前に大阪や名古屋などの都会に避難して行きました。私はあなた方を、そんな連中の中にお連れするわけにはいきません」

上官は自分の思いをぶつけるように話した。

「現在、市の人口は三千程度です。中には、この街を離れたくないということを経由に留まっている市民も一部にはいますが。あの人のように」

市民という言い方は正しくないといいながら、この男の言葉の端々に、金沢という街を愛している気持ちが表れていた。

生駒は自衛隊員が指し示した方に目を向けた。

ロータリーにジープが入ってきた。この街に来てから、というより、北陸路に入ってからをはじめて動いている車を見た。

降り立ったのは、背の曲がった老人だった。

運転手はついているようで、助手席から出てきた。

杖にすがりながら、ゆっくりと駅への階段を登ってくる。

自衛隊員はどうするのかと思えば、表情ひとつ変えない。かといって、助けに行くわけでもない。

安心してよい相手だが、駅前広場を監視するという任務を一時放棄してまで、対応する相手ではないということだろうか。

老人が階段の半ばまで差し掛かったとき、自衛隊員が小声で言った。

「北陸県の知事です。金沢市長も兼任しています。この街に人が住んでいる限り、ここを離れるわけにはいかない、とがんばっておられます」

老人がもうすぐそこまで来ていた。

ようやく顔を上げ、微笑んだ。

白髪と痩身、そしてくたびれたジャンパーと杖のおかげで、この男を老け込ませて見せていたが、陽に焼け、なかなか健康そうだ。

やけに白い歯が、薄い唇の間からのぞいていた。

「ようこそ、金沢へ。生駒先生」

「あ、ども」

意表を衝かれた。

「あ、驚かせてしまいましたか」

知事が、手を差し出してきた。

「山中と申します。北陸県の知事をしております。先生がお見えになることは分かっておりましたが、ちょっとした騒動がありまして、お迎えにあがるのが遅くなってしまいました」

知事は、生駒が金沢までの特急券を買ったという連絡があったのだという。

生駒は知らなかった。自分がそういう立場に選ばれているという

ことを。

日本の人口が三千万人を切った今、政府がなんらかの基準で選んだ主要人物の動向、つまり生存の有無を掴むために、情報網を張り巡らしていた。

対象者は、政界、官界、経済界、学者、医者、芸術家、各地の古い名家、芸能界、スポーツ界、技術者等、十万人とも、二十万人とも言われている。

生駒は、まさか自分がその中に含まれているとは思ってもみなかった。

「私も最初びっくりしたものですよ。旅先で、同じようなことを言われたときには」

知事は朗らかに笑ってみせたが、顔には心なしか、皮肉めいたものが浮かんでいた。

政府はあくまで安否確認をしているというが、その対象者にしてみれば、監視されているも同然で、気持ちのいいものではない。

生駒は、自分が醒めてしまっていることに気がついた。

本来なら、怒りが沸いてもよいようなものだったが、心にそれほど大きなさざなみは立たなかった。

「こんな寒いところでお話をするのもなんですから、県庁まで、いかがでしょう。ぶしつけな言い方で恐縮ですが、温かいものもごございます。もし、よろしければ、お泊りいただきましたら大変光栄です」

生駒にとって、知事の申し入れは渡りに船だった。

「県庁にはまだ職員が十数名、頑張ってくれています。市役所の方の建物は放棄しました」

熱い飲み物と簡単な食事をともにしながら、知事は金沢の街が、北陸の各地がどんな状況になっているのかを話してくれた。

生駒たちがこの街に来た本当の目的が観光などであるはずがないことは、知事にもわかってはいるはずだ。しかし、それに触れることはせず、おっとりした表情を崩さない。

あれこれと話題を変えながら、大阪から来た老建築家を歓待してくれるのだった。

知事の口から、光の柱という言葉が飛び出した。

「あれがあるおかげで、この街は今年のような寒波でもなんとかやっていきます。この県庁舎もすでに暖房機能はほとんど壊れてしまっていますが、なんとか過ごしていきます」

知事は光の柱をこう評して、その存在をありがたがったが、もともとの役割には触れなかった。

光の柱プロジェクト。

稼働してからすでに十年以上が経っていたが、日本中にまだ賛否が渦巻いているからだろう。

目の前の建築家がわざわざ金沢まで来たというからには、強い賛同者か、あるいはその反対かである。

そこを測りかねていたからだろう。

だが、どんな取り上げ方でも生駒はうれしかった。

待っていた話題だった。

生駒は自分達がこの街に来た目的を話した。

いや、目的そのものではなく、そのプロセスの一部を。

知事は難色を示すかと思いきや、顔をほころばせて即答した。

「おおっ、それはそれは！」

「お力添えをいただけますでしょうか」

「もちろんです。あれは、私共の宝です」

誘致の先頭に立ったのは、この知事自身だという。

観光の目玉になることを期待して。

目論見どおり、数年間はそれなりに効果はあったのだろう。新聞やテレビで大きく取り上げられていたことを、生駒も覚えていた。

「では、ご案内しましょう」

「ありがとうございます」

生駒は深く頭を下げた。

「ですが、私は明日、朝から敦賀の方へ行かなければいけません。大変申し訳ないのですが……」

明後日なら同行できるといふ。

「いえ、急ぎたいので、ご同行は結構です」

生駒は丁重に断った。

「そうですか……。車も、あれ一台しかないものですから、お使いいただくわけには参りません。ですので、街外れまでお連れしますので、そこから眺めて帰られるのがよろしいのでは、と思います」
それでは目的は達せない。

「そこから先へは行けないのですか？」

「いえ、行けないことはありません。ただ、歩いていくのは相当にきついで」

4 記憶の砂

翌朝、金沢の市街地がそろそろ終ろうかというあたりまで来たとき、知事はジープを止めた。

街の中心部からどれほど来ていない。低い丘陵の中腹。光の柱はまだかなり先である。

その遠さに、生駒は騙されたようにさえ感じた。

しかし知事は、さっさと車を降り、旅行会社の添乗員よろしく解説しようとする。

「ここからご覧になるのがよろしいでしょう」

舗装道路は行き止まりになっていて、この先は石ころだらけの山道が細々と続いている。

「ここはかつて市民公園のあった場所でした。展望台もあります。荒れ放題ですが」

付近は公園というには似つかわしくなく、木がまばらに生えているだけだ。枯れてしまった木々も多い。

殺風景で荒涼としていた。

そして暑かった。

とても二月とは思えない気温だった。

赤外線ストーブの前にいるように、コートの中にじわりと汗が出ていた。

光の柱。

数多の写真や映像で見ていた通り、光は力強く空に突き刺さっていた。

ただ、光は見たが、山や木々が視界を遮って、その根元の辺りは見えない。というより、それが近くにあるのか、あるいはどれほど遠くにあるのかさえ、よく分らなかった。

灰色の空に一筋の白い光。

とにかく、巨大な光であることは分ったが、遠近感がつかめず、生駒はもどかしい思いをした。

「この先へ行ってみます」

「この先は政府の指示によって、一般人は立ち入り禁止区域になっています」

知事は血相を変えて引きとめようとしていたが、生駒の信念が変わらないことを悟ると、親切心は薄れていき、やがて怒りの形相に変わっていった。

「では、ここから徒歩で県庁までお戻りいただくことになりますが、それでもよろしうございますか」

「もちろん。お手を煩わせまして。ご親切をありがとうございます。ありがとうございました」

認めるわけにはいかぬ、と知事はしつこく念押しをしたが、やがて諦めて、

「今日中に県庁にお戻りください」

と、言い残して去って行った。

生駒と綾は、歩き難い山道を登り始めた。

そういうこともあるかと、それなりの靴で来てはいたが、こんなに暑いとは。

想像をはるかに超えていた。

市街地からさほど距離はないはずだが、真夏かと思えるほどの気温だった。しかも、暑さは一步ごとに強くなっていく。

知事は、あれほど強く反対をしていたが、ジープに積んであった非常用の飲み水と食料を持たせてくれていた。　　かろうじて一日分ほどだが、生駒は知事の好意がうれしかった。

彼の立場上、反対をせざるを得なかったのだろうが、内心は喜んでいたのかもしれない。

あるいは、すべてのことに諦観を抱いていたのかもしれない。

知事のあの様子では、救援のために自衛隊を寄こすかもしれない。生駒はそれはそれでよいと思った。

それに乗じて、綾だけは無事に帰ることができるかもしれない。これから向かう先が地獄か天国かは分らないが、この暑さである。少なくともまともに帰ってこれる場所でないことだけは確かだった。

狂気の行軍は自分ひとりで十分だった。

この先で、どうしても確かめたいことがあるのは自分なのだから。

生駒と綾は、峠に差し掛かった。

一步登るごとに、視界が開けてきた。

「あああっ！」

目の前に広がる光景に息を呑んだ。

この世とは思えないほどの、光が満ちていた。まぶしさが目を焼いた。

かろうじて、まぶたの隙間から見えた光景。

一面の荒地だった。

全くなにもなかった。

ただ眼前にあるのは、乾ききった白い大地だけ。

その数キロメートル先、白い荒野の中にコンクリートの巨大な建造物がこつ然と建っていた。

空気中のあるとあらゆる微粒子が光を帯びているかのように、大気そのものが白く輝く中で、建物はおぼろに浮かんでいた。

光はその建物から、空に向かって突き立っていた。

直径数十メートルのダイヤモンドが超高温で燃えているかのような色を帯びて。

大気を真っ二つに切り裂いている。

これほどまでに強い光を見たことがあったろうか。

むしろそれはもう光ではなく、極めて高密度で白く硬い金属が、宇宙の果てまで伸びているように見えた。

そしてこの先の荒野には、風さえも吹かないのかと思えるほど、張りつめた大気だけがあった。

「おじさん」

「うん？」

「わたし、ここから先は行かない。邪魔になると思うから」

「ああ、帰ってくれ」

短い会話。

生駒は、綾が恐れからそう言い出したのではないことが理解できた。

彼女は、生駒が目的を全うするために、万一手まといになることを恐れたのだ。

「後ろからついて来ちゃだめだよ」

「はい。ここで見ています」

綾の瞳が潤んでいる。

少女のころ、この瞳に生駒は魅せられた。子供を愛することとは……と。

そんなことをふと思った。

綾の視線が、光の柱に移っていく。

今から生駒が歩いていく道筋を確かめるように、荒野をなぞっていく。

「綾ちゃん、今までありがとう。僕と一緒にいてくれて。たいしたことをしてあげられなかったね」

「やめて、そういうことを言うのは」

綾が目を強く閉じた。

「おじさんはちゃんと無事に帰ってくる」

「安心して。僕も諦めてないよ」

「おじさんはきつと帰ってくる。それは確かなこと。私には分る」

「この光の中だ。僕の姿はすぐに見えなくなるだろう。そうしたらさっさと帰るんだ。とりあえず、県庁まで無事に」

「……」

「いい？」

「はい……。大丈夫……」

「こんなことを言うのはなんだけど、大阪のマンションは綾ちゃんが自由にしているよ」

「わたしは、大阪で待っています」

頓珍漢でかみ合わない会話になった。

こういうシーンで、愛する相手にどんな言葉をかければいいのか、生駒は知らない。

「なんだか、うまく言えないけど……」

綾が生駒に抱きついた。

生駒は思い切り強く抱きしめた。

綾と知り合ったころ、綾の瞳に自分の娘に対するような感情を抱いた記憶……。

そんな自分に驚いたことを、また思い出した。

あのととき、川の字になって眠ったあのととき、綾の向こうには優がいた。

思えば、あの日。

それが、三人の素敵な暮らしの始まりだったのだ。
遠い過去のことだった。

生駒は歩き出した。

上着を脱ぎ捨てた。

帽子を目深にかぶり、視線を足元に落として。

進むほどに、目の前に巨大な圧力を感じた。

重くて熱い幕を押しながら歩いてゆくように。

十分ほども歩いたろうか。

振り返ってみると、白一面の世界の中に、自分の影がぼんやりと立っているだけだった。

そこにあるはずの綾の姿はおろか、丘陵も空も何もかもが消え失せていた。

歩を進めるたびに、いよいよ気温は高くなっていった。

遠くから見たときには建物が見えていたが、もうそれもわからな
い。

白い光そのものの位置もわからなくなっていた。

ただ、巨大な水流のような光の圧力を押し返しながら、前へ前へと進んでいった。

光の粒子が岩や石ころを粉々に砕いたのだろうか。

足元はいつしか、一面の細かい粒子で覆われていた。
その粒子がパウダー状になり、生駒の歩みはますます遅くなっていった。

生駒は「優に会う」という言葉を呪文のように繰り返した。
何度も意識を失いかけては、呪文を大声で唱え、また一步を踏み出した。

すでに足元さえ、白く光って見えなくなっていた。

「ノブ、馬鹿だなあ」

夢の中で、女の声を聴いた。

「私を信じてって、書いておいたのに。こんなところまで来て」
女の声がまた聞こえた。

生駒の意識はその声を聴いた。

と同時に、目を開けようとした。

夢ではなく、これが現実だということを確かめようと。

目の前にいる女性の姿を見ようと。

しかし、やわらかく暖かい指が生駒のまぶたに触れた。

「目は閉じたまま」

声があった。

「また、会える日があるんだから、こんなところまで来なくてもよかったのに」

やさしい声音だった。

生駒の閉じたまぶたから涙が零れ落ちた。

「ユウ」

生駒は、女の名を繰り返して呟いた。

「ねえ、ノブ。約束は覚えている？」

「うん。でも体が動かない」

生駒の唇に、優の唇が触れた。

意識は再び急速に薄れていった。

「二度と来ちゃだめよ」

優の聲がかりうじて生駒の脳に届いた。

「送っていくね」

それだけ聞くと、生駒の意識は途切れた。

5 記憶の初キス

「驚いた！ 朝起きたら、おじさんが寝てるんだもの」
生駒は、まだ夢うつつから抜け出せないでいたが、綾が唇を近づけてきた。

「おねえさんに叱られるけど」

「あっ」

綾との初めてのキス。

「無事生還のお祝い」

柔らかくて温かいキスだった。

「優も焼餅なんて焼かないさ」

「どうして？」

「どうしてって、僕らは家族だから」

「だよね！」

ひと足先に大阪に帰った綾は、生駒の帰りを待ちわびる日々が続くことを覚悟していたと言う。

「でも、驚いた。わずか一日で帰ってくるとは思ってもみなかった。案外早く、おねえさんに会ったのね！」

金沢市街のはずれの稜線で綾と別れて、翌々日の朝には生駒は大阪に帰ってきたことになる。

「ユウに会った……」

「聞かせて！」

あの白い世界で、確かに優の声を聴いた。

彼女の体が触れるのを感じた。

まるで意識はなかったと同然の状態だったが、あの声は確かに……。

「よかった……」

綾の目に涙が溢れ出した。

「ああ」

生駒の目的は達成されたのだ。

あの光の柱に優が住んでいる。

それを確かめることができた。そして、会うことができた。

綾の指摘が正しかったのだ。

「本当によかった……」

優と会えて。

居場所を知りたい。

会いたい。

ここ数十年、生駒の望みはそれだけだった。

優を愛している。

今までもその気持ちは揺るがなかったが、身近にいなくなるまで、こんなに胸を焦がしたことはなかった。

生駒は目覚めた後も、金縛りにあったように動くことができなかった。

綾が体を摩ってくれた。

「へえ！ お姉さんも自由に動き回れるんだ」

生駒はその時のことを綾に話して聞かせた。

「お姉さんがここまで送ってきてくれたんだね」

表現が的確ではないことを綾も理解していただろうが、そういうより他の言い方がない。

「光の束が物質を輸送できるって聞いたことがあるけど、まさか人間を動かすことができるなんて」

綾の手が体を撫でていく。

頭部から胸へ腕へ。

生駒は確かに、送っていくね、という優の声を聞いた。

しかし、その後の記憶はない。もちろん列車に乗って返って来たという実感はまるでない。

「よく分らないけど、自然にここに帰ってきたんだ。というか、気がついたら、ここで寝ていた」

生駒は綾と話しながら、体力が戻ってきたことを実感していた。綾が触れた部分の細胞が生き返るような感触。

腕を少し動かしてみた。何の問題もない。

「無理しないで」

「うん」

両腕を持ち上げてみた。

軽々とした感覚。

「大丈夫？」

それどころか、ここ十年ほど感じたことのないほど、腕の筋肉に力が溢れていることを感じた。

「ちよっとこれは、すごいかも」

「なにが？」

「若返ったかも」

「へえ！ でも、無理しないで」

「じゃ、ちよっと手を貸して」

明らかに生駒の体は若返っていた。

青年の頃に戻ったとは言えないまでも、体中に力がみなぎっているように感じた。

「うーん、昔風の言い方をすれば、転送されたという感じかな」

光の束が人間を移動することができるとしても、大阪の福島このマンションに光の束が降り注いだという事実はない。

光が生駒を動かしたのではない。

しかし生駒は現にここにいる。

「やっぱり、本当にお姉さんは神様になったのかも」

「何はともあれ、よかった」

うれしさがこみ上げてきた。

あの砂漠で、朦朧とした意識の中ではあれど、確かに優の声を聞けたこと。

優が生きていて、居場所が分かったこと。

そして何より、世に女神と呼ばれる存在となった今でも、生駒や綾をあの頃と同じように思ってくれていることが分かったこと。

優が置手紙を残してこの部屋を出て行っただけの三十年間。

生駒と綾は優が生きているとは信じつつも、どんなに心細く、ある時は自責の念にかられ、またある時は希望を失いかけてつ、するような思いで生きてきた。

生駒は普通に仕事をし、綾は受験と就職を乗り越えた。

ありふれた家族として。

ちよつとした行楽に出かけ、学校での出来事を楽しく語らった。

しかし、優がいなくなってから初めのころは、お互いに生きていくことに忙しかったこともあって、悲しみも小さくはなりはしないまでも、絶望にまでは至らなかった。

ところが、生駒の年齢が七十を超え、綾が幸せな結婚生活に破れ四十歳になったころから、悲しみは深みにはまっていた。

もう、あの声を聴くことはできないのではないか……。

優の髪に、頬に、唇に触れることはできないのではないか。

三人で、他愛のないことを喋りながら楽しい食卓を囲む夜は来ないのではないか。

ああ、優には、もう二度と会えないのではないか……と。

でも、優は生きていた！

そして今、生駒と綾には、優を待つことには違いはないが、これからの日々は希望に満ちている。

そう思えてきたのだった。

西暦二千三十七年。第三次世界大戦が始まる前年。

世界中にきな臭い臭いが立ち込めている年のことだった。

生駒の意識は「英知の壺」を離れた。

いつもと同じように、はるかかなたの過去の記憶をなぞって、希望が再び訪れたあの日々の匂いを嗅ぐと、生きてゆく勇気を奮い立たせた。

優を待つこと、六百年。

すでに綾はいない。

「優は生きている。いつか会える」

もはや妄想となった思いだけを抱きしめて、生駒はまた地上に降り立った。

6 邪な心

今日こそあいつをやる。

こいつは女だ。たぶん。

こいつを殺さねばならない理由はない。本当は誰でもいい。ただ言えることは、誰も俺がやったとは思わないだろう、というだけだ。

特別に仲のいい「仲間」だから。

「さ、行くぞ」

先に立って進み始める。

いつものように、彼女は一拍遅れて飛び立った。

「今日はどっちに行く？」

電子音声とともに、ゴーグルモニタに緑色の文字が流れた。

「ちよっと遠くまで行ってみるか」

「うん」

「アドホールなんかどうだ？」

「うん。でもあそこの敵は、私にはちよっと手ごわいわ。ちゃんと守ってよ」

「了解」

アドホールにたむろする連中はキルマシン系で、第4次世界大戦のアフリカ内陸戦に投入されたものだ。その後四百年経つうちに、自らを強化するすべを会得し、現代の兵士を手こずらせる。

パワー、殺傷力、強靱さ、敏捷性と持久力、どれをとってもンドペキたちと同等の能力を備えている。しかも、組織的な行動ができ

る。つまり臨機応変な思考能力を持ったマシンのひとつである。

アドホールまで飛べば、人間の兵士達の数は極端に少なくなる。こいつをやるには絶好の場所だ。

人目は少ない。

そして、政府の監視も手薄だ。たぶん。

あのエリアでフライングアイを見たことはない。

監視衛星はカバーしているだろうが。

サリは従順について来る。

「俺と二人じゃ、不安か？」

「ううん。ぜーんぜん」

幾重にも積み重なった瓦礫の山の上を駆けていく。

俺もサリも、同型のブーツを装着している。抵抗をできるだけ小さくするために、地面ぎりぎりの高さで推進する軽戦士用タイプだ。余計なエネルギーを消耗しないように、俺とサリは時速百八十キロ程度を維持しつつ、構築物の残骸を縫うようにして走った。

サリは右利き同士の二人パーティの基本的隊形を守って、右四五度後方百メートルの位置にぴったり付けている。敵を容易に挟み撃ちにできる位置取りだ。

目的地までの移動中に必要な情報交換はしておくのが普通だが、サリから話しかけてくることはまずない。

二人で狩に出かけることは度々あるが、いつまでたっても打ち解けない人、という印象の女だ。

生身の体を一部分も見ただことはないし、声さえも聞いたこともない。ただ俺は、サリが女だと思っていた。

サリ自身は女であるように振舞っていたし、仲間も女として扱っていた。

しかし、実際のところはまったく不明だ。

よほど親しい仲でない限り、性別を尋ねることはないし、過去を尋ねることもない。

まして本名は。

明日死ぬかもしれない兵士だからではなく、自分が何者であるかを他人に知られることが、誰にとっても非常に大きなリスクだからである。

しかし、俺はどうかしていたのかもしれない。

こいつを今日殺すことに、知らず興奮していたのかもしれない。タブーを破った。

「サリ」

「なに？」

「今日、帰ったら食事しない？」

他人を食事に誘う。

それはきわめて稀な出来事である。

現に俺は、過去に誰かと食事を共にした記憶はない。

ヘッドギアを外し、皮膚を見せ、機械を通さない生の声を聞かせる。

とてもできることではない。

口の部分だけ開いたマスクも市販されてはいるが、まともに使える代物ではない。

サリは応えない。

聞こえなかったはずはない。

どこまでも同じような景色。

延々と続く灰色の汚れた世界が視界を覆っている。
有機物が失われた大地は薄いピンク色をした砂塵を絶えず巻き上げている。

俺たちは一定のスピードで走っていた。

アドホールまでの行程の半ばだ。

瓦礫となった街を過ぎ、原野に入っている。

ところどころに建物の跡やタンクのようなものはある。かつては豊かな農地が広がっていたのかもしれないが、数百年の間放置されて、今は荒地にも育つ植物がところどころに貧弱な群落を作っているだけだ。

前方に山並みが見えてきた。

ゴーグルのモードを変えれば、山並みの細部まで、場合によっては山肌に潜む敵の姿も認めることはできる。その反面、足元がおぼつかなくなる。

グレードのより高いブーツを装着すればさらに高度を上げることができ、接地タイプのマシンからの攻撃を避けやすくなるが、それではエネルギー消費が大きくなり、結局は搭載するものの重量増加を招く。

「見えてきた。アップット高原」

俺は、どうでもいいというように、サリにメッセージを送った。

サリを食事に誘う。

これは事前に考えていたアイデアではある。

サリの心に隙が生まれるのではないか。

隙は生まれないとしても、集中力を欠く一助にはなるのではないか。

そう考えた。

しかし、万一この種の会話も当局に傍受されているとすれば、こいつの死因を調査するときに、俺が容疑者として挙げられる可能性があるのではないか。

そう考え直して、俺はこのアイデアを中止したはずだった。

ところが俺は、声を掛けてしまった。

自分の心を分析することはできない。

それほどの知能を持ち合わせてはいない。

計画は若干狂ったかもしれないが、万一、俺の犯行がばれたとしても、主目的が達成されればそれはそれでよい。

「ンドペキと食事か……」

サリから言葉尻の微妙な声が返ってきた。

俺は、どう応えればいいのか一瞬逡巡したが、やっぱり止めだ、とはいえるものではない。

「どう？ 別に今日でなくてもいいけど」

こう押せば、サリが逃げ帰ることはないだろう。

もし、サリがきびすを返すようなら、またの機会を待てばいいし、そもそもこの女でなくてもよいのだ。

サリは考え込んでしまったかのように、またも沈黙が流れた。相変わらず、曇った空に砂塵が舞っていた。

「まずいのがいる」

上空を巨大な影が飛んでいた。

水平距離にして五キロほど先、高度約千五百メートル。

「遠回りするしかないな」

ドラゴンと呼ばれる鳥が弧を描いていた。

めったにお目にかかることはないが、伝説上の竜などではない。

超大型の海鷹だ。

図体がでかい割りに敏捷で、あっという間に背後に回られてしま
う。

この鳥がどうして生まれたのか、知りはないが厄介な生き物で
あることに違いはなかった。

「ディナー、考えとく」

サリはそんな言葉を送ってきたが、そんなことより、今はぐんぐ
ん距離が縮まりつつある目の前の鳥をどうするかだ。

俺とサリの二人で対峙するには荷が重い。

飛行系の戦士がいないパーティでは戦術に限界がある。

しかも丘陵部での戦闘は分が悪い。

こいつはむやみに攻撃を仕掛けてくることはないが、虫の居所が
悪ければ執拗に追ってくるだろう。倒せたとしてもなんら得るもの
はないし、ここでエネルギーを消耗したくはない。

俺はすぐさま大きく進路を変えた。

相手からはこちらが見えているだろう。

鳥は旋回をやめ、こちらを追うがごとくにすつと横滑りしたかと
思うと、一気に高度を落としてきた。

俺は鳥からできるだけ離れようとスピードを上げた。

鳥は追ってくる気はないようで、再びあっさり高度を上げていく
と、元のようにゆっくりとした旋回に戻った。

「あいつは海の魚を食っているらしい。いったい毎日どれだけ食っ
ているんだろうな」

サリからは返事がなかった。

「ん？」

ゴーグルモニタの隅っこに先ほどまで点灯していたサリがいなか

った。

一キロ離れていてもパーティメンバーの位置に小さなマークが点灯するのだが、今は暗い。

後ろから付いてきているものを思っていたサリの姿が消えていた。

「サリ」

呼びかけてみたが応答はない。

俺はすぐさま全速力で引き返し始めた。

ゴーグルはすでに広視界モードに切り替えてある。

しかし、レーダーは以前暗いままだ。半径十キロ以内には兵士は誰もいない。

視界の隅で鳥が急降下するのが見えた。

「なんてことだ！」

反射的に白熱弾を放ったが、鳥の翼をかすめもしないで大気に吸い込まれていった。

連続して撃った。

しかし鳥の姿は見えなくなった。

地上に降りたのだ！

「サリ！！」

戦闘中に呼びかけるのはタブーだが、俺は思わず叫んでいた。

「どこにいる！！」

位置ランプが消えているということは！！

俺は部隊の本部に緊急連絡を入れながら、鳥が降り立ったと思えるエリアに急行した。

あたりの地形は起伏が激しく、視界が利きにくい。

どこかのくぼ地に倒れたサリを鳥が執拗に攻撃しているのではな

いか。

俺は立ち止まり、地這レーダを流した。
装置のモニタに巨大な熱感反応がある。

鳥だ！

その瞬間、鳥が飛び立った。

数秒後に俺はその地点に到達したが、そこにサリの姿はなかった。

「サリ！！」

やはり応答はない。

依然としてゴーグルにもレーダーにも何も映らない。

鳥が飛び立った窪地は、浅い水溜りと少しの草が生えているだけの荒地だった。

身を隠すようなものもない。

サリの姿はおろか、彼女の装備の一部分さえも見つけることはできなかった。

「まさか」

鳥がサリを連れ去ったのか。

鳥の姿はすでにない。

すぐさま視界の利く稜線に移動したが、見渡す限り空には一点の染みさえなかった。

7 ワンピースな色

俺はチョットマが街を駆け抜けていくのを見て、眉をひそめた。

あいつ、また取り乱して。

これ見よがしに武器を携帯したまま、街の中を走るとは。

当局の監視カメラはこの様子を間違いなく捉えている。

これを見た監視官はどう判断するだろう。

このことだけで、チョットマが要注意人物リストに載ることはまずないと思うが、万一ってこともある。その場合は、我ら全員が一蓮托生だ。

だいたい、サリが再生しないと分ってからというもの、チョットマの行動は異常だ。

元来、天真爛漫をはるかに越えた直情タイプだが……。

チョットマは戦鬪系の兵士ではないが、危険察知能力は他を寄せ付けない。

迫り来る危険を察知するというより、予知能力があるのではないかと思えるほどだ。

しかも、危険を察知した後の行動の的確さ。

彼女のこの能力によって、部隊は大きな損害を、これまで何度免れたことだろう。

しかも、敏捷性は、もはや常人ではない。

数百メートル四方を瞬時に焼き尽くす散弾ミサイルの十連発を食らった後でも、焼け野が原に何食わぬ顔で立っているのはチョットマならばこそできる技である。

しかし、最近のチョットマは、ハエほどの破壊力しか持たない小

さな飛翔系マシンにさえ手こずっているし、移動能力も極端に落ちているようで、街への帰還はいつもしんがりだ。

チョットマが、サリを姉のように慕っていることは知っている。そして、サリがチョットマを可愛がっていたことも。

俺は漠然とした不安にかられた。

慌てふためいた様子で周囲を確認することもなく、チョットマがコンフェッションブースに駆け込む様子を見た。

ひとつの浮遊型カメラつまりフライングアイが、チョットマを見つめているかのように、ゆっくりと近づいていくのを見た。

「やあ、ンドペキ、何してる？」

突然後ろから声を掛けられて、俺はびっくりとした。

振り返ると、部隊のメンバーがひとり、ラフな格好で立っていた。

「お、オシャレだな、スジューオン。どこで買った？ その、んー、ワンピースか？」

装甲は身につけていない。スジューオンは、薄い紫色のコスチュームを身につけていた。

確かにワンピースではあるが、胸元には金属製のピカピカする喉当てが付いており、極端に太いベルトがみぞおちあたりから腰までをカバーしている。裾は膝くらいまではゆったりしているものの、その下は急速に細まり、くるぶしはピッタリと包み込まれている。

「いいだろ」

スジューオンはそういつて笑ったが、どこことなく、不機嫌そうだ。

兵士は、街中においても、素顔はおろか髪の毛一本さえ見せることはないが、長年共にいると、相手の気分は分るようになる。

彼女は、オードリー。ヘプバーンのようにキュートな顔をしているが、これが彼女の素顔だとは誰も思っていない。自在に顔の形を変えることのできるマスクを被っていることは間違いない。

兵士のうち、街中では、この手のマスクを使うものが七割、軽装備のヘッダーを被るものが三割。

俺もマスクを使う。

このマスクの「顔」を一定にすることで、どこの誰かがわかる。もちろん、常時携帯しているコムログを見さえすれば、目の前にいるのがスジューオンだとわかるのだが。

「さっきからそこに突っ立って、何見てた？」

「ん、なんとなく」

「ヘンだよ」

「そうか？」

チョットマを見ていたとは言えない。

スジューオンに、チョットマだけでなく、自分も勘ぐられるのはいやだった。

しかし、スジューオンは、

「チョットマを見てたんじゃない？」と、からりとした笑い声をたたえた。

「ん？」

「まあ、いいよ」

「ん、おまえ、俺を監視してたのか」

「あれ、相変わらず機嫌悪いのね」

「なにか用か」

「ね、ンドペキ、さっきのマスターの話、どう思う？」

スジューオンはあっさり話題を変えた。

「サリの？ そうだな、ハクシュウはシャイだから」

「だから、あんなに怒りくるってたって？」

「俺達のことを心配していても、あんなふうにはか言えないんだな。それが彼の持ち味」

「持ち味ねえ。単に、馬鹿じゃない？」

「おい、オマエ」

「だいたいさ、私はサリがどうしたって、どうでもいいことなんだ」

俺も、ある意味では同感だった。

サリがいなくなることと戦力的にダウンすることは否めないが、だからといって悲しみはない。

人格が消去されたのか、あるいは遠く離れた街で別の人間として再生されているのかは知らないが、いずれにしろ自分達とはもう関係のない人間だ。

「それをさ、チョットマのやつ、深刻に考えやがって、いい迷惑」
スジューオンは突っ立ったまま、ンドペキにだけ聞こえる声でメッセージを送ってくる。

生の音声として聞こえてくるのではない。

戦闘時に使うパーティチャンネルではなく、至近距離にいるものだけにしか聞こえない微細な電波を使っている。いわゆるラバーモードと呼ばれている通信だ。軍の正規品ではないし、むしろ使用を禁止されている装備だが、これを使っていない者に今まで出会ったことがない。

「あいつがあんなんじゃない、まともな狩りもおちおちできない」

「ははん。じゃ、スジューオンもあの娘に少しは一目置いてるんだな」

「フン、茶化さないで。そりやさ。あいつがいるから、後ろを気にせずに突っ込めるんだから。ちゃんとして欲しいよ。サリがいなくなっって、その役割はチョットマが担わなきゃいけないのにさ」

通常、兵士達の間では、戦闘は狩りと呼ばれる。

兵士が出動する紛争や戦争がなくなって久しい。

現代の兵士は、街の周辺の安全確保を主任務としているが、その相手は、戦争で破壊し尽くされなかった戦闘用のマシンや、強大化した生物兵器の成れの果てなどだ。

報酬は政府から出るが、額はわずかだ。それだけではまともな暮らしを営めない。

ほとんどの兵士はマシンが体内に有しているICチップや、廃墟に残されたレアメタルを回収しては売り、生計を立てている。

幸か不幸か、どの大陸にも戦闘用のマシンはまだ数多く闊歩していたし、数百年前の文明が残した都市の廃墟は、ほとんどが手付かずのままといってもよい状態だ。

「ね、今度のミーティング、出なくちゃいけないかな」

「軍法上、マスターが召集した会議に出ないのは違反行為だ」

「わかってる。あんたが副隊長だってこともね。でもさ、いまさらサリを探しにいくってのは、どう考えても無意味じゃない？ そのための打ち合わせなんてさ」

サリが忽然と姿を消してから、すでに一週間ほど経っている。

スジューオンは、サリの亡骸が、あるいは何かの遺留品が現場周辺に残されているはずがないというのだ。

普通、人が死ねば、死体はすぐさま回収される。

どういう仕組みが働いているのか、兵士も街の者も誰も知らないが、数時間後には死体が身に着けていたものも含めて跡形もなく消失する。万一、血が流されたとしても、それさえも回収されるのだ。いや、回収されるというのは見かけ上かもしれない。そう思っているだけで、実際のところは誰にもわかっていないのだ。

「どこを探せばいいのかも分からないのよ。ンドペキもサリを見失ったエリアを特定できないんでしょ」

「ああ。何度も話したとおりだ」

「計算上は、少なく見積もっても半径4キロ。サリが自分の意思で移動したとすれば、半径二十キロ以上の範囲になるわけでしょ。聞いたんだけど、あのエリアには穴ぼこがたくさんあるって言うじゃない。中には地下洞窟になっている穴もあるって。そんなところ、どう探せばいいのよ」

「洞窟じゃなくて、昔の地中基地の跡らしい」

「今は洞窟。じゃなくて、なんなのよ」

「だから、それを明日話し合う」

「私達のリーダーは地中は探査できないし」

「はあ、とスジューオンが大きなため息をついた。

「もし鳥が連れ去ったのなら、お手上げよね」

俺は、スジューオンの嘆息がよく理解できた。

サリが別の人間として生まれ変わった可能性について、ハクシユウも俺もあえて触れはしなかった。しかし、探しにいくという無駄な行為の裏には、サリが我々を捨てたと認めたくはないという気持ち働いていることは明らかだったからだ。

それはスジューオンにも理解できるはずだ。

口にはしないまでも、悔しいのだ。

だから探索という無駄な行動をとるしかない。

執拗に愚痴をこぼすのも、我々自身のやるせなさの表れなのだ。

サリの死は、俺にも解せないことだった。

あの日、俺はサリを殺すつもりだった。

しかし、俺は殺してはいない。

あの巨大な鳥、つまり海鷹にやられたのだ。

確信はない。

鳥が飛び去った窪地は、もともとの俺達の進行方向ではなかった。サリがもしあの窪地で鳥に襲われたのだとしたら、なぜあそこまで移動したのだろうか。

進路を変えた俺を見失ったのだろうか。

サリの能力ではありえないことだが……。

もうひとつ、俺を悩ませていることがあった。

兵士がパーティを組んで行動しているときに誰かが死亡すれば、おざなりとはいえ、通常は事情聴取が行われる。

死亡事故の頻度は高くないが、我々の部隊でも年に一人くらいは亡くなるものだ。その都度、軍の調査部から呼び出しを受ける。緩慢な行動で、同僚を死なせてしまったのではないか、という詰問を受けるのだ。

万一、同僚の窮地を見殺しにしたのなら、厳罰を受けることになる。

今回はわずか二人の軍事行動だ。

行き先も報告してあった。

監視衛星の映像は、我々二人が基本隊列を組んでアドホールに向かっていたことを映し出したことだろう。

なのに、呼び出しが来ない。

それは、サリは戦闘行動で死んだのではない、つまり鳥に殺されたのではない、と当局が判断していることの証ではないのか。

つまり、サリは死んではないのではないのか。

では、なぜサリは姿を消したのか。

俺は、事情聴取がないことを誰にも話していない。

隊長であるハクシュウには、軍から、あるいは公安当局から、何らかの連絡が入っているのかもしれないが。

スジューオンは、言いたいことを言うと、手近なコンフェッションボックスに入っていた。

パパかママに、今のような愚痴を聞かせるのだろうか。

パパに面会でもしてみるか……。

今月は規定時間に大幅に届いていない。

あてがわれたパパとママに数日置きに面会することは、兵士であれ商店で働くものであれ、市民全員に課せられた義務である。

数百年も続いているシステムである。

決められた相手に決められた時間以上の面会をしないと、死亡時の再生に多大なペナルティが課せられるということになっている。

パパないしママは、不定期に入れ替わっていく。

ほとんどの場合は約三年で交代となるのだが、半年ほど別のIDつまり別の人物が親として紹介されることもある。

俺の今の親はパパだが、本名はおろか職業も、住んでいる場所さえも知らない。

わかつていることといえば、微妙に精神が壊れつつある男だということだけ。

俺のことにはこれっぽっちも関心はないようで、自分の昔話を繰り返し聞かされ続けるだけの面会だ。

几帳面でくそまじめでおせっかいな人間よりよほど付き合いやすいが、月に二時間以上と決められた面会時間が苦痛であることに変わりはない。

面会時間が規定時間数に足りなかった場合のペナルティの内容について、公表はされていない。

ふと俺は、それでもいいじゃないか、という気になった。
どうせ、俺は……。

チョットマがコンフィッションボックスから出てきて、また街を
駆けていった。

8 崩壊の記憶

超高齢化が留まることを知らない日本。少子化も先鋭化し、今や稀子状況と呼ばれている日本……。

生駒が金沢でユウと出会ったその年の暮れ。そんな日本に、痛烈な一撃が食らわされた。

朝鮮半島や東シナ海で頻発していた紛争が、ついに日本本土にも飛び火したのだった。

二十一世紀の前半になっても、世界はあいも変わらず力づくの権益確保が横行していた。人類はまったく学習していなかったのだ。

そしてもうひとつの戦い。

多様な宗教と民族は、グローバル化によって小さくなった世界では共存できなかった。

偏狭な考え方から、人類は脱却できなかったのだ。

テロという新しい形の戦争が一般化した時代でもあった。

世紀も半ばに差し掛かると、単純な主義主張の違いというつまらない争いは、富める者と貧しいものとの戦いに明確に移り変わっていった。

あまたの国で、国内紛争が蚊が湧くように勃発し、友好的だった隣国との関係もギクシャクしていた。世界中いたところで、硝煙の臭いと緊張感が漂い始めていた。

そしてついに、比較的長い間平和を維持し、どんな紛争にも対岸の火事とばかりに無関心を貫いてきた日本にも、直接的な攻撃が仕掛けられたのだった。

日本は、防衛という意味ではあまりに無力だった。

軍備という面でも、社会構造も、サイバー空間においても、そして人々の無力感という意味でも。

第三次世界大戦。

かつての大戦のように、限られた国々が覇権を争った戦争ではなく、信ずる神の違いという争いと、貧富の差を根にした戦争は、世界中あますところなく巻き込んだ。

また、複雑に絡み合った国家レベルの利害が、あるいはグローバルな企業の思惑が、あるいは独裁者の狂気と保身が、戦争の終結を見えないものにしていった。

ほとんどの国で、相手国と戦うと共に、自国内での紛争や狂信者集団の蜂起に手を焼き、ありとあらゆる国々が国力を使い果たすまで戦いを続けざるを得なかった。

それはまるで、小さな箱の中に押し込められたコオロギが互いに殺し合うように、正義も目的も、そして未来もない戦だった。

一時は停戦が保たれている時期もあった。

しかし、明確な勝者と敗者のない停戦は、長続きはしなかった。もともと、横暴だけを国是としてきた国々が仕掛けた戦争である。

獲得するもののない停戦は、次回の攻撃のために力を貯めているだけのものでしかなかった。

いずれ第四次世界大戦に突入することは、誰の目にも明らかだった。

都合、十八年間にわたる世界大戦。

すべての国々が国力を使い果たして戦争が終結したとき、九十億あった世界の人口は、十億を下回るまでに減少していた。

もっとも大きな被害を受けたのは、ヨーロッパ諸国とアメリカなど、二十世紀にいわゆる先進国といわれた国々である。日本もその例に漏れず、三千万人を割り込むに至っていた。

失われたのは人の命だけではない。

多くの産業、文化。そして社会構造。

これらは消滅してしまったといってもよいほどの打撃を受けた。もちろん、地球の自然も。

大戦後、人々は復興を諦めた。

地球上のあらゆる社会全体が腐敗した卵のように悪臭を放ち、崩れ去ろうとしていた。

専門家は、地球環境の致命的な汚染と食料生産能力の絶望的な打撃によって、大規模な飢餓が継続的に発生し、十数年後には世界人口は三億人にまで減少するだろうと予測していた。

はたして、専門家の予測をはるかに超えるスピードで世界の人口は減少を続けた。

戦後五年の間に世界人口は三億人、日本の人口も一千万人を切ったのである。

そして残されたもの。

それは、呪うべき技術。

戦闘のためだけに開発された技術。

人が操る武器ではなく、また操縦するものでもない戦闘マシン。安価に製造できるよう、それらのほとんどは自動増殖機能を備え

ていた。

生物兵器もおどましい進歩を遂げていた。

細菌系の生物兵器はもちろんのこと、哺乳類や爬虫類や鳥類を改造した生物兵器さえ開発されていた。

その兵器は自力でエネルギーを補給し、考え、そして子供を生み、世界中に生息域を広げていった。

平時には考えもしない愚行が横行していたのである。

洗脳され、狂った人間が、どの国にもいたのだ。

それが指導者であれ、民衆であれ。

そんな中で、人間を増やす技術、あるいは人間を死なせない技術が発達したのだった。

世界戦争が停戦期にあった頃、日本政府が国民に向けてひとつの発表をした。

日本の人口ピラミッドは、超高齢化と戦火によって、まるで土台の折れたシャンペングラスのような形状をしていた。

日本を立て直すため、という名目ではあったが、悪魔からヒントをもらったとしかいいようのない提案。

それは「エイジングブロック」という名がつけられたプランだった。

告

日本国の現状では自然な国民数の回復は見込めず、今後十数年のうちに日本人絶滅ともいえる状況となることが明らかである。

政府として、この状況を座視し、滅びを享受することはできない。今、生きている者の使命として、生きて日本国を立て直すことを

宣言する。

すべての国民には、三つの選択肢が与えられる。

一 知識の存在として、全記憶が保証される「生」。(仮称) 記憶の人。

二 健康な体を活かし、社会に貢献する「生」。(仮称) 肉体の人。

三 天寿を全うし、日本を後の国民に委ねる。

つまり、政府が示した選択肢は、こうだ。

一(仮称) 「記憶の人」は肉体を失う。

ただ今後、一定期間に少しでもアクセスした記憶を、まるでスーパーコンピューターに整然と蓄積されたデータのように取り出せるという。

肉体を持たない代わりに、日本中に設置されたライブカメラに自由にアクセスでき、自分専用の飛翔系カメラを与えられるという。

また、すべての人との自由な会話が保障される。

二(仮称) 「肉体の人」は多くの記憶を失う。

現在の年齢に関わらず、一律にその個人の十八歳時想定の肉体を与えられ、それは定期的に再生される。

どのように生きるかは、個人の自由である。

ただし、肉体再生時に、記憶は使わなかったものから順に、消去されていく。

一、二、三の選択は、個人の自由である。

ただし、(仮称) 「記憶の人」を選択できるものは、三千万円の負担ができる者に限られる。また、(仮称) 肉体の人を選択できるものは、一千万円の負担ができる者に限られる。

選択の期限は半年後。

多くの国民は迷った。

費用が払えないものは老いて死ぬことしか選択の余地はなかったが、三千万円の費用が払えるものは、その選択に悩みに悩んだ。

もちろん、費用が払えても死に往く権利はあった。

しかし、ほとんどの者は、目の前に差し出された生きながらえる権利を簡単に放棄できるものではなかった。

生駒は、このような提案がなされるまでもなく、生きながらえることに執着していた。

三条優に今一度会う。

その思い自体が、まるで生きているかのように脳に住み着いていた。

生駒にとって、肉体への欲求より、記憶が失せていくことは、死を意味した。

そして、迷うことなく、記憶の存在として生きながらえることを選んだのである。

綾は肉体を選ぶという。

聞き耳頭巾の使い手として、記憶や知識という概念だけでは足りないというのだった。そして、生駒の手足となって、生きていくというのだった。

やがて半年が過ぎ、大勢が判明した。

評論家の予想は大きく外れ、国民の圧倒的多数が肉体を選んだのである。

少しずつ、失われることのない記憶の存在と、不朽の肉体を持つ日本人が生まれていった。

街には若者の姿がチラホラと見られるようになった。

日本は復興の道を歩き始めたかに見えた。

しかし、日本国の国家戦略は修正を迫られることになった。

日本のこの動きを、世界は脅威の目で見ていたのである。

しかし、どの国も既に戦争を仕掛ける力はない。

世界の国々がとった行動は、驚くべきものだったが、非常にまっとうなものだったともいえる。

日本の動きに対抗する策として、世界の国々を席卷したアイデアは、世界がひとつになり、人類の危機を手を取り合って乗り切るというものだった。

その提案は、国際連合のような単なる話し合いの場を作り直すというような低レベルのものではなかった。

ありとあらゆる国をひとつの漏れもなく解体し、地球という単位でひとつにする、という革命的な提案だったのである。

西暦二千八十二年。

三十年の時を経て、地球というひとつの国が生まれた。

国の名は「ワールド」。

ただ、その間、日本で生まれた記憶の存在と不朽の肉体を持つ「人間」を作り出す技術は、地球上のいたるところで採用されていた。

地球人類は新しいスタートを切ったともいえる。

未知なる社会に向けて。

地球全体をまとめるひとつの国。そして新しい「人類」。

一方で、新しい人類について、その脅威も語られ始めた。

つまり、いわば不死身の体を持つともいえる存在が、地球上のある地点に偏在することの脅威である。

地球人類の社会、つまり「ワールド」は、非常にいびつな状況になりつつあった。

不死身の存在である人間の数が、ある地域にのみ、どんどん増えていくことになったのだ。

彼らは子供を生まない。

生めなかったのだ。

非常に高い確率で死産ないし奇形の子を生んだ。生命の誕生という神秘の秘密は、まだ当時の技術の力では、その入り口しか見えていなかったのである。

ワールドの恒久的平和を守るため、人々は何をしたのか。

地球統一国家誕生後、半世紀も経たずに、不死身の体を持つ人間は、個人レベルで世界各地に無差別に転住させられたのである。

民族による、あるいは元の国による、あるいは一族による団結を完全に解体するために。

個人をバラバラにすることによって、不穏の目を摘み取ろうとしたのである。

綾は、アフリカ大陸に新造されたある街に。

生駒のような「記憶の人」は、実質的に定住地は持つ必要がなかったが、便宜的に定めておく必要はあった。

その時点ですでに、日本国という地域は存在していなかった。あれほど隆盛を誇った東京という都市も跡形もなく消え失せてしまっ

ていたし、かつての国土自体もかなりの部分を消失していた。

グローバルな存在となった生駒は、便宜的な居住地を、綾のいるジュラシックビーチと定めたのである。

9 海は知っている

サリの失踪をさかのぼること、一年。

宇宙船の外壁のかすかな隙間に、わずかコンマ一ミリほどの小さなシリコンカプセルが挟まっていた。

地球の大気圏に突入し、灼熱に晒されても、そのカプセルは燃え尽きることなく宇宙船に貼り付いていた。

太平洋に着水したとき、カプセルは静かに宇宙船を離れた。

宇宙船の乗組員もそれを出迎える船の乗組員も、そして上空を飛ぶ監視衛星も、カプセルが静かに海に沈んでいったことに気づくものはいなかった。

しかし、カプセルが深い海底まで到達することはなかった。

海水に触れてものの二分もしないうちに、カプセルは変態を開始したのである。

水を含んで、瞬く間に一千倍ほどの大きさまで成長した。

と同時に、尾やヒレが生え、目ができ口ができていった。五分も経った頃には、既にイルカのような姿になり、自由に泳ぎ始めたのである。

このイルカのような生命体は、迷うことなく一直線に西北に向かっていった。

地球の豊かな海。

数百年経った今も、変わることはない。

その青さも、塩辛さも。波はうねり、潮流が微生物を押し流していく。それを追う魚や海生哺乳類の群れ。

しかし、それが感傷に浸ったのは、脳の組織が作られたそのとき

だけだった。

高度な思考能力を持つ一体の生命体。

名はある。本人は覚えている。しかし本名は二十一桁の記号と数字を組み合わせたID番号だ。JP01と呼ばれていた。

JP01は海の異変にすぐに気がついた。

かつてのように、海は大小様々な生物で溢れていた。

しかし、JP01には聞こえたのだ。

無数の声が。

声だけではない。

地球上のありとあらゆるシーンの断片が水に溶け込んでいた。

はるか昔の活気のあった中国の街並み、農民が手にする米の一粒、シャワーを浴びる時の爽快感に至るまで、地球上の出来事のすべてがここにあった。

遠い過去のことだけではない。

地球という星に生きるものすべてが失われるかとも思われたあの戦争も、その後の細々とした人類の記憶も。そして自分たちが巡礼の旅に出るため、宇宙空間に飛び立ったたときの様子も。

シーンだけではない。

意識、感覚、感情をもった特定の個人の記憶が漂っていたのだ。

目には見えないが、あたかもスライドショーを見るように、様々なシーンがJP01の脳裏を次々と掠めては消えていった。

断片的な意味のある言葉が聞こえることもあった。

言葉と共に、幸福感が心に広がることもあったし、悲しみが落ちてくることもあった。

過去から現在に至る数百年に渡る何百億人もの人類の、すべての人々の一人ひとりの記憶……。

それらがすべて、海という大きな器に盛られているのだということに気がつくまで、多くの時間は必要ではなかった。

JPO1は、泳ぎ始めて数日後、日本列島が見えてくる頃になって、巨大な記憶装置としての海の機能の成り立ちを理解し始めた。

無限ともいえる膨大な記憶が、微細なデータの断片となって、海水を組成する粒子の粒に載せられていることに気づいたのだ。

そしてそれらが何らかの法則によって瞬時に並べ替えることができ、まとまりのある記憶となって連なっていくことにも気づいた。

JPO1は泳ぐことをやめ、その法則を見つけ、自分のものにしたようにした。

そしてついに、かつての自分の意識に触れた。

それは、ある思い出。

今の自分の心の中にあるものではなく、海に溶け込んでいた記憶データとしての思い出の方を。

初めてその思い出をイルカのような肉体が感じ取ったときは、コンマ一秒も留まることなく、電光のように流れ去っていった。しかし数日後、次に自分の声が聞こえたときには、ほんの少しの間だけその記憶を弄ぶことができた。

そしてまた数日後、自分が始めて人を愛したときの感覚に触れたときには、その感覚を楽しむことができた。

やがて、JP01は海に溶け込んだ自分の記憶を自由に手繰り寄せることができるようになり、他の特定の人物の記憶をも手元に呼び寄せることができるようになった。

宇宙船の着水から約一ヶ月が経過していた。

JP01は急いでいた。

時間がない。

準備がまだ整っていない。

JP01は当初の予定を変更し、回れ右をした。ホーン岬を回り込み、大西洋に出よう。

だが、目指すカリブ海はまだ遠かった。

早く彼女に会わねば。

そのこと自体は、JP01の計画のほんのスタートラインにすぎない。

休むことも眠ることもせず、全速力で泳ぎ続けた。

エネルギーの摂取は、意識せずともこの肉体自身が海水から自動的に取り込んでくれる。

永い宇宙生活で得た肉体は、空気も光もない空間においてさえ活動できるほど、超高効率のエネルギーシステムを備えている。宇宙線であろうが熱であろうが、光であろうが、皮膚がエネルギーに変えてくれる。

様々なものが溶け込み、プランクトンが豊富な海水なら、そこからエネルギーを取り出すことは容易なことだった。

大気中を飛ばば、格段に速く進むことができる。というより、ほんの数秒で目的地上空まで達することができるだろう。

しかしそれでは、いくら技術革新が停滞している人類とはいえ、

こちらの動きを地球政府に捕捉されてしまう恐れがあった。

しかも、これからやろうとしていることに必要な情報が入手できない。大気中には人々の記憶は浮かんではいなかったからだ。

泳ぎながら、彼女の次に会うことになる特定人物の記憶を次々に呼び出していった。

まず知らねばならないのは、彼らが今どこで何をしているかだ。そして接触する方法は。

JPO1は、たとえば彼らが、今日をどう過ごそうと考えているかも知ることができた。

過去の記憶だけではなく、今を生きている人間の思考も、海に溶け込んでいることを発見していたのだ。

いわば過去の記憶は、現在の思考の連続した蓄積である。海のデータベースの仕組みを理解してしまえば、特定の個人の現時点の思考さえ読み取ることとはたやすいことだったのだ。

一方で、一抹の不安を抱かせる情報も入手していた。

海中を疾駆しながら、自分と同じ波長の鼓動を発している生命体の存在を感知したからだ。

数多くの同胞が、自分と同じように世界中の海に身を潜めているのだ。

そしてこちらの準備が整わないうちに、別の計画が進み始めているということになる。

地球人類との秘密裏の交渉は、上手く運ばなかったのだ。

JPO1は決断を迫られた。

同胞の計画、あるいは作戦に同調するか否か。

その場合は、自分自身の計画に制約が生まれるだろう。

しかし、より良い結果に導くことも可能になる……。

ただ、そのためには、自分の部下が今回の作戦に参加していることが必須となり、彼らと接触することが条件となる。

逆に、元々の自分の計画を、あくまで一人で実施するべきだろうか。

その達成点は、それだけでも非常に魅力的だが、その後のこととなると……。

仲間を探そう。

プロセスは変更だ。

J P O 1は、決断した。

やがて、カリブ海のフロリダ半島に近い、とある海岸にたどり着いた。

海面に浮かび、待った。

彼女が今日、海岸近くで特殊な植物を収穫する予定であることを知っていたのだ。しかも、予定が変わらなければひとり来るはず。

遠くで砂塵が舞った。

閃光が光った。

彼女は兵士ではないが、大陸をひとりで横断できるほどの戦闘能力を備えているはず……。

みるみるうちに近づいてくる。

肉眼でも人の姿が視認できる距離。

彼女はひとりだ。

まるで測ったかのように、ジャストポイントに自分は浮かんでい

る。

幸運だった。

海中に浮かんでいるとはいえ、彼女のセンサーはすでにこちらの存在を感知しているだろう。

こちらに関心を払わなければ、海の中に入ってくるはずだ。

襲うのは簡単だ。

邪魔だと判断すれば、攻撃を仕掛けてくるのは時間の問題だ。

はたして、レーザー砲がこちらを向いた瞬間、閃光が発射された。その刹那、JP01は姿を消し去った。

イルカのような肉体は、目に見えない微粒子の粉末となっていた。

レーザー弾が派手な音を立てて、辺りの空気や岩や海水を切り裂いた。

しかしそのときすでに、霧となったJP01は一気に五百メートルほど突き進んで、彼女の体を覆っていた。

JP01はたちまちもう一人の自分自身の体内に進入し、彼女がどんな行動を取るより早く、ひとつの作業を終えた。

そしてたちまち、再び霧状となって海に戻った。

さあ、探そう。仲間を。

10 むなしき記憶

翌日も生駒は英知の壺に向かった。
楽しかった思い出に浸るために。

あれは、生駒が五十歳代の頃だった。

優と知り合ってまだ数年。彼女はまだ二十歳代。二人の間で、ようやく「愛」という言葉を使ってもよいという雰囲気になっていた頃だった。

一人の少女を挟んで、川の字になって寝たことがある。
その夜の思い出。

生駒と優は、京都の山奥の隠れ里で殺人事件に巻き込まれていた。事件の真相を探るため、里の少女、綾と行動を共にすることになる。東京育ちの綾は、父親の都合でその山村に移り住んでいた。不思議な少女だった。村の老婆に見初められ、聞き耳頭巾の使い手としての訓練を受けていたのだ。

小学生とは思えない芯の強さ。
疑うことを知らないもののみが発散させる純真な喜びを、小さな体全体で表現していた。

ある日、三人は綾の父親の行動を探るため、深夜、山神の社の木に聞き耳頭巾を当てて、その声を聞いた。

漆黒の闇の中で聞いた意味不明の言葉と、眼前に展開された大人達の不可解な行動。

生駒と優の間に寝そべった綾が吐露した不安。

小学生らしい言葉と裏腹に、聞き耳頭巾の使い手としての悩み。

けなげな一言一句が、そのかわいい唇から無理なく発せられるたびに、瞳は不思議な色合いを帯びた。

生駒はその瞳を見つめ続けた。

そこには生駒が写っていた。

そして奥底には、子が親に見せるゆるぎない安心と信頼が静かに横たわっていた。

生駒は、子を持つ親が、わが子を慕う感情とはこういうものか、と思ったものだった。

数年後、綾の父親が死んだ。

母親の元には戻りたくないという綾を、生駒が引き取ったのである。

建築家としてそれなりに活動している生駒は、当時、独身の五十男。

その事務所兼用の狭いマンションの一室に転がり込んできた、自称歌手兼モデルのプータロー三条優は二十代の美女。それに綾を加えた三人の暮らし。

周囲にはどう見えようとも、ひとつの典型的な幸せの形だったと思う。

華々しいことは何ひとつない。

かといって、退屈かというと、もちろん違う。

生駒が施主に褒められたといっっては喜び、優の歌がテレビで流れたといっってははしゃぎ、綾が結婚したときには生駒は父親として涙した。

いさかいといえ、ほとんどの場合、「私達、結婚しないん？」という優の決まり文句から始まり、生駒の「熟考しておく」で終わ

る。

そんな平凡な幸せの日々だった。

三人の暮らしは西暦2010に始まり、一時は綾が抜けたものの、離婚した綾が戻ってきてから十数年間は続いた。

終幕は2031年。

優が部屋を出ていったのだった。

当時の生駒は、建築家業は続けていたものの、齢七十を回っていた。優は四十代半ば。綾は三十代半ばの頃である。

探偵から、連絡があった。

「早いな」

「成果の乏しい仕事は、さっさと片付けて、次の仕事をしろってことだ」

「そうか……では、聞こう」

「ニューキーツに住むサリという人物は三人いる。一人は政府機関に勤めているアンドロで年齢は二十二。正確にはサリーという。もう一人は囚人。服役十年のベテランだ。こちらはマトでザリという。最後の一人は現役の兵士だ。名前はサリ。誰の情報を聞きたい？」

「兵士を頼む」

「一人だけでいいのか？ 三人分聞いてもお代は一緒だぞ。特にマトで十年の服役ってのは珍しいぞ」

「服役中に兵士として、外に出られるのか？ しかも数年間も」

「ありえない」

「では、兵士の方を」

探偵の情報は貧弱だった。

サリの本名は不明。

性別は女。

年齢は二十五。

「肌の色は白で瞳は濃いブラウン。ま、珍しくもないな。髪は金髪。というより白銀に近い。これは珍しい」

「フム」

「人種はメルキト。しかし、出生の記録、再生の記録、共にない」
「ん？」

「普通は直近の再生年月日がわかるんだが、今回はない」

「メルキトで二十五歳なら、普通は数年前に再生されているはずだ。それに、今はどうなっている。十日ほど前に死んだのかもしれない」
「疑問は預けておく。先に進むぞ。両親は不明。一応、ホメムとマトの間に生まれたことになっているが、真偽は怪しい。非常に珍しいケースだからな。両親の名は、父親の方がマトでシーザー、母親の方がホメムでアントワネット。これも怪しい。きっとでたらめだろう」

「それは通称名か？」

「サリ本人の本名がわからないのに、親の方がわかるはずがない」

探偵がサリの住所を読み上げた。

「もちろんIDは不明だ。といっても、わかっているのもこれは教えられないがな」

探偵は、自分の音声は自動監視システムにスルーされるようになってはいるが、万一つてこともある、と弁解した。

「さて、先の疑問だが。どうぞ」

「まず、再生記録がないとは、どういうことだ？」

「言葉通りだ。記録はない。再生されたことがないという意味ではない」

「調べられなかった、というべきではないのかな」

「私の調査力は、この業界随一だ」

「それは失礼した。でも、業界なんてものがあるのか？」

「あんたは私の友人であり、顧客だ。しかし、答えられないこともある」

生駒は、ため息が出そうになった。

この探偵は、信頼できる男である。

生駒が友と呼べる数少ない人物でもある。

精神が壊れかけたアギが多い中で、この男は六百年間も調査会社を経営し続けている。

生駒は探偵としてこの男と知り合ったのではなく、この男が書いた数百年前の人類大量地球退避事件を痛烈に批判する論説を読んだことがきっかけだ。

生駒は、その論説に賛同の意見を寄せたのだった。

正義の男であると思っている。

しかし言葉に、妥協や思いやりがなく、刺々しいのだ。

生駒自身もそうだったが、アギとなって数百年も経つと、元の自分のままでいることが難しくなってくる。

言葉が刺々しいくらいはいい方だ。

義務として課せられているマトらとの面会を除いて、社会との接点を捨ててしまったものも多い。

以前は盛んに連絡を取り合っていたものも、多くは消えていった。自らデータを消去してしまったのか、政府によって削除されたのかはわからないが、思考のみの存在で生き続けていくことは、思いのほか難しいことだった。

たとえば聖人君子であろうと、世界的に有名な学者であろうと、稀代のエンターテイナーであろうと。

残っているものも、忍び寄る狂気に立ち向かわねばならなかった。

今の自分の思考が、正常な状態で連続したものなのかどうか。それが、わからなくなっていた。

普通なら、昨日の思いは今日に引き継がれ、明日に繋がっていく。自ら決めた起床時間に、コンピュータのスイッチが入り、思考が始まり、時間になるとスイッチが切られて思考は中断される。

起床時や就寝時は、人として生きていたときの同じように、ゆっくりと覚醒していき、眠りに落ちるがごとくに思考が薄れていくようにプログラミングされているとはいえ、その決まりきったパターンに、誰もが正気を失っていく。

生きた肉体を持つマトにも、同様のことが言えた。

アギほどではないにしろ、彼らには彼らの悩みがあった。

本人達は悩みだと感じてはいないのかもしれないが、次々と失われていく記憶に、本来の自分を見失っていったマトをどれほど見てきただろうか。

綾もそうだった。

彼女がマトとなり、アギとなった生駒と連絡を取りながら、ユウの手がかりを求めて生きてきたのは、わずか百年。

しかし三度目の再生を機に、綾の記憶から、生駒やユウの部分が消えた。

再生した綾を探し出すことはできたものの、記憶のなくなった綾にこれまでのいきさつを話しても、彼女が以前の綾に戻ることはなかった。

そしていつしか、行方がわからなくなった。

思い出すことを止めた者。

考えることを諦めた者。

自分が何者かを思い出せなくなったとき、人は往々にして人間としての尊厳さえも失っていく。

アギにとってもマトにとっても、よほどの強い生きる目的がなければ、退行はあっても進化はないのだ。

そんな彼らとの面談。

縁もゆかりもない「息子や娘」との面談。

しかし、それは苦痛ではなく、逆説的ではあるが、生駒にとって自分の正気を保つ意識付けとなっていた。

生駒にとっての唯一の希望。

生きる目的。

それは、幸せだったあの三人の暮らしを実現すること。

同じような暮らしは望めないまでも、どうしていたのさと言いつて、笑いあうこと。

記憶をなくした綾はもう無理でも、ユウだけはなんとしてでも探し出して……。

きっと彼女は、どこかで生きているはずだから。

そんなちっぽけな望みだけを頼りに、生きている。

建築家としての夢や、様々な望みはすべて消え去った。

あの幸せの感情を一瞬でもよいから味わいたい。

ただそれだけを胸に、変わっていく世界を見つめているのだった。

サリという兵士を詳しく知りたいと思ったのも、サリのしぐさがユウのそれに似ているような気がしたから。

ただそれだけのことで、生駒は望みを繋いだ。

そうして、自分の生きる力を振り絞っていた、といってもよいだ

ろう。

英知の壺に向かうのも、記憶を味わうためだけでもない。六百年ほど前、日本の金沢郊外で、光の柱の守人、当時は女神と呼ばれる存在となったユウに出会った。

あの頃と今の光の柱は、機能も規模も大きく変わっている。しかも、日本のそれは今はない。

ユウが今もどこかの光の柱の守人である確証はまったくなかったが、もしやひとかけらのヒントが落ちてやいないか、と思うのだった。

「ホメムとマトの子供というのは、制度上はあるが、近年そういう例はないのではないか？ いや、数百年ないのではないか？ 聞いたことがない。そもそもマト同士の出産も、最近はほとんどないと聞いている。ホメムとマトとは……」

「さっき、非常に珍しいケースだと説明した」

「生きる世界が違いすぎる。接点がない。生きる目的が違う」

「昔流の言い方をすれば、王女と野獣だな。疑問はそれだけかな？」

「待て。アントワネットというホメムのことは、なにかわからないのか？」

「今、地球上にホメムは六十七人しかいないといわれている。一説にはもっと多いというものもあるが、それは荒野の果てに潜む妙な宗教の狂信者どもを含めてのことだ。逆にもっと少ない、最悪の場合人類はすでに絶滅しているというものまでいる。私は六十七人が妥当なところだと踏んでいる。そして私は、その六十七の通称名も本名もそらんじることができる」

「で、アントワネットは？」

「いない」

「どういうことだ」

「私が言えるのは、ここまでだ」

「おい、ちょっと待て。これじゃ、サリのことを何も知らないのと同じじゃないか」

「だから最初に、成果の乏しい仕事だといった。後は自分で考えてみることだ」

「あんたが入手しているデータは、データとしては正しいかもしれないが、必ずしも真実ばかりを記載してあるわけではない。そう考えてもいいか？」

「では、今回は相当の値引きをして三百四十クロを振り込んでくれ」

参照したデータ、あるいは聞き込みなのかもしれないが、得た情報とは間違っている。

探偵は、言外にそういつて通信を切った。

生駒はそうに理解した。

ホメムとは、数百年以上前の世界戦争で生き残った男と女が、肉体的なセックスによって生まれた子供が最初の起源である。

その後も同様に子供を生み、育て、寿命が来ては死んでいくサイクルの中にいる、真正の人類のことである。

その数は減少を続け、今や風前の灯といわれて久しい。

六十七人という数字は、生駒も聞いたことがある。

しかも、いずれも超後期高齢で、人類の滅亡は避けられないというのが通説だ。

だからこそ、アントワネットと記載されたホメムは何らかの方法でマトの男性と接触し、自分の子を宿したというのか。二十五年前とはいつても高齢の女性が？

しかも生殖機能を失いかけたマトと？

ありえないことではないかもしれないが……。

生駒はホメムの姿をもう数十年以上見たことがない。ワールド暦五百年を祝う式典に姿を見せた背の曲がった老夫婦を、モニターで見たのが最後だ。

彼らがどこに住み、どんな暮らしをしているのか、またどういう血縁関係にあるのかないのか、なにも知らない。

彼らが「ヒト」としての、自然な血統を守り続けている人々である、ということを想像してみるだけだ。

いや、おかしい。

アントワネットが命を賭してまでマトの子を生んだのなら、その子をメルキトとするはずがない。

制度上はメルキトということになるだろうが、兵士として育てるはずがない。

たしかに現在の兵士は、実質的にメルキトとマトのみに開放されている職業だが、あまりに危険で、言い方は悪いが、しかたなく就く職業である。

戦争のない世界になってからというものの、めったに襲ってこない散発的な敵の攻撃から街を防衛するのはもっぱらコンピューターとマシンに頼ることになり、彼らの仕事は、いわば有用金属回収業者なのである。

推測の域を出ないが、ホメムであるアントワネットは自分の子を、ホメムとして扱うこともできるのではないか。

制度上はメルキトだとしても、記録を改竄して……。

おかしい点は他にもある。

もし、誰かが何らかの事情でサリの素性を隠そうとしたのなら、

濃い茶色の瞳と白い肌を持った輝くような金髪女性、というのは変だ。

あの世界戦争で、世界の人口分布は大幅に変わった。

中国、インド、アメリカ、EUという大きな人口を持つ国々の内、アメリカとヨーロッパの人口は壊滅といえるほどの減少を見た。

現在のホメムの祖先は中国人、インド人、ナイジェリア人、ブラジル人が中核をなしている。

わずか六十七人にまで減少した人類の中で、ヨーロッパ系の人々が純血として生き残ってきたとすれば、非常に珍しいことになる。

そんな目立つ特性を、サリに付与したとは考えにくい。

いや、だからこそ、濃い茶色の瞳と白い肌を持った白銀のような髪を持った女性、というのは真実なのだろうか。

もうひとつの可能性。

クローン。

製造を、そして生存を禁止された生体。

技術は数百年前に確立している。

しかも、クローンなら、生体の性質はいかようにも変えることができる。

肌の色といった表面的なことはもちろん、生体の内部構造も人としての性格も。

そして、本人の意識とクローンの意識を同期させることさえできる。

ただ、極めて高度なアンドロを製造できるようになり、人そのものの再生技術も進んだことから、クローンの需要はなくなった。

ただ、何らかの目的で、自分のクローンを作るものがあることも事実だ。

彼らは政府の厳しい目をかいくぐってクローンを作るが、アンダーグラウンドや宇宙空間に浮かぶ非公認の研究所に支払う高額な費用と、万一露呈したときに自分の身に及ぶかもしれない危険を考えると、割に合わないといわれている。

サリがクローンである可能性はあるだろうか。
誰のクローンなのだろう。

しかしその誰かは、危険を犯して作ったクローンを兵士にするだろうか。

そうすることによって、何が得られるというのだろうか。

生駒は、その可能性は考慮に値しないと思った。

生駒は、サリがユウであることの可能性を吟味した。

メルキトという情報が正しければ、ユウではない。

ユウはマトとして扱われるはず。

万一、光の柱の守人、つまり女神という特殊な立場を利用して、肉体再生人間とはならず六百年を生きてきたとしたなら、ホムムとして扱われるはず……。

だが、地球にはそんな技術はないはず。

神でない限り。

ユウの瞳は黒だし、肌の色は白ではない。

髪は黒だ。

ただ、探偵の情報が間違っているなら、話は別だ……。

生駒はむなしさを感じた。

結局、なにもわかつちやいない……。

しかし、やはりサリという娘に会ってみたいという気になった。

11 ガラスの心

ガラスのジェネレーション……。

そう、私は十七のときから、そのまま。

でも、私の心にあなたが付けた痣は、日毎に大きくなっていく。
少しずつ形を変えながら。

サリとあなた。

心を揺らす、まぶしいシーン。

もう、私を構ってくれないのね。

大丈夫かって声を掛けてくれても、また行ってしまうのでしょうか。

あの日、途方にくれた私を、一緒に来るかって誘ってくれたのに。

私の入隊をあからさまに嫌がる兵士に向かって、こいつは森の妖精かもしれないぞ、って言うてくれたのに。

そう、私の髪を見たことがあるのは、サリとあなただけ。

私はいつの間に、恋をしたのだろう。

あれ？　これって恋？

サリとあなた。

チャーミングで聡明で、頼りにされている彼女に比べて、私は無

邪気なだけのおばかさん。

でも、うらやましくなんてないわ。

それは本当。

だってふたりは、私の大切な人だから。

夕闇が迫っている。

薄い雲が広がる空は茜色。

コンクリートに白い耐候性塗料を塗っただけの街並みも、この時間帯だけは少しだけお化粧をする。

いつもと変わらない人並み。

あちこちから聞こえる、呼び込みの声。

食事はどう？ いい席があるよって。

本当はせわしない時間帯のはずなのに、なんとなく、間延びした声。

そうだ。

パパが言うように、落着かなくちゃ。

でも、落着くって、どうすればいいんだろ。

こんな気持ちは、簡単には振り切れないよ。

「チョットマ！」

突然呼び止められて、我に返って振り向いた。

「そんな格好で、何を急いでいるんだい」

ひよろりと背の高い男が、ジェラートを売っている店の看板の脇に立っていた。

グレーのジャケットを着込んで、いかにも勤め人風。

マスクも付けず、浅黒い肌を見せている。

「その眼鏡で見ると、僕の体はどう見えるんだい？ まさか素っ裸にされているんじゃないだろうね」

「えっ」

と、意識した瞬間、自動的にハイスコープのスカヤナーのスイッチが入って、男の表層が消え、肉体が浮びあがった。

同時に、非武装であることの証拠に、男の肉体の輪郭線が緑色に

光り、全体が白っぽく透けて見えた。

あつ。

私、戦闘服のままだ！

それに、いろんなことを考えながら、街中をわけもなく走ってた！

「そんなことは……」

チョットマは、あわてて裸眼モードに切り替え、なにか用なの、
と言おうとした。

しかしその前に、男は既に背を向けて立ち去ろうとしている。
ちっ。

チョットマは心の中で舌打ちをしたものの、気が変わった。

この若くてぶしつけな男は、いつも不思議なタイミングで声を掛けてくる。

街には数十万人が住んでいるはずだから、生活圈が一緒でなければ、そうめったに知っている人に出会うことはない。

チョットマが住むハンプット通りは街の南門に近く、隊の仲間とはよく出会う。南門、つまりブルーバード城門の周辺に隊員達は住んでいるから。

サリの住まいも目と鼻の先。

しかし、この男は街の北部に住んでいるし、職場もそうだと言う。そんなに簡単に、ばったり出くわすなんてことはないはずなのに。

まるで、私を監視している？ と感じたりもする。

それに、たいしたことを話すわけでもなく、たいていは今のよう
に、ひと言ふた言、いいたいことだけ言ってどこかに行ってしまう。

ふん、なんなのさ。

チョットマがこの男に持っている印象は、ただそれだけ。

自分から何かを話したことなど、一度もなかった。

しかし、チョットマは今回ばかりは聞いてみようという気になった。

こいつなら、もしかして。

「あっ、ハワード、待って」

言ってしまったから、やっぱりやめたほうがよかったかも、という思いがした。

なにしろこの男、得体が知れない。

はっきり言って、嫌いなタイプ。

粘着質ではないようだが、いつ、態度を豹変させるか、わかったものじゃない。

そんな気がする。

それに、私の装備。

街の中で武装することは禁じられている。

今からでも城門近くのロッカーに戻って着替えた方がいいだろうか、という思いがかすめる。

その規則はそれほど厳格ではない。治安部隊に誰何されることはあっても、ペナルティが科されたという話は聞いたことがないが、こいつは私服の治安要員かもしれない。

ありえるな。

私の都合の悪いときに限って、声を掛けてくるような気がする。

「ん？ なに？ 珍しいな」

「何が珍しいの？」

睨みつけてやるが、こいつに私の瞳は見えていない。

こういうとき、装備は便利だ。

「君が、僕と話したいってことがさ」

「話なんてないよ。少し聞きたいことがあるだけ」

「ふうん」

男は、二、三步近付いてくると、

「ここで聞いていいことかい？」

と、声をひそめた。

街の監視システムは、画像だけではなく、音声も聴集していると
いう。

その頻度は高くないとは言われているが、男はそのことを気にし
ているみたい。

「とういうか、その前に、せめてそのいかついヘッダーは外してく
れないかな」

「治安部隊に見咎められるのが怖い？」

「まあね」

不良分子と同等に扱われるかもしれない状況が、いやだというの
だ。

自分の身の安全のために？

それとも私の？

どちらでもいい。

「うん。ここで」

チョットマはこれまで、監視システムの存在をそれほど気にした
ことはない。

とはいえ、政府に聞かれて困るような話題もなかったが。

むしろこの男と、どこかの民間簡易シエルターに移動することの
方が、ごめんだ。

「じゃ、どうぞ」

勿体つけた態度で、男が小首をかしげて聞く姿勢になった。
ふん。ちよつとばかり背が高いからって。
チョットマに合わせて、長身をかがめている。

チョットマはヘッダーを外し、ついでにハイスコープも外した。
インナキャップはもちろん被ったまま。

この男に、素肌を見せることはない。

街の中でいつも身につけているインナキャップは、もう少しオシヤレなものだが、今被っているのは戦闘用のキャップ。

高性能のナノカーボン製。

真っ黒な海坊主のような代物で、目の位置には平面的な樹脂が嵌まり、口にはフィルタの付いたシリコン製のマスク。

まるで妖怪人間。

少し恥ずかしいが、一応は礼儀を示して。

「知ってるって思うけど、サリの行方を捜してるの。なにか、知らない？」

この男は、サリのことを知っているはず。

以前、サリとこの男が街角で話しているのを見かけたことがある。

「サリ？」

しかし、男はとぼけてみせた。

「誰のことだい？」

チョットマの心に、ずしりと怒りの感情が湧いたが、それをぐいっと押し流すと、穏やかに聞いた。

きつと、目は釣りあがっているだろう。

「私と同じ隊に所属する兵士よ」

「君と同じ隊の？ そんな人は知らないな」

じゃ、あれはなんだったのよ！

あの日、立ち話をしたじゃない！

しかし、チョットマはそんなことを問い詰めたりはしなかった。

あなたはプレイボーイね、と思ってるなんて受け取られたら、さつき湧いた怒りを抑えきれなくなるかもしれない。

「もう、いいわ」

チョットマは背を向けて、ブルーバード城門へ戻り始めた。

自分の部屋は、もうすぐ近くだったが、この男に後を付けられる恐れもあると思ったからだ。

それにサリの部屋にも、もう一度寄ってみたいと思った。さつきも見に行ったが。

うれしいことに、男は後を追ってこようとなしなかった。

ああ、無性に、あなたの声が聞きたくなったよ。

「ねえ、ンドペキ」

チョットマは、スマートモードで声を掛けた。

特定の人物と話すときに使うモードだ。ハイスコープを装着しないと使用できないが、兵士は戦場はもちろん街の中でも常時身に着けているものなので、繋がるだろう。

「どうした」

そっけない返事がきた。

声が少しざらついている。

チョットマの心の痣が、また少し大きくなった。

「人は、部屋の中で死んだら、再生はされる？」

再生はされる。

完ぺきに政府の監視網を逃れることができるなら話は別だが、ど

んなジャンクショップに行っても、それほど高性能な通信遮断素材は売られていない。

どの部屋もどの店も、ハイスペックシェルタなどと銘打った製品を使用しているが、そんなものは本当は役には立っていないのだ。

遮断できるのは、可視光線とその周辺の波長の光、そして数デシベル以上の音、汎用周波数の電波だけなのだ。

現に、兵士が使う通常の通信は、部屋の中にいようが、レストラのプライベートルームにいようが、どこにいても繋がる。

そんなことくらい、チョットマも知っていた。

ただ、ンドペキ、あなたと話したかっただけ。

「おいおい、何を言い出すのかと思ったら、そんなことかい」

ンドペキの声が流れてくる。

鼻にかかった少し高い声。小さな蜂の羽音のような。

夕方になる前のけだるい午後を、もっとやるせない雰囲気に変えるような声。

でも私は、戸棚の奥にしまいこまれた甘いリキュールを盗み飲みしたときのような気分になる。

甘くて、怖くて。少し後ろめたいような。

「当たり前じゃないか。俺達は、死ねないんだよ。たとえば、本人が死にたくなってもね」

ただ、チョットマはンドペキの生の声を聞いたことがない。

聞くのは常に、マイクを通し、一度は電波に乗った声だ。

本当の声は、どんなだろう。

「自殺したら、恐ろしい刑罰があるんだよね」

チョットマは、雑談でもいいから、ンドペキの声を聞いていたい

と思った。

「通称、悪魔の海と言われているな」

ンドペキが蜂の羽音で解説してくれた。

「気を失うほどの痛みが全身を間断なく襲ってくる。そして、人は我慢できず数秒後に死ぬ。しかし、一秒も待たずに再生され、たちまちまた痛みのために死ぬ」

「うん」

「それが永遠と繰り返される。そんなとんでもない液体が詰まったタンクに放り込まれるのさ。それにその刑罰は、何十年も続くんだ。終わりのない永遠かもしれないけどね」

なぜ、自殺という行為がそれほどの悪なのか、チョットマにはわからなかった。

一昔前の宗教の影響だということらしいのだが、生死さえ自分で決められないようでは、自由なんて無いのも同然ではないか、と思うのだった。

「詳しくは知らないさ。その刑罰が実際に行われているのか、いないのか。だれも経験者がいないからね」

そういつてンドペキが、久しぶりに笑い声を聞かせてくれた。小さな笑いだった。

「だからね、チョットマ」

「うん」

「サリが自分の部屋の中で自殺して、再生されないまま死んでいる、なんて想像はしないほうがいいと思うよ」

そんなことはありえないし、もしそうだとすれば、恐ろしくて悲しい想像をしなくてはいけなくなる、というのだった。

「うん」

チョットマはンドペキに、何かを言いたかった。
でも、それが何なのかがわからなかった。

「チョットマ」

「はい」

え、なに？

何を話してくれるの？

声を掛けてくれたものの、ンドペキもなかなか次の言葉を発さない。
もどかしい時間。

今、どこにいるの？ と、聞いてみたい。

もちろん、会いたいから。

でも、チョットマは、自分にそんな勇気がないことを知っている。
心の痣がまた少し大きくなった。

チョットマは既に着替え、ゆっくりと通りを歩いていた。

いつのまにか、サリの部屋の前に来ていた。

他の部屋と同じように、窓もないし、明かりが漏れ出るという構造ではない。白い壁に分厚いドアがついているだけ。

外見からは、在宅の有無は、全くわからない。誰が住んでいるのかということさえわからないのだ。

チョットマは、ンドペキの次の言葉を待ちながら、サリの部屋を見つめた。

モニターには、サリがこの部屋に在宅していないことを告げている。ジープイエスに反応はないということなのだ。

「サリのこと。おまえが気落ちしているのは、痛いほどわかるよ」

「……」

「でも、わかっていると思うけど、僕らは悲しみを共有している。」

俺も、マスターも。隊のみんなが」

「うん」

熱いものが、胸に込み上げてきた。

「じゃ、切るよ。元気出させて言っても、出てこないけどね」

「うん、……あ、待って」

「なに？」

「ねえ、私を……、えっと、これからよろしくお願いします」

「なんだ、それ。当たり前じゃないか」

とそのとき、チョットマはサリの部屋を見つめている、もうひとりの者の存在に気付いた。

あっ、ハワード！

あいつ、何を！

「ンドペキ！ ちょっと待って！」

今、サリの部屋の前に、という言葉の前に、既に、通信は切れていた。

もう何度呼びかけても、リキューの後ろめたさは戻って来てはくれなかった。

12 心を伏せた声

コーヒーカップを手にはオフィスの自席に戻ると、コンピュータが警告ランプを点滅させていた。

自動監視が、マーキングした人物コードを送ってきていた。要注意Eレベルとある。

私が担当している市民数は二十万人。

一人の監視員が特定人物群を担当するのではなく、監視員は重なり合っているのです、世界中の誰もが三人のオペレータから監視されている計算になる。

人の目による監視の前にコンピュータによってスクリーニングされるのだが、そのアルゴリズムは十一個用意されている。何らかの言葉が、あるいは行動がコンピュータに引っかけると、監視員に知らされるのだ。

コンピュータがなぜ要警戒、要注意と判断したのかは、ほとんどの場合、知らされることはないが、今回はその理由が明示されていた。

「英知の壺 訪問異常」

「誰がどこに何回行こうが、いいじゃない」

と、私は心の中で毒づいてから、その人物IDにアクセスした。

英知の壺で見る夢は、その人自身の過去であることが多い。

監視員も同じものを見ることはできるが、さすがに気が引ける。会話を盗み聞きすることも同じようなものだが、それでも文字としてデータ化されていることで、罪の意識は薄まる。

しかも、この人物は要注意Eランクでもあるし、緊急度は低い。まず、その人物が誰かと交わした会話のアーカイブを表示させた。

はいはい。あなたは誰？

誰とどんなお話をしたの？

それにしても、まずいコーヒーね。

本物のコーヒー豆を挽いて作ったコーヒーの味や香りなど、とうの昔に忘れてしまったが。

私は適当に選んで、ひとつのデータを開いた。

アーカイブの中には、兵士との面会時の会話が並んでいた。

ひとつのフリーズが目に飛び込んできた。

私は思わず叫びそうになり、コーヒーカップを取り落としそうになった。

「かつて愛した二人の女性を、僕はずっと探し続けている」

「ええーっ、ふたりも！」

「ハハ、ひとりは僕の恋人。もうひとりは、なんていうかな、娘といわせてもらってもいいだろう」

「へえ！　なんていう人？　私はすぐに忘れてしまうけど、パパなら何百年経っても覚えているんでしょう」

「もちろん忘れるものか。サンジヨウ　ユウ。そして娘は、タチバナ　アヤという」

私はこの部分を何度も何度も、読み返した。

「サンジヨウ　ユウ」と「タチバナ　アヤ」

橘　綾……、私の名前……、本名をこの男性は……。

何度も読み返した。

ああ、もう間違いない。

これは……。

溢れ出した涙が、頬を伝っていく。

やっと……。

会える……。

おじさん！

私は同僚に見られないように、すばやく涙を拭き取ったが、次から次へとこぼれ落ちる涙をこらえることはできなかった。

しかし、気を取り直すと、この会話を交わした二人の人物のIDを凝視した。

監視室には筆記用具は持ち込めない。

他人のプライバシーを盗み見る場所なのだ。

いかなる理由があっても、データを持ち出すことは許されない。

もちろん、自分のポータブルコンピュータにも、どのような形であれ、記録に残すことはできない。

そんなことをしても、どこで探知されてしまうか分かったものではない。

おじさん！

今すぐに会いたい！

それが無理なら、今すぐ声を聞きたい！

どこでもいい！

コンフェッションボックスに駆け込みたかったが、センターのそ

れは利用できない。

センターのボックスは、不良な「アギ」を接触監視するため、あるいは囲捜査として使用するものであって、確実に利用記録が残るからだ。

私は業務時間が終わるのを、今か今かと待った。

通常業務を何食わぬ顔で処理しながら。

覚えた二つのIDを忘れないように、繰り返し繰り返し反芻しながら。

頭の中を、いろいろな思いが駆け巡った。

出会いの日々。楽しかった日々。失意の日々……。

そして、おじさんと話し合ったこと。

おじさんはアギ。つまり、記憶のヒト。

私はマト。つまり、肉体のヒト。

私は、本当はアギになりたかった。

その方が私の性格に合っていると思ったから。

でも、私達にはひとつの目標があった。そのためには、おじさんと私は別々の道を進んだ方がいい。

そのことを決めるのに、議論の必要はなかった。おじさんがマトになって、いいことはひとつも無かったから。

おじさんに言われるまでもなく、私はマトになることを選んだ。

しかし、想像していた以上に、マトの、つまり私の記憶力は貧弱だった。

どんなに頑張っても、思い出せない事柄が多かった。

というより、思い出さなければならぬことがある、ということ自体が思い出せなくなっていた。

そしていつしか、おじさんのことを忘れ去った。

同時に、おじさんと交わした約束も。

そして、私がマトになった理由も。

あの日、あんなことが起こなければ、大切なことを忘れたまま、薄っぺらな思考力の中で小さな暮らしを続けていたのだろう。

夜十八時、仕事帰りの人並みの先頭に立って、私は何食わぬ顔で街に出た。

トゥーアロードのもっとも賑やかな街角で、ボックスに入った。

IDを打ち込む。

指が震えている。

何を、どう話せばいいのだろう。

あの会話の断片を見つけてから、そればかり考えていたのだが、最初の呼びかけ方が分からなかった。

心を決めかねていた。

すでに、五百年ほどの年月が流れている……。

自分の業務として、センターでの空き時間に、現在のおじさんの思考を盗み見ることはできた。

しかし、私はそうはしなかった。

もちろん作業記録が残り、それを見た者に不審を抱かせるかもしれないということもあるが、自分の父親代わりになってくれた、愛してやまない人のIDをデータベースに打ち込むことはとてもできなかったのだ。

なにより、おじさんに謝らなければいけない。

どんなことがあっても私が守るといったにもかかわらず、わずか百年も経たぬうちに、その名さえ忘れてしまったのだから。

声が震えた。

「こんにちわ」

そんなありふれた言葉で、私はおじさんに話しかけた。

モニターの向こうには、初老の男性が写っていた。

頭髮は半ば禿げ上がり、貧相な体格をしている。

しかし血色はよさそうで、かすかに微笑んでいた。

昔と同じように墨色のTシャツを着ている。

私の容姿は、おじさんが覚えていた昔の私のままだろうか。

「はい。こんにちわ」

声が返ってきた。

ああ……、おじさん……。

思わず声になりそうになったが、私はあくまで他人行儀な挨拶をした。

「お久しぶりです。パパ」

私はコンフィッションボックスの機能と、そこで交わされる会話を監視するコンピュータシステムの癖を熟知している。

どんなアルゴリズムの場合も、会話の最初の段階が重要なのだ。

「ん？ どなただったかな？」

「以前、街でお会いしたケイケイエムゼットです。お礼を言いたくて」

「ふうん」

「道を教えていただいて、助かりました。ありがとうございました」
冷や汗の出るでまかせだったが、システムの監視モードがランクダウンするのは、約千文字以降だ。また、無言が続いたり、脈絡のない話もまずい。唐突に地名や人名などの固有名詞が出るのもNGだ。

「昨日、面白いことがありましたね」

「……」

「街角にお花が咲いていたんですよ」

「……」

「珍しいでしょ。あるお店の前で。そのお店の主人か奥様が、育てておられるんでしょうね」

実際、街の中で植物を見かけることはまずない。

私が勤めているセンターなど、政府系の建物の中庭などでは花壇があったりもするが、個人で花を育てるというようなことはない。切花は生産されているが、一般市民が購入できる金額ではない。

この話題を選んだのは、おじさんが興味を持ってくれるのではないかと期待したからだ。

植物や自然が好きだったから。

木々の話ならなおさら良かったが、残念ながら、街中に樹木というものがない。

お入り、と言ってくれなければ、部屋に入ることはいできない。モニターの画面を見つめるだけだ。

おじさんはそうは言ってくれない。

肉体のないアギでも、たとえばバーチャルの空間であっても、見ず知らずの人を自室に招じ入れることはまずない。

しかし、かえってそれは良かったかもしれない。

なまじ完璧なリアリティを伴って面会すれば、我慢できずに抱きついてしまうかもしれない。

私は自制心を最大限に発揮して、無難な話題が途切れないように気遣った。

おじさんも、たあいのない言葉を、もう少し発してくれればいいのだが。

「へえ、どこで？」

地名を口にするしかない。

「アームストロング地区で」

もっと辺鄙な街の、何の変哲もない地区の名前を口にしたかったが、おじさんには私がニューキーツの街からアクセスしていることが表示されている。嘘の地名を使うわけにはいかない。

「そう。じゃ、僕も見に行ってみようかな」

「ええ」

しかし、花を見たというのは事実なのだ。コンピュータはスルーするだろう。

「じゃ、場所を教えますね」

私はできるだけ文字数を使うように、たった一輪の花のありかを説明した。

ついでにそれがどんな花なのかも。

「ところで、貴方は……」

おじさんの声に私は緊張した。
いよいよだ。

懐かしさがこみ上げてきた。

涙声になりそうなのをこらえて、私は答えた。

「おじさん。私、本当にごめんなさい……」

13 鉛筆立ての記憶

生駒はシステムが停止するかと思うくらいに驚いた。

娘の言葉の意味を理解するのに、数秒はかかった。システムの計算速度からすると、永遠ともいえる時間だ。

自分を「おじさん」と呼ぶ女性は、他にはいない。

まるで、自分の思考プログラムがクラッシュしたのではないかと思えるくらいに、なにも頭に浮かんでこなかった。

「まさか」という言葉以外に。

モニターに映っているのは、短い髪の若い女性。

白いワンピースを着て、赤いチェック柄のミニスカートと、膝上までのブーツを履いている。

兵士ではないし、街の娘とも違う。

政府系の機関に働く者が好んで使う色を身にとっていた。

髪は鮮やかな水色だったし、ブーツもその色だ。

清楚な印象で、理知的でもある。

モニタのネーム欄には「バード」という文字が浮かんでいる。

政府系の機関に勤めている者が、アクセスしてくることはまずない。彼らの中に、マトはほとんどいないからだ。

娘が再び、「おじさん」と呼びかけてきた。

生駒はあわてて部屋のロックを外し、お入りと言った。

部屋に入ってきたのは、もしかしてその人ではないかと……。どこかに面影があるようで……。

胸が騒いだ。

何とか平静を保とうと、誰にでも言う同じ台詞、「好きなところへお座り」と声を掛けた。

娘は、まっすぐ歩み寄ってきた。

チョットマがいつも座る椅子の背に手を掛けたが、座ろうとはしない。

生駒は混乱していた。思考が安定しない。

目の前にいる娘は……。

もう数百年間、捜し求めていたアヤではないのか。

なんとなくではあるが、目元にその人らしさがあるような、と。反面、ジョークではないか、罨ではないか、間違いではないか、何らかの諜報活動ではないか、という意識も捨てきれないでいた。

いや、やはりアヤだ！

しかし、自分が持っているアヤの顔や姿を意識的に呼び出し、照合した。

体形は、顔立ちは、目は、鼻は、眉は、唇は。

そして声は。

娘は、椅子の脇に立って、こちらを見ている。

いや、もう見えてはいないだろう。

目には涙が溜まって、今にもこぼれ落ちそうだった。

そして、「聞き耳頭巾のアヤです」と言ったのである。

なんということだろう！

「アヤちゃんなのか……」

それだけの言葉を発するのに、生駒は全神経を使った。

重すぎる言葉だった。

言い終わらないうちに、娘は駆け出してきた。
そして、飛びつき、抱きついてきた。

「おじさん、ごめんなさい！」と、叫びながら。

生駒は娘を思い切り抱きしめた。

腕の中の感触を確かめた。

そして、「アヤちゃん！」と繰り返していた。
もう間違いない！

頬ずりをした。

思わず唇が触れた。

アヤがその唇を押し付けてきた。

涙の味がした。

生駒は、そっとアヤの体を離し、目を覗き込んだ。

見つめ返してきた目は、彼女が子供だったときのよう、かつて
同じ部屋で寝ていたあの頃のように、無垢な信頼感で満ちていた。

生駒が心を震わせた数々の思い出の日々……。

そして、彼女が大人になってから見せていた、ひたむきな愛情も、
瞳の中に溢れていた。

生駒は、もう一度、アヤの頬を、目元を、口元を、髪を撫でた。
その手にアヤの手が添えられた。

なにも言葉にならなかった。

どんな言葉も、今は空虚だった。

言葉だけではない。

頬ずりしようとも、手を握ろうとも、キスしようとも、今の喜び
は言い表せないだろうし、心の震えを抑えることはできなかった。

「ごめんなさい、私……」

生駒は水色の髪を撫で続けた。

「おじさんを守るなんて、偉そうなことを言っておきながら、忘れて……」

言葉を搾り出した。

「ううん。信じていたから……」

「おじさん、私ね……」

両手を頬に添えて、また瞳を覗き込んだ。

「何も説明しなくていいよ。来てくれただけで、心がいっぱいだ」

アヤの目に初めて笑みが浮かんだ。

生駒も微笑んだ。

「話したいこと、聞きたいことはたくさんあるけど、また来てくれるんだろ」

「もちろん。これからはまた、家族のように」

生駒はそれからアヤを抱きしめ続けた。

記憶としてしまい込まれた思い出ではなく、今、腕の中にある生身のアヤの感触を確かめ続けた。

アヤもそうだろう。

ひとこと、「会えてよかった」と言っただけ、きつく抱きついたまま、離れようとなしなかった。

アヤとの面会時間は、ちょうど三十分間だった。

それ以上いると、システムに不審がられるかもしれない。

アヤは、必ず明日また来る、と言った。だから、決して自分のI Dにアクセスしてこないで、と。

生駒ももちろん、そんなことをする気はなかった。

アヤは政府機関に勤めているという。アギの自分がアクセスするという稀なことをして、彼女の身にいい影響があるはずがない。

家族のように、と言ったアヤの言葉を信じないようでは、親ではない。

アヤは「じゃ、パパ、また来るね」と、決まり文句を口にして出て行った。

アヤが出て行ってからである。

本当の感激がこみ上げてきたのは。

生駒は、アヤが出て行った扉を見つめて、立ち尽くした。

バーチャルとはいえ、肉体を持った状態である。涙が流れていることに気づいた。

涙を流す感触を味わうことが、それが喜びの涙であればなおさらのこと、これほど心地よいことだったとは。

あの声、あの表情……。

彼女が中学生だった頃、学校から帰ってきては、今日あったことを、口の回りが追いつかないほどの勢いで次々に話してくれたあの頃。

叱られて、トイレに籠って泣いていたあの頃。

夕飯のカキフライを食べながら、少しずつ悩みを打ち明けてくれた高校生の頃。

バイト仲間とのカラオケが楽しかったといっっては笑い、就職の面接が上手いかなかったといっっては泣いていたあの頃。

そしてなぜか、急によそよしくなった朝。

酔った勢いで抱きついて、身をよじって逃げていったあの夜。

彼女と一緒に過ごした日々。

大阪のマンションの一室での日々が思い出された。

アヤが工作で作った紙粘土の魚はいつまでも洗面台の上に飾られていたし、アヤの作った鉛筆立てを生駒は最後の日まで使い続けた。

結婚に夢破れ、泣きながら家に帰ってきたとき、アヤは初めて生駒をパパと呼び、また一緒に暮らしていいですか、と聞いたものだ。その幸せは永遠に続くかと思えるほど、平凡でなにげなく、春の日の木漏れ日のように柔らかな暖かさに満ちていた。

そんな暮らしが一変したのは、アヤの離婚が正式に成立した翌年の暮れのことだった。

優がいなくなったのである。

アヤは自分が帰ってきたことがその原因ではないかと感じ始め、たった二人となってしまった小さな家族の関係はグクシヤクし始めた。

それからの重苦しい二十数年の日々。

そして生駒がアギとなり、アヤがマトとなってからの百年間。

それはいずれも遠い過去であったが、鮮明な記憶となって生駒の肉体を駆け巡った。

アヤは、実の子ではない。

昔、生駒と優が半同棲のような状態で大阪に住んでいた頃、京都の山奥の村で知り合った。

その村で殺人事件が起き、アヤの力を借りて事件の解決に貢献したのだった。

村に住んでいたアヤの父親が亡くなり、村のある家庭の養女となったのだが、その養母がアヤの将来のことを考えて、生駒の元に預

けたのである。

アヤは、村の長老である大婆が認めた聞き耳頭巾の使い手である。その頭巾をかぶって心を澄ませば、木々の声や鳥の声の意味を知ることができるのだ。

聞き耳頭巾をめぐって、アヤと交わした数々の言葉。

中でも、アヤを真ん中にして、優と川の字になって寝た夜ことは、生駒の生涯にとって、忘れられない思い出となった。

初めて見た子供の瞳の美しさ。

かげりのない信頼と愛情の色。

ひたむきに生駒の言葉を待っている黒い透明感。

そしてその視線が自分から外れたときの喪失感。

あの夜、生駒は、子供を持つということがこれほどの幸せに満ちたことなのか、と初めて知ったのだった。

ふと生駒は、聞き耳頭巾はまだあるのだろうか、と思った。

作られてからゆうに千年は経つ。

アヤは、特殊な樹脂製の繊維を編みこんで補強したと言っていたが。もうそれも、数百年前のことだ。

アヤが聞き耳頭巾をかぶった姿を最後に見たのは、優を訪ねて金沢へ行ったときである。

強烈な光に晒されて真っ白になった荒野を歩きながら、アヤは風の声を聞こうとしたのか、頭巾をかぶり、とぼとぼと生駒の後ろを歩いていた。

あの日を境に、生駒とアヤの人生は大きく変わった。

優が生きている、ということがわかっただけでない。

魔法かとも思えるような不思議な力を持ち、光の柱の守護として

働きながら、自分たち二人のことを案じてくれていることがわかったのだから。

それは生きる希望となった。

生き続けて優と再会すること。それが生駒の唯一の望みとなった。

だからこそアヤは、生駒を支え続ける道を選んだのだった。

生駒はアギとなり、決して失われることはない記憶を持って、優との再会を待った。

待つだけではなく、あらゆる手を尽くして優の消息を捜し求めた。アヤはマトとなり、実体を伴った行動で生駒の手足となり、世界中の町を歩いた。そして、あらゆる機会を見つけては、聞き耳頭巾をかぶって、優の噂を拾おうとした。

しかし、アヤの肉体が再生されるたびに、過去の記憶は薄れていた。

そのことに、アヤは悩み続けていた。

やがてアヤは二度目の結婚をし、子をもうけないまま再び別れ、徐々にアヤの心に砂混じりの隙間風が吹くようになっていった。

生駒にも、それがわかった。

そして、ついにその日がやってきた。

毎日、必ずなんらかのアクセスをくれるアヤから、連絡が途絶えたのだった。

アヤのIDは失われていた。

肉体は再生され、IDが変更になったものと、生駒は考えようとした。

まさかアヤが再生不許可になったはずがない。

ましてや自死を選んだはずがないから。

生駒は、優だけでなく、アヤも探さねばならなくなった。

しかし、その手がかりはあまりに乏しかった。

アヤがどこに住み、どんな名前を使い、どんな職業についているかも知れないのだ。

しかも、連絡が途絶えたということは、生駒のことも忘れてしまったということなのだ。

優と最後に会ってから六百年。

しかし、優がまだどこかで生きていて、自分のことを想ってくれている。

その確信になんら根拠はなかったが、生駒はそう信じ込むことによって正気を保ち、日々を送る糧としていたのである。

しかし、アヤの場合は、生死さえわからず、たとえ生きていたとしても、彼女にはすでに記憶がない。

アヤを探すことの現実的な難しさ以上に、取り組む意義を見出すことが難しかったのである。

あれから、五百余年。

生駒は自分の心の中を覗き込んでみた。

自分はアヤを探し続けていたか、と。

優を信じるのと同じように、アヤを心底から信じ続けていたかと。

その答えは明白だった。

生駒は再び、今度は少し味の違う涙を流した。

ただ、生駒は思った。

もう、過去のことはいい。

今まさに、アヤと再会したのだから。

さっきまで、この部屋にいたアヤのことを思わなくては。

彼女にしてやれることは、なんだろう。
それが、親として、自分の務めなのだから。

14 目玉親父の記憶

「パパ、明後日、ピクニックに行かない？」

「いいね！」

チョットマがいつもの椅子に座っていた。

「どこに行くか、聞かないの？」

「どこに行くんだい？」

「街の北東約120キロ、アップット高原」

「ホオ」

「実はさ」

チョットマが属しているニューキーツ東部方面攻撃隊総出で、サリの行方を捜しにいくのだという。

「会議は揉めたんだけど、隊長が押し切ったのよ」

会議は、街の南東に広がる、かつての大都市の跡で行われた。今は瓦礫に覆われたその都市に、数百年前のアリーナ跡があった。その残骸は広い空地となっているが、そこが第一部隊の拠点のひとつである。

敵が攻めてきても、広場の中央に陣取れば防戦しやすい。万一のときは、地下通路を通して他の地点に移動することもできる。

会議の出席者は、ニューキーツ軍中尉で隊長のハクシユウ、伍長が四人、ンドペキ、スジーウォン、コリネウルス、パキトポークの面々。ンドペキは副隊長でもある。そして書記として、チョットマが選ばれていた。

「どう揉めたんだい？」

「伍長の人たちは、いまさら現地に行ったところで意味はない、というのよ」

「うん、もう十日ほど経っているからね」

「そうなの」

中でも、スジューオンが最後まで行くことを嫌がったという。

「どういう人なんだい？」

「どうって、んー、戦闘派、かな。相手を倒すことに快感を覚えるような人」

「彼女、かな、は隊の中ではどういう役割？」

「個人的な、あるいは数人の戦闘では、もっぱら先陣で敵をバサバサやっつける役。隊の正式な軍事行動でも、スジューオンの率いる隊は一番危険な位置ね」

東部方面攻撃隊は総勢三十八名。

五つのチームに分かれていて、それぞれに六名から八名の兵士が属しており、それを束ねているのがンドペキラ伍長と呼ばれる四人のリーダーである。隊長であるハクシュウも、自分のチームを持っている。

兵士達の日常は、マシンを倒しレアメタルを回収するため、数人で作戦に出かけることが多い。

これは軍としての正式な行動ではない。あくまで小遣い稼ぎという位置づけだ。一般的に「狩」と呼ばれている。

軍としての正規の行動は、それぞれの部隊によって事情は異なるが、東部方面攻撃隊では十日に一度、全体行動を行う。

上層部である街の軍部からミッションが与えられることはないの
で、ハクシュウを筆頭とするミーティングで決められる。

隊列訓練と称しているのは、決められた隊列を守りながら部隊全員で目的地までできるだけ戦闘を回避しながら進軍する行動だ。また、戦闘訓練とは五つのチームに分かれて、戦闘を繰り返しながら、目的地で集合する訓練だ。ほとんどの場合、日帰りの訓練だが、時には数日の遠征も行うという。

「東部方面攻撃隊はもつとも優秀な軍だそうだね」

そうよ、とチョットマは胸を張った。

「ハクシユウが頑張りやさんなんだよ」

チョットマはそういつて隊長を茶化したつもりだろうが、彼女がハクシユウを尊敬していることは十分に感じられた。

「軍もなかなか辛いね。戦争がないのはいいことだけど、軍としての存在意義を持ち続けるのは難しい」

「戦争の経験なんてないわ。というか、人間相手に戦ったことなんてないし」

「うん、いいことだ。で、街の軍部というのがどういう組織なのか知らないけど、年に一度くらいは顔を合わせるのかい？」

「ぜんぜん。大体、名前さえ知らないし、何人くらいいるのかも知らないわ」

「この街には攻撃隊は第五部隊まであるけど、合同の演習なんてももあるのかい？」

「へっ？ なにそれ？ まったくないよ。人によっては、個人的な交流はあるかもしれないけど」

「つまり、君の部隊の規律というか、組織としてのまとまりというか、運営そのものは隊長のハクシユウの肩にかかっているということだ」

「そういうこと」

生駒は、そんな話をしながら、チョットマの申し出を受けるかどうか迷っていた。

彼女はピクニックという言い方をしたが、これはまさしく東部方面攻撃隊あがての公式な作戦行動だ。危険を伴う。

万一、生駒の目や耳であるフライングアイが壊されでもしたら、生駒自身にペナルティが科される。

普通の場合なら一ヶ月間の使用禁止処置程度で済むだろうが、軍の行動に便乗していたことが罰にどの程度影響するか、見当もつかなかった。万一、厳しい採決がなされたら、思考起動時間の短縮ということもありうる。

「そうそう、すごいことになったんだよ」

チョットマが目を輝かせた。

「会議で？」

「そう。どんなことだと思う？」

「見当つかないよ」

「顔を見せ合ったんだ！」

「へえ！ 兵士にしては珍しいね！」

「そうなの。ハクシュウがさ、ヘッドもスコープもはずして」

ハクシュウが東部の装備を外し、目や口元や素肌を見せ、伍長連中もそれに倣ったというのだ。

「君は？」

「ンドペキ達がそうしているのに、私だけがしないってわけにはいかないじゃない」

ハクシュウは伍長達と絆を深めようとしたのだ。

「マスクは？」

「さすがに、それははずさなかったよ。でも、私の髪、皆に見られちゃったし、声も聞かれちゃった」

「それは良かった」

「恥ずかしかった」

チョットマは、緑色で光沢のある髪をロングにしている。かなり目立つ。

「私さ、マスクとボディインナーはセパレートタイプのものなんだ。ボディの中に髪を入れちゃうと、頭が動かしにくいから、髪を外に垂らしているんだ。だからさ、見られちゃった」

「いいじゃないか」

「嫌なんだな。この髪の毛。政府の再生装置って、時々変になっちゃうでしょ。あれ何とかならないかな」

再生装置は万全というわけではない。完全再生はできないのだ。似ても似つかぬ者が再生されるというほどではないが、時として、一つ目の人間ができたりする。

そういう異形のは、兵士になって顔を隠す。しかし、次回再生されるときにはまた戻っていたりするのだ。

チョットマは、再生前の自分のことを全く記憶していない。

政府の再生装置の不備を嘆いているが、実は前の容姿がどうだったのか、知らないのだ。

生駒はからかってやりたくなかったが、チョットマは超の付く直情タイプの娘だ。容姿のことだからかつては、本気で怒り出すかもしれないなかった。

「昔はさ、髪は女の命って言ったものだよ。君ほどすばらしくて珍しい髪は、昔なら高く売れただろうな」

「慰めになってないよ」

と、チョットマは笑った。

「声も気に入らないんだけどさ」

チョットマの声は、ニワトリが叫ぶときの声のようだ。高いけれども、美しい声ではない。

特に、笑い声の甲高さは周りのものがびっくりするほどだ。

「そんなこと、気にしていたのか？」

「気にするよ。だから、会議では一言も喋らなかった。喋る必要はなかったけれどね」

チョットマは女の子なんだ。

生駒はそう思って、ますますいとおしくなった。

「僕は、今の君をとっても好きだけど」

「パパ、大好き！」

チョットマは、ンドペキやスジウオンなど、伍長連中のうわさをし始めていたが、反応の薄くなったことに気づいたようだ。

「ねえ、パパ、行かないの？ 娘が誘っているのに？」

娘にピクニックに誘われて、断る親がどこにいるだろう。

「どうやって一緒に行くつもりなんだい？」

「簡単よ。私のリュックサックに入っていけばいいよ」

「リュックサックか。そりゃいいね！」

戦闘服に身を包んだチョットマが、リュックサックなんて平和なものを背負っていくはずもないが、その表現がとても気に入った。

「いいでしょ！ パパは楽チンだよ」

「でも、それじゃ、外が見えないよ」

「へへ、実はね」

軍の行動を他人に話すことはできないから、と前置きをし、作戦行動のあらましに触れないように注意しながら、自分の任務について話してくれた。

チョットマはンドペキのチームに属しているが、今回の行軍では、チョットマは最後尾で補給班兼救急班なのだという。

「だから、荷物を持って、後ろからついていくだけなの。大八車の上にも括り付けておいてあげるわ」

「大八車！ どこでそんな言葉を習ったんだい！」

大八車の上に括り付けられて、「オイ、チョットマ！」と、鬼太郎の目玉親父の声を真似るシーンを想像して、生駒は少しおかしくなった。

「私も、少しは本を読むよん」

「そりゃ、相当な古典小説だね」

「ね、そこらへんは任せておいて」

明日の待ち合わせ方法を決めてから、チョットマは部屋を出て行った。

生駒は、もう迷ってはいなかった。

マトと連れ立って、街の外に出るのは初めての経験だった。

それに街から外れてそんな遠方まで出かけていくのも、初めてのことだった。

胸をときめかせた。

ハクシュウという人物を生駒は知らない。

いつものように、簡単にデータを探った。

生駒がアクセスできる人物データベースは、探偵のものと違って、役に立たないことが多い。しかし、今回は違った。

「ハクシュウ、ニューキーツ軍東部方面攻撃隊第一部隊長、千九百五十六年生誕、男」という情報が掲載されていた。

同年……。

ハクシュウという通称から想像すると、マトになる前は日本人だったということだろうか……。

ンドペキ、スジューオン、コリネウルス、パキトポーク。

こちらの方は、例によって何の情報もなかった。

生駒はハクシュウという人物に興味を持った。

スジューワンの言うとおり、いまさら搜索したところでサリの亡骸はおろか、装備の小さな欠片といった遺留品さえ見つかるはずがない。

死体は身に着けていたいかなるものも含めて、速やかに回収される。

現場からは消えてなくなる。

そういうことになっていた。例外はない。

ハクシュウは、通常の訓練に、サリの搜索という架空の名目を付けただけなのだろう。

あるいは別の目的があるのだろうか。

サリを葬った原因、ないし犯人を見つけ出す、というような……。もしそうだとすると、ンドペキの立場は微妙だ。

サリが死んだとき、あるいは行方不明になったとき、行動を共にしていたのはンドペキだと聞いている。

そしてチョットマは、ンドペキのチームに属している……。

そう思い始めると、漠然とした不安はなかなか消えなかった。

アギの習性である。

思考は常にクリアだ。新たな考えが浮ぶごとに、古い思考は薄れていくということがない。

思い付きであろうが、熟考の結果であろうが、思考はどんどん溜まっていく。これを中断するには、睡眠、つまりリセットが必要だ。

さて、どうするかな。

生駒は独り言をいいながら、アップット高原のマップと衛星画像にアクセスした。

ま、楽しまなきゃな。

15 迷いの色

「展開！」

ハクシュウの号令が下された。

「ラジャー」

ハクシュウのチームを除き、四つのチームが一斉に散っていく。ンドペキも指定された地点に向かった。かつて大聖堂があった広場である。

移動中に、マシンに執拗に追いつがられたが、それを一撃で撃退すると、大聖堂までほんの数分で到着した。

次々に各チームがそれぞれのポイントに到着した旨の連絡が入ってくる。

「進め！」

間をおかず、ハクシュウの命令が下される。

事前に、全兵士にも作戦の目的と行動の詳細について、ハクシュウから説明がなされてあった。

目標地点は、アップット高原の最高峰であるザイキル稜から南北に伸びる稜線を十キロメートル越えた地点。そこまでは隊列を維持して進む。その時点で集合するか、そのままの形で引き返すか、ハクシュウから命令が下されることになっていた。

作戦の目的は、サリの何らかの痕跡を探すこと。

敵が襲ってきても、攻撃は最小限に留め、搜索に重点を置くこと。目標地点到着予定時刻は、一時間五十四分後の午前十時三十三分である。進軍は、平均時速九十キロのやや遅いスピードと指定されていた。

隊列はハクシュウのチームを中心に横一列で、各チームの間隔は五キロメートル。各チームは伍長を先頭に雁行。補給部隊のみが雁行の最後尾、先頭の真後ろにつけている。

ンドペキのチームは順調に突き進んでいた。

他のチームも概ね指定スピードを保って進んでいる。

わずらわしいマシンがいても、それを刺激しないように各自が避けながら、都市の廃墟を出た。

原野が広がる。

あいにく空はどんよりと曇り、大気に充満する有毒なガス濃度のムラが視認できそうだ。

そして今にも雨が降り出しそうだった。

ンドペキは、少し緊張していた。

ハクシュウの意図が、明確ではなかったからである。

サリの搜索を名目にした隊列訓練にもかかわらず、ハクシュウは完全武装を指示していたのである。

あの日、ンドペキはサリを葬ろうとしていた。

その意思は、当局には感知されていたかもしれない。

しかし、ハクシュウには知りえないはずだ。

当局から、何らかの情報がハクシュウにもたらされたというのだろうか。

完全武装。

そのことが何を意味するのか……。

隊列はハクシュウを中心に、左翼にンドペキ、スジューオン。右翼にコリネウルス、パキトポーク。

ハクシュウとスジウオンに挟まれつつ疾駆しながら、ンドペキは、まさかという思いを抱いていた。

まもなく川を渡ることになる。

大西洋に注ぐ大河の支流である。

この川は上流で分岐し、本流のシリー川はアップット高原の向こう側を、東に向かって流れ下っている。

目の前に迫る川は支流とはいえ、水量は多く、流れも速い。

水面の上を飛行するため濡れることはないが、土や岩盤とは違って反発係数が異なるため、体のバランスは取りにくい。

「ん！」

ゴーグルに白い点が光った。

真正面だ。

距離にして八百メートル。

誰がいる！

マシンではない！

白い点が光ったということは人間か、それに近い動物。

一瞬の後に、その者が視認できた。

人間だ！

どこの。

兵士の装束ではないが、武装はしている！

ハクシュウかスジウオンのチームの誰か。

そんな考えが頭に浮かび、ンドペキは銃を構えた。

人間を撃つことに、一瞬のためらいがあった。

その刹那、脳に滑り込んできた言葉。

「撃つな」

女の声だった。

すでにその女は、目の前に迫っていた。
川の水面の上に、立ち止まっている。
攻撃の姿勢はとっていない。

ンドペキは減速した。

「ンドペキね」

そういうが早いか、相手はンドペキに向かって一步を踏み出した。
攻撃される！

そう感じて、ンドペキは銃を放った。

が、的を外したわけではないのに、相手の姿は消えていた。

「あっ」

相手はンドペキのはるか頭上にあった。

回りこまれる！

ンドペキは一瞬の内に体勢を立て直し、その場に停止した。

「撃つなと言った」

また声が聞こえてきた。

相手はまだ頭上にいる。

飛び上がったときの機敏さとは違って、どこことなくふんわりとした動作で、下降してくる。

「約束を守らないとは」

と、相手は地上に降り立った。

むっ。

銃を撃つわけにはいかない。

チームのメンバーに当たるかもしれない。真後ろにはチョットマがいるはず。

彼女なら避けることはできるだろうが、万一油断していたら。

ンドペキはネオ粒子サーベルを抜いて襲い掛かった。

「次に会ったときには」

相手はそう言うのと、一瞬の内に遠ざかっていった。

「チョットマ！ 前方注意！ 不審な人間が接近！」

ンドペキはそう声を掛けた。

しかし、チョットマから返ってきたのは、

「はい！ というか、もう通り過ぎていきました！」
というものだった。

猛烈なスピードである。

メンバーの位置確認をすると、チョットマとは三キロほども離れていた。

瞬時にその距離を移動するとは。

今まで見た人間の中では、最速である。

「誰ですか？」

「約束とは？」

そういった声がメンバーから発せられた。

メンバー間にのみ交信できる回線を使っている。

「知らん！ 任務を！ サリを探せ！」

ンドペキはそう応えたものの、動悸は収まりそうになかった。

どんなに激しい戦闘をしても、動悸を感じることなどなかった。

人間を撃つ。

そんな行為がいかに難しいことか、ということをお願い知らされた。

ハクシュウもスジューオンも、所定の距離を保って進んでいる。

特段の異常な行動は見られない。

ンドペキは自分の位置を、元の隊列に戻した。

ハクシュウやスジューオン達は今の事件に気がついていいるだろうが、何も反応はなかった。

邪魔なマシンに発砲しただけだと思っているのかもしれない。

あれはなんだったのだろう。

刺客……。

そういう商売があることは聞いたことはあるが、殺ろうと思えばできたはずだ。

武器の殺傷能力はともかく、行動スピードという点では、何枚も上手だったのだから。

約束とは。

まったく理解ができなかった。

サリの手がかりはまったくないまま、アップット高原の稜線を越えた。

今日は、ドラゴンの姿もない。

稜線を越えると大気は幾分澄み、平原を見渡すことができた。

「停止！」

ハクシュウの命令が発せられた。

「ケーオーフォーメーション！」

「戦闘準備！」

立て続けにハクシュウの緊迫した声が聞こえた。

ケーオーフォーメーションとは、強靱な敵に集団で近接して立ち向かうときや、大量の敵に囲まれたときに防戦する隊列だ。

ハクシュウは、全軍が自分の下に集まり、戦闘態勢をとるよう指示しているのだ。

いいいよか、という考えがンドペキの頭をよぎったが、現時点ではハクシュウの命令に従わざるを得ない。

ハクシュウが立つ地点に向かって突進していった。

俺は仲間を撃つのか。

攻撃されたら、やむをえないか……。

全員を敵に回したら勝ち目はない。

何人かは、傍観の態度を取るかもしれないが。

そんな思いを煮えたぎらせながら。

ンドペキはチームのメンバーの動きを確認した。

それぞれがハクシュウの元に向かって最速で移動している。

補給班のチョットマだけは、スピードを落とし、ハクシュウの後方に移動を始めている。よく訓練された軍の行動として申し分ないし、どこにも不審な動きはないように感じた。

「攻撃目標、北北東十三度、距離九キロ。しかし、命令あるまで発砲厳禁！」

ハクシュウの命令が飛び込んできた。

すでにフォーメーションは整っている。

ハクシュウを中心にして集まった兵達は、互いに五十メートルほどの距離を保って停止していた。それぞれの銃を構えて。

てんでばらばらに駒をばら撒いたようなフォーメーションだった

が、それぞれのチーム内での役割分担に従って、位置取りがされている。

誰も口を開くものはいなかった。

ンドペキは、仲間の兵士達の動きに注意しながら、ハクシュウが攻撃目標といった地点に目を凝らした。

前方五キロほどに、シリー川が右手に向かって流れている。

その手前は、ほぼ原野と言ってよい。

シリー川の対岸は見渡すかぎり森林地帯が広がっていた。

建物や塔、あるいは街の跡らしきものは見当たらない。人工物はないように見えた。

昔の人が眺め渡せば雄大な景色だというだろうが、戦闘態勢に入っているンドペキには、単調な光景だとしか感じなかった。

敵までの距離が九キロというのは、通常の戦闘では考えられない。大量破壊兵器をむやみにぶっ放すような大昔の非効率な戦闘ではなく、近世では戦闘員のみを標的にしたより精度の高い武器を使って、近接して戦うようになっていたからだ。

攻撃に距離があるとしても、目標が確実に視認できる三キロがせいぜいで、通常は百メートル以下である。

あの森の中に何がいるというのだろうか。

ンドペキはいぶかしんだが、グーグルのモードを切り替えていて驚愕した。

何らかの生物がいる！

マシンの類ではない。

それも大量に！

集団で！

千体以上はいるのではないか！

これまで戦闘用に開発された生物とも幾度となく戦ってきたが、彼らが集団でいる光景は眼にしたことがなかった。

群れていたとしても、それは数頭の群れだ。

これほどのコロニーは見たことがなかった。

そもそも人間を含め、地球上にはほとんど動物というものは存在しなくなっていたのだから。

「繁殖地ですか」

久しぶりにハクシュウ以外の声が聞こえた。

コリネルスだった。

だれも応えない。

ジリジリする時間が過ぎていった。

木々の間から垣間見える生物は、人間のように二足歩行をしていた。

人間よりも一回り大きく、一様に黒い肌をしている。脚は短い。腕は異様に長い。

髪はなく、衣服はまっていない。

こちらに関心を示すものもいるが、戦闘の気配はない。

それぞれが淡々と何らかの作業をしているようだ。

ンドペキはすでに、ハクシュウが自分を攻撃することはないと確信していた。

もし攻撃するつもりなら、旗色が明らかでない大量の生物がいる前で、派手なまねをするはずがないからだ。

彼らが戦闘用の人工生物だったら、高みの見物をするはずがない。

あの数では、こちらが大混乱するだろう。全員無事に街まで帰れる可能性はないに等しい。

今日の作戦の本当の目的は、このコロニーを観察する、あるいは反応を見ることがだったのではないか、という思いが頭をよぎった。だからこそ、完全武装だったし、稜線を越えてからの行動は未定だったのだ。

軍の中枢からの指令は、ハクシュウにだけ伝えられる。その指令に添った作戦だったのではないか。

ンドペキは、コロニーを凝視しながら、そんなことを思った。

と、森林を出てくるものがいた。

やはり人間か。

姿は異様だが、背筋を伸ばし、二足歩行だ。

ヒトとしかいいようがない。

ゆっくりと川原を歩いてくる。

胸の辺りが膨らんでいる。

女か……。

ん！

女は、そのまま水面に歩みを進めてくる。

まるで地面を歩くように。

彼女が歩く部分だけ、水面にガラスを置いたように。

部隊は静まり返っていた。

ハクシュウからも何の命令もない。

女はシリー川の中央部で立ち止まった。

そしてはつきりとした言葉で、短いメッセージを送ってきた。

「私はJ P O 1と申します。私達はあなた方と話をしたいと思えます。ニューキーツの街のレイチェル氏とンドペキ氏を代表として指名させていただきます。明後日の正午に、ここでお待ちしています」
そういうが早いのか、女の姿は消えた。

「退却！ 稜線を越えた時点で、ケーオーフォーメーション解除。ピー隊列に戻る。目標地点、アリーナ！」

ハクシュウの命令が発せられた。

俺が代表？

ンドペキはわけがわからなかった。

彼らは何者だ？

レイチェルとはだれだ？

「今日見聞きしたことは、全員、口外無用だ。お付きの人も頼みますよ」

稜線を越えた時点で、ハクシュウが言った。

「ンドペキ。いろいろと聞きたいことがある」

問いただされたが、わからない、としか答えようがなかった。

16 潮風の記憶

「ねえ、パパ、あれ、なんだったと思う？」

「川向こうの軍勢のことかい？」

「うん、軍勢というほど戦鬭的じゃなかったけどね」

サリの搜索作戦がアリーナで解散となってから、チョットマは街には帰らず、もう少しピクニックしよう、と誘ってくれたのだ。

もとより、生駒に異存はない。

アリーナからさほど遠くないところに、かつての港があった。

岸壁は崩れ去り、波がガラクタとなったクレーンや建物の足元を自由に洗っている。

海は青く、以前のような悪臭を放ってもいない。

沖合いの白い波が繋がっては消え、潮の香りが満ちていた。

「このあたりは、あまり強いマシンはいないの」

リラックスして、チョットマは巨大なコンクリートの塊に腰をかけている。

生駒は、その肩にとまっている。もちろん、フライングアイの姿で。

フライングアイは、視覚と聴覚を備えているだけではない。嗅覚もあるし、気温もわかる。重力だって感じることもできるのだ。

電波的な会話を楽しむことができるし、音声でも話ができる。スピーカを通してだが。

そして、きわめて小さいものだが、手や足も備えているのだ。

そんなフライングアイが、チョットマの肩に乗って話をする。

まさしく、鬼太郎の目玉親父だ。

「高度に人間的な生物、としか言いようがないね」

「人間じゃない、ってこと？」

「難しいね、その質問は」

「でも、人の言葉を話していたよ」

「まあ、たぶん、人間だな」

「へえ！ パパはああいう人間を知っているの？」

「いや、初めて目にした。ただ……」

思い当たることはあった。

「ただ？」

「いや……、昔読んだSF小説のシーンを思い出しただけ」

今から四百年ほど前のことになる。

四度目の世界大戦を経て、人類はまさに滅びようとしていた。

二千年以上も続いていた風習、つまり各国が自国の領土内に責任を持つ制度は破棄され、すでにワールドと称する世界政府が樹立していたが、世界規模で進む人類の衰退を押しとどめることはできなかった。

地上はもちろん、大気も海も汚染がますます深刻化し、エネルギー生産はもちろん食料さえも逼迫していた。

加えて、あらゆる地域で疫病が蔓延し、人口の急激な減少はどのような手段を持っても食い止めることはできなかったのである。

社会がすさむ一方、神を信じるものたちは、その信仰心を先鋭化させていた。

存在しようがしまいが、神というものにすがるしか、救いはなか

ったのである。

アメリカ大陸の荒野で生まれたある教団の教えが、瞬く間に世界中に広まったのはそんな状況の中だった。

「神の国が宇宙のどこかにある」

「宇宙は神が作られ給うたもうたものである」

「救いは神の国にこそある」

ありもしないそんな考えが、いつしか伝説となり、あまねく宗教の壁を超えていった。

伝説は、あるものにとっては真実となり、あるものにとっては都合のいい教義となった。ただ、世界の宗教がひとつになる初めての萌芽ともなったのである。

そして、ついに超党派宗教ともいえる「神の国巡礼教団」が生まれた。

しかも、瞬く間に世界政府と肩を並べるほどの力を持つに至ったのである。

もちろん、教団が巨大化する過程では、世界各地で紛争が起きたし、多くの世界企業が犠牲になった。

教団に取り込まれ、資金製造の役割を担わされたのだ。

一連のテロ事件も教団の罠だといわれた。つまり、各地の民族的な確執を助長し、人々を不安に落とし入れ、理性的に考える力を奪うために。

そして紛争に乗じて、資金を得、甘言によって、脅迫によって、人々を入信させていったのである。

その頃すでに、すべてのマトは、故国ではない世界中の街に散らばっていたことも、教団拡大の速度を速めたといえる。

地縁や血縁が究極といえるまでに薄くなり、結び付きを失った人

々は、何かに属することによって得られる心の安定を求めているからである。

信者は四百万人とも六百万人とも言われていた。当時の地球人口は一千五百万人。

人類の三人にひとりは一信していたことになる。

彼らは、その数、資金力、英知、武力、いずれにおいても当時の地球上のあらゆる組織、団体の中で最大かつ最強の集団であったといえる。

地球周回軌道上に「神の意思」と呼ぶ巨大な都市を百体以上も築き、生産拠点はもちろんのこと、独自の流通網と移動手段を持ち、莫大な物資を蓄えるに至っていた。

ワールド政府と神の国巡礼教団。

地球上にはふたつの政府がある。

まさに、そんな状況であった。

ただ、ワールド政府は有効な手を打てないまま、座視するしかなかった。

あくまで自分たちが正統な政府であるという面子にこだわり続けていたからである。

そんなとき、教団が数百艘の宇宙巡航船で構成された巨大な船団を建造していることが明らかとなった。

戦争……。

人々は悲嘆にくれた。

今この時点で地球全体、及び宇宙空間に散らばる人類基地や衛星を巻き込む戦争が起きれば、人類は破滅する。

それは火を見るより明らかだった。

ようやく、ワールドは動き始めた。

ワールド大統領と教団最高指導者である教皇の初めての会談が行われたのは、光の柱に支えられた英知の壺のひとつ、ピースである。後の世にいう「ピース会談」。

仲介したのは、ひとりの女性だといわれている。

類稀なる美貌と、人の能力を超越した魔力を持つといわれたが、その実像は明らかにされないままだった。

しかし、地球人類は救われた。

教団は地球の覇権を望んではいなかったのである。

あくまで、宇宙の神の国を目指すことに、すべての気持ちを、すべての力を注いでいたのだ。

公式にはそのように伝えられている。

そして現実には、ピース会談から十数年後、教団は大船団をなして宇宙に旅立っていったのである。

宇宙の中心、あるいは神の住む星を目指して。

彼らの行き先は教皇のみが知るとされていた。

しかし教団内部では、もちろん共に宇宙巡航船の乗り込んだ者たちの中に、それがあてどもない旅だと考えていたものは皆無である。

ワールド政府は、その無謀ともいえる巡礼の旅を止めようとはしなかった。

人間社会の秩序を保つ上で、これほど効き目のある薬はなかったからである。

膿が自ら出て行ってくれるのだから。

実は、船団には狂信者だけでなく、いわゆる大量の犯罪者も紛れ込んでいたと言われている。

ワールド政府が、手に負えない犯罪者及び異端とされる科学者や

野望が大きすぎる実業家などを、教団に押し付けたのだと言われるようになるのは、巡礼の旅立ち後、十年以上が経ってからのことである。

ピース会談で何が話し合われたのか、すべてを知る者は既にない。大統領は、その本当の目的と成果を明らかにすることなく、帰らぬ人となったからである。

彼はホメモムだった。

いずれにしろ、地球上に残る人類の多くは、彼らが一団となって地球を見捨て、宇宙に飛び出していくことを、歓迎の面持ちで見送ったのである。

信者でない者にとって、巡礼の旅は死を意味したが、宇宙空間に飛び出していった者にとっては、晴れがましい旅の始まりだった。

ただ、神の国巡礼教団の入信者すべてが旅立ったわけではない。

選ばれた者は約六万人。

選考基準は明らかにされていないが、信仰心が厚く、訓練に耐え、体力知力ともに優れた者の中から選ばれたことは想像の難くない。

金の力も、という向きもあったが、ワールドの人々にとって、そんなことはどうでもよいことだった。

船団は、太陽系の辺境、カイバールベルトの端部に達するまでに約1年間を要したが、太陽の引力から開放されるにしたがって、みるみるスピードを上げた。

やがて交信は途絶えた。

それでも半年ほどは、太陽系各地に浮かぶ衛星から船団を観測できていたが、あるときを境に、その姿はふつりと消えた。

多くの中心的人物が宇宙の闇に消え、資金も枯渇し、もぬけの殻となった教団の組織は、ものの十年も経たずに崩壊した。

宇宙の巨大な粗大ゴミと化した「神の意思」は、地球人のための生産農場やエネルギー基地として生まれ変わった。

残された信者は、処刑された数百名を除いて、あるものは照れ笑いを浮かべ、あるものは人目を避けるように、あるものは呆けたような顔をして、元の人類社会、つまりワールドに紛れ込んでいたのである。

船団との交信が途絶えてからささやかれた様々な噂。

「仲介者となった女性は教皇の愛人である」

「いや、大統領側のスパイである」

「ワールド政府はそのスパイを船団に乗り込ませている」

「時限爆弾を仕掛けてある」

「地球人全体が移住できる星を探す密約もある」

そんな話は、かなり姿を変えながら、その後百年もの間、語り継がれることになる。

船団が辿ったかもしれない運命を題材にした数々の物語が生まれた。

それらの物語では、巡礼団が生き延びていることにはなっていたが、それは完全なフィクションとして物語られた。

宇宙船の欠片ひとつも残さず消えうせ、ましてや彼らの肉体も精神も、極寒の宇宙の闇の中に消え失せたのだから。

そしてさらに長い年月が流れ去り、神の国巡礼教団の行方を想像する者さえいなくなった。

船団が出立した夜の華々しさも記憶から消え失せ、その記録の存

在さえも忘れ去られたのだった。

生駒が思い出したのは、そんな物語のひとつである。

ただ、それをチョットマに話そうとはしなかった。

「どんなシーン？」

「んー、あれ、宇宙空間で、えっと」

チョットマはじれたように、フウツと溜息をつくとき、バッグパツクからドリンクを取り出した。

「もう！ 知恵の人も、データが多すぎて整理できていないのね」

「ハハ、まあね。最近、過去と現在が、ときとして混在してしまう」

生駒は、自分が思い出したことをチョットマに話して、それが噂として広まってしまうことを恐れたのだった。

明後日、あの川原で会談がもたれることになれば、おのずと明らかになるだろう。

それを前に、あらぬ噂を広げて人々に予断を与える必要はない。

17 ピクニックの記憶

「それもそうだけど、ンドペキつてのは君の上官だろ」
生駒は話題を修正した。

「うん。彼が代表に指名されたってのも、変よね」

「どんな人なんだい？」

「どうって、ハクシュウと同じくらい、私は信頼しているよ」

「ほう」

「でも、特別な任務についているとか、街の政府の役職についているとか、そんなことは聞いたことがない。普通の兵士のはず」

「彼自身も、さっぱりわけがわからない、と言ってたね」

「うん」

チョットマは、今度は食べるものを取り出した。

「あ、フライングアイは食べられないわね。残念だけど、我慢してね」

小さなサンドイッチ状のものだ。しかしドライなもののようにで、チョットマの口の中からサクリという音がした。

そう。

今日はピクニック。

チョットマは鼻歌まで歌っている。

幸せの時間だ。

「ん？　　そういや、パパは何を食べているの？　　というか、飲んだり食べたりするの？」

チョットマが振り返った。

「ハハ」

「あっ、私は何も知らないって、笑った！　失礼ね！　　気にしてあげてるのに！」

「ハハハ！　　気遣ってくれてありがとう。アギも、ものを食べたり

飲んだりするよ。栄養を補給するという意味じゃなくて、人間らしく生きていくためにね」

「へえ！ そうなんだ！　じゃ、やっぱり私、食べるの、やめる」
「どうして？」

「だって、今は食べられないパパがかわいそうだもん」

「いいよ、いいよ。食べて、食べて」

「ううん、やめとく。それより、いいことを思いついたわ。ちょっと待って」

生駒は、この娘と知り合えてよかった、としみじみ思う。

潮の香りを楽しんだ。

瓦礫に埋もれ、遺跡となりつつあるこんな場所でも、海は青い。

「んー、今、ンドペキはまだアリーナの近くにいたい。彼はたいていはGPSをオンにしている、自分の居場所を仲間には知らせているの」

「へえ、そう。街の政府に引っ張り出されて、詰問されているわけでもないんだ」

「聞いてみるわ」

人類の数が大きく減少し、地球上での生産が極少化したことが、海の自然には好影響を及ぼしている。

かつては、宇宙に並ぶフロンティアとしてもはやされた深海も、結局は手付かずのままだったことも幸いしているのだろう。

汚染はまだ残っているだろうが、海洋生物は息を吹き返しつつあると言われている。

漁船が意気揚々と出漁し、恋人達や子供達が波と戯れる日々はまた来るのだろうか。

ふとそんなことを思った。

「ンドペキには特別の指示はないみたい。連絡はいつでも取れるようにしておけ、ということだけで。退屈してるって。ハクシュウは、どこかに今日のことを報告したみたいだけど、って」

「ハハ、時の人なのに、所在なしかい。で、もうひとりの代表者、レイチエルってのは？」

「知らない。結局、何の情報もないって」

「ふうん」

「ねえねえ、作戦中に女とすれ違ったでしょ。とんでもないスピードだった人。もしかして、あれがレイチエル？」

「さあ。僕もまったく心当たりはないよ」

生駒は、それらのことを調べてみたいと思った。

チョットマが立ち上がった。

そろそろおしゃべりは終わりということだろう。

「ねえ、チョットマ、今日はありがとう。楽しかったよ。できれば、明後日にもピクニックに誘ってくれないかな」

「もちろん！」

シリール川の会談に立ち会ってみたかった。

「ありがとう。でも、今度はハクシュウにきちんと了解を得て、連れて行ってくれないかな」

「そうは……、ん……、許してくれるかな……」

「大丈夫」

「なぜ？」

「実はさ、今日もハクシュウには僕から一言、断っておいたのさ」

「ええっ！」

「だってさ、もし僕が見つかって、ハクシュウやみんなから君が責

められたらかわいそうだと思って」

「なんだあ」

「黙っててごめん」

「いいよ、そんなこと。あ、そうか、だからさっき、ハクシュウはお付の人も黙っておいてくれて、言ったんだ!」

「そうだね」

「でも、パパ、ハクシュウと知り合いだったの?」

「ううん。先日、会ってね。君がいい人だって言うから、なんとなく興味が湧いて」

チョットマが目を丸くした。

「ほら、保護者としては、娘のボーイフレンドを一目見ておきたくてね。なるほど、抑制の効いたいい男だったよ」

「そうでしょ! ボーイフレンドじゃないけどね!」

そういったチョットマの声が、うれしそうに弾んだ。

「次は、ンドペキに会いに行つてこようかな」

「すごいんだ、パパは! いままで、そんなアギに会ったことないよ!」

「そうかい?」

「行動派なんだ、パパは!」

「そうじゃないって。娘のためには、ってこと」

「へえ! それがすごいのよ。だって」

チョットマが、本当の親子じゃないのに、という言葉を飲み込んだことがわかった。

そう、口にする必要のないことだ。

生駒は、チョットマのデリカシーがうれしかった。

本当の親子でなくても、本当の親子以上に心を通わせることはできるし、そう振舞うこともできる。

チョットマが、フフツ、と笑った。

「でも、その目玉の姿で会いに行くの？ 私のボーイフレンドに」

「ハハ！ そうか、君のボーイフレンドは、ンドペキの方か！」

「違うって！ パパがそういうから、言ってみただけ！」

「その気がなければ、そう言ってみる気もしないだろうけどね！」

これと似た会話をしたのは、もうどれくらい前のことだろう。

自分にも、妻とはいえないけれども妻同様に愛し合った人がいた。娘とはいえないけれども、娘同然にかわいがった人がいた……。

データを組み合わせただけの思考だが、それを「心」というのなら、生駒は自分の心の中に暖かいものがこみ上げてくるのを感じた。

「不法なことはしたくないんでね。まっとうに僕は、この眼ん玉姿さ」

「それってすごくない？ 怪しまれない？ 大体、街の中で目玉姿から声を掛けられることはないし、もし声を掛けられても無視するよ。避けるのが普通じゃない？」

「だから、すごいのはハクシュウの方さ」

「ねえねえ、どう言って声を掛けたの？」

「娘がお世話になってます、と言ったのさ」

「おわっ！」

「で、失礼ですが、お名前からすると、日本の方ですか、とね」

「うへええええ！」

「彼は、街中で旧知の先輩に会ったような態度だったよ。で、僕にアクセスしてくれるように頼んだら、ちゃんと約束した時間にコンフェッションボックスから会いに来てくれたんだ」

「うわ！ やっぱりハクシュウは、律儀な人なんだ。きっと、ンドペキもそうしてくれると思うよ！」

と、そのときだった。

視界が消えた。

見ていた海が、ただざらついた青黒い一色になった。

強烈な横ジーを感じた。

それらは同時に起こった。

まるで、位相を瞬間移動したかのように。

そして、コンマ数秒の後には、閃光が辺りを包んだ。

生身の瞳で見れば、網膜を焼き尽くす。そんなすすまじい光だった。

18 乙女の羞恥の心

ランランララ、ランランラン！
ランランラララ！

パパはやっぱり素敵だな！
あの人に会うつて！
どんな話をするんだろ。
うれしい！
でも、ちょっと恥ずかしい。

ねえ、あなた。
私のこと、パパにどう話すの？

ん！
なんだよ、こんなときに！

チヨットマは背後に悪寒がした。
強い殺意を感じる。

「きつと、ンドペキもそうしてくれると思うよ！」
と、パパとはしゃぎながらも、背後の悪意の大きさを測っていた。

何かが近付いてくる。
同時に、心の中のアラムの針が急上昇している。
チヨットマの体は臨戦態勢をとった。

まずい！
何者かの気配との間合いは、概ね二百メートル！

パパをどうする！
バックパックに入ってもらうのは間に合わない！

チョットマがフライングアイを掴んだとき、背後の何者かの殺意が最高潮に達し、武器のエネルギーゲージが振り切れたことを感じた。

横っ飛びに、百メートルばかり移動。

と同時に、元いた場所のコンクリートの塊が、すさまじいエネルギー弾で粉々に吹き飛んだ。

立ち止まるやいなや、お手玉のようにフライングアイを空中に置くように手を離し、その間に応戦した。

スコープには何も映っていない。

それでも、攻撃を仕掛けられたと思える位置に、レーザー弾を放つ。

手応えはない。

その間、フライングアイは数センチばかり落下している。羽を広げようとしているが、構わず引っ掴み、再度移動。

依然、スコープに敵の存在は表示されない。

くっ。

許さないからね！

乙女を背後から攻めるなんて、卑劣なんだから！

移動しつつ、フライングアイをバックパックに放り込んだ。
これで、いつでも反撃できる。

バカね！

エネルギー弾で私を狙うなんて！

さあ、撃って来い！

もう充填されたでしょ！

エネルギー弾がこちらに到達するまでに、レーザー弾をお見舞いしてやる！

エネルギー弾のように物的な質量を持つ弾での攻撃なら、敵との距離が二百メートルあれば、チョットマの俊敏さをもってすれば、弾を避けることも、その間に反撃することも可能だ。

こちらはレーザー弾。

高速とほぼ同じ速度で相手に到達する。

さあ！

どうしたの！

撃って来い！

あんたが瞬きする間に、息の根を止めてあげるわ！

すでにチョットマは、視界の利く空地に出ていた。

港のコンテナヤードか、巨大駐車場の名残だろう。

自分の姿を晒す位置だが、その方がチョットマには都合がよい。

敵の攻撃を避ける自信はある。

対して、反撃が容易だからだ。

建物の残骸やコンクリートの塊など、反撃のレーザー弾を遮るものがない。

相手の姿が見えておれば、なお好都合だ。

さあ、出て来い！
でかいネズミめ！

敵の放ったエネルギー弾の破壊力から見れば、かなり大型のマシ
ンだ。

少なくとも人体以上の図体でないと、あれほどの武器を搭載する
ことはできない。

かつ、飛翔系ではないはず。

建物の残骸などの瓦礫に埋もれた場所ではなく、開けた場所に出れ
ば、姿を視認できるはず。

チヨットマはゴーグルのモードを変えた。

意識するだけで変わる優れものだ。

可視光線で見える景と、エネルギー探査モードで見える景が自動的に
切り替わるパターンである。

切り替えといっても、きわめて高速なので、ひとつの画像に見え
る。

可視光線で見える景に、エネルギーの存在が重なって見えるのだ。
隠れた敵と対峙するときには有効なモードである。

しかし、エネルギー弾の着弾点とその軌跡以外に、エネルギーの
存在は確認できない。

ハエほどの小さな飛翔系のマシンなどは探知しにくいが、それ以
上の大きさがあれば、たとえ巨大なコンクリート塊に阻まれていて
も、探査し損ねるということはない。

精度の高い装備であるにもかかわらず、敵の位置は表示されてい
なかった。

どこに隠れているのさ。

それにしても、強烈なエネルギー弾ね。

最初に放たれた攻撃の着弾点からは、盛大な炎が上がり始めた。
コンクリートさえ瞬時に沸騰し、激しく燃えているのだ。

エネルギーが通過した軌跡にも、まだエネルギーが渦巻いている。
大気中のあらゆる粒子が燃えて、七色の光の帯の中にキラキラした粒子が舞っている。

「援護する！」

ヘッダーの中に、ンドペキの声が響いた。

ヤタッ！

来てくれるのね！

チョットマは空地の中をゆっくり駆け回りながら、相手の二の矢を待った。

撃って来いとばかりに。

「相手は！」

「わからない！」

ンドペキの位置がスコープに表示されている。

スコープには所属部隊員を示す緑色の点。

ンドペキという名と到達予測の三十セカンドという数字も。

しかし、敵を示すオレンジ色の点も、他部隊員を示すピンク色の点も、非戦闘員を示す白い点も表示されていない。

もともと、この辺りには敵の存在は稀だ。

ニューキーツ攻撃軍が制圧しているエリアである。

ほぼ毎日、誰かが巡回し、マシンの侵入を阻止している。

パパとのせつかくのピクニックが。

でも、いいっか。

ンドペキが助けてくれるのなら。

ん？

ということは、パパとンドペキの会談も、ここでということに？

私がいる前で！

うわ！

恥ずかしい！

どうしょ！

というより、私が紹介しなくちゃいけないのかな？

ンドペキの緑ポイントは、一直線にチョットマに向かってくるのではなかった。

攻撃が発せられた地点に向かっている。

「おまえはそこにおれ！」

「ハイ！」

敵がまだ近くに潜んでいるとしたら、地下かなり深く潜ったとしか考えられない。

さすがに十メートル以深の地下に潜り込まれたら、エネルギー探

査モードは役に立たないのだ。

気をつけて。

と、あやうく言いそうになった。

上官であり、熟練の兵士であるンドペキに、チョットマが掛ける言葉ではない。

でも、もし地下に潜んだ敵の真上にンドペキがうっかり近付いたら……。

ンドペキに限って、そんなへまをやらかすはずがない。

「チョットマ！ 状況を説明しろ！」
「ハイ！」

突然、背後から撃たれたこと。

それ以外に、説明することはなかった。

ンドペキは既にかなりの距離を移動している。

敵をくまなく搜索しながら、空地の周りをジグザグに走り回っている。

「敵を視認していません！ 系統、機種共に確認できませんでした！」

「マシンか？」

「ん……？」

わからない。

てっきりマシン系だと思ったけど……。

生体系の敵に、エネルギー弾を放つものはいない。

やつらは肉弾戦か、肉体に組み込まれた旧式のマシンガンを派手にぶっ放すか、あるいは火薬系の弾を放つだけだ。

エネルギー弾はもちろん、レーザー弾や、量子弾、核エネルギー系の武器を装備しているものはいない。

えええっ！

そんな！

マシンでなければ、人間ということになるけど……。

チョットマはこれまで、人間に攻撃されたことはない。

しかし、チョットマはンドペキにそれを問い直しはしなかった。

まさか、そんなことが！

なんだって、私が！

ありえないじゃない！

誰にも迷惑かけてないし！

結局、敵は姿を消していた。

ンドペキのスコープにも、何も映らなかったという。

まだ、地下に潜んでいる可能性を考えて、チョットマとンドペキはアリーナに移動した。

アリーナであれば、常時、要員が警護に当たっている。

地下であれ、大半が崩れ去った大屋根であれ、大量の付室であれ、大階段下の巨大倉庫であれ、敵が潜んでいる恐れは小さい。

念のため、アリーナのご真ん中に突っ立って、チョットマはンド

ペキに改めて報告した。

互いに背を向けて周囲を警戒しつつ。

19 狂いの色

ンドペキは、チョットマの話し方がぎごちないと感じた。
なにか、隠している。

ヘッダーを被ったままなので、チョットマの瞳にどんな心が浮んでいるのか、窺うことはできない。

電波を通して流れてくる声も、いつものチョットマの声である。
しかし、そもそも加工していないとも限らないが。

あの敵は、かなりの熟練だ。

あれほど破壊力のあるエネルギー弾を使うマシンは、この辺りにはもういないはず。

もしいたのだとしたら、ニューキーツ軍の沽券に関わる事態だ。

姿も、ついに見せないままだった。

ンドペキは思いをめぐらせた。

スコープにも反応がなかった。

つまり、監視人工衛星のカメラに捉えられなかったということだし、GPSも役に立たなかったということだ。

マシンの類ではありえない。

しかも、あの状況では地下に逃げたとしか考えられない。

通常のマシンは、基本的に逃避行動をとることはない。

命が惜しい、とは考えないからだ。

それらのことを考えると、チョットマを襲ったのは「人間」ということになる。

しかし……。

「おまえ……」

「ハイ！」

誰かに襲われたことがあるのか。

誰かの恨みをかうようなことがあるのか。

「ないです！」

「だろうな」

これまでチョットマを部下として見てきたが、そんな様子はなかった。

あるとすれば、本人も気付かないようなことだろう。

典型的な天真爛漫で、悪意というものを知らない、というのがチョットマなのだから。

「しかし」

呼びかけておきながら、ンドペキは次の言葉がなかった。

本人が、誰かに恨まれるような覚えはないというのだから。

無理やり口から出た言葉に、げんなりするが、まあ、しかたがない。

「怪我はないか」

「ハイ！ 全然、大丈夫です！」

ンドペキは、ふと、襲ったのは自分ではないか、と考えてみた。襲っておいて、救援に向かう。

チョットマは頭から俺を信じている。

好都合じゃないか。

そう、サリを殺そうとしたときと同じように。

妄想だ。

ンドペキはそんな考えを振り払った。
自分でも、倒錯した思考だと思った。

今はダメだ。

しかも、少なくとも、ここでは。

見張りの兵士がどこかにいる。

しつこく追いつがってくる自分の思考に手こずる。
こういうときは、行動を起こすに限る。

チョットマは黙って、指示を待っている。

いずれにしろ、危険は去ったと考えていいだろう。
今日のところは、おとなしく街に帰った方がいい。
走ろう。

走って、邪念をふるい落とそう。
今は。

「街に帰るぞ」

「ハイ！」

ンドペキは駆け出したが、一步出遅れたチョットマが、声を掛け
てきた。

「あの、ンドペキ」

「ん？」

チョットマが追いつがってくるが、ンドペキはスピードを落とす

ことなく、たちまちアリーナを出て瓦礫の街を抜けていく。

「あの」

「だから、なんだ」

「ありがとうございました！」

「……」

仲間を助けるのは当然の行為だ。

ただ、それを口にするほど、ベタベタした関係ではない。

こいつを殺すのはどうだ。

つい、それを吟味してしまう。

邪な思考がまた頭をもたげてくる。

そもそも、あの日、俺はサリを殺そうとした。

理由は特にない。

心を捉えていたのは、自分が死にたい、ということだけ。

俺は何者なんだ。

いつたい、何のために生きているんだ。

マシンを倒し、集めた金属を金に換えるだけの毎日。

先が見えないだけでなく、過去さえも失ってしまった俺に、生きていく目的などあろうはずがない。

そんな日々がもう数百年も続いているというのに、これからまだ数百年、あるいは未来永劫続くのか。

俺は死にたい。

死んで、安らかな死後の世界に旅立ちたい。

死後の世界などがあるとはこれっぽっちも思わないが、もう、生きていくのはごめんだ。

耐えられない。

虚しすぎる。

今まで、心が失われ、闇に沈んでいった人間をたくさん見てきた。俺は、そうはなりたくない。

そうなる前に、自分の肉体を消滅させてしまいたい。

ところがどうだ。

そんな俺に、死ぬ方法がないときている。

もう十分だというのに。

残された道はただひとつ。

再生されないこと。

人殺しの罪を背負って、ようやく死ぬるというのは、なんと不合理な制度だろう。

チョットマは黙ってついてくる。

こいつなら、いいかも。

しかし、サリならともかく、こいつは並大抵のことでは倒せない。敏捷性が半端じゃないからだ。

いや、だからこそ、こいつを殺しても誰も疑わないかも。

俺は、死にたい。

しかし、人殺しと罵られて死を待つのは耐えられない。
プライドはあるのだ。

生きてきた証なんぞには興味はない。

ただ、俺の生を汚したくはないという思いがあるだけ。

自分勝手な考えだ。

自分自身に死をもたらすために、人を殺す。

しかし、他人には、特に部隊の連中には知られたくないのだ。

そんな都合のいいことを考えてしまうのは、すでに俺の思考も狂い始めているのだろうか。

いや、そうではないはず。

ぷつつりと正気が失われてしまったのなら、他人の目など気にはしないだろう。

人は、徐々に狂っていくのだろうか。

あるいは、ある朝目覚めると、昨日の自分がそこになかったというように、狂気は突然やってくるのだろうか。

俺は狂人になりたくはない。

しかし、きっと、そうなるのは遠い先ではないだろう。

自分のことだからわかるのだ。

夜、眠るのが恐ろしい。

朝になれば、俺は昨日までの俺ではなく……、と考えてしまうのだ。

もう、時間はない。

「ねえ、ンドペキ」

チョットマが話しかけてくる。

「なんだ」

「今度の会談、頑張ってください」

「うむ」

しかし、何を頑張れというのだ。

その日、俺はもう狂い始めているかもしれないぞ。

「すごいことですよ。指名されるなんて」

「意味がわからない」

「きっと、ンドペキは偉い人なんですよ」

「まさかな」

「覚えていないんでしょう？ 昔の自分。もしかすると、ワールドの大統領だったりして」

チョットマが他愛のないことを言ってくる。

返事をするのも面倒だ。

「まあ、そのときがくれば分かるだろう」

と、応えておいて、俺はまた妄想にふけた。

再生不可処分理由は、公にされるのだろうか。

ハクシュウは知ることになるのだろうか。

チョットマなどの兵士を殺せば、連絡がいくのだろうか。

普通は、再生されない理由が明らかにされることはないはずだが。

では、兵士ではなく一般市民ならどうか。

再生不可理由は公表される。

人知れず死ぬ、には不都合だ。

それだけ、兵士の立場は軽く見られているということだが、そんなことはどうでもいい。

もう、何度も同じ考えをなぞってきたのだ。

街に着くと、チョットマはぺこりと頭を下げた。

「気をつけろよ」

「ハイ！　ありがとう！」

立ち去るチョットマに、俺は声を掛けた。

「待て」

先ほど思いついた考えを伝えておこうと思った。

「おまえ、クシという男のことを聞いたことがあるか？」

「クシ？　いえ、ないです」

「おまえを襲ったのは、たぶん、そいつだ」

「だれなんですか？」

「東部方面隊の兵士だった男だ」

「えっ、その人が私を？」

「なんとなく、そう思っただけだ。何はともあれ、気をつけろ」

「ハイ！」

20 涙の記憶

「僕をボーイフレンドに紹介してくれなかったね」

「だって……」

乙女心というやつだろう。

それに、襲われた後だ。

そんな雰囲気ではなかったということだろう。

「ハクシュウのときと同じように、ンドペキにも声を掛けておくよ」
「うん」

彼女には、何の前情報もなくハクシュウに声を掛けたかのように話したが、実は予備知識は得ていた。

綾から聞いている。

「ハクシュウっていう人なんだけどね」

綾の情報によれば、生誕年は間違っていなかったようだ。

元は日本人であるという想像も間違っではいなかった。

「再生されるたびに新しい街に行くみたい」

綾はメモって来た街の名前を読み上げてくれた。

生駒にとって、懐かしい街の名もあったし、ほとんど行くこともない街の名もあった。

「でも、そんなにころころ住む街を変えたら、友達がいなかったりして」

と、綾は笑っていた。

「それに、職業はいつも兵士みたい」

兵士としては優秀なようで、リーダーとしても素質があるようだ。多くの街で、それなりの階級に登っている。

生駒の思考体は、最大で三つに分割することができる。

本体つまりメインブレインとは別に、ふたつのセパレートブレインをフライングアイに載せて動かすことができるのだ。

当然、データベースは共通だ。

つまり、同じ記憶を持ち、常に同期している。

そしてセパレートブレインは、単独で思考することもできるし、メインと連動して思考することも可能だ。

今日のように、チョットマとピクニック中であれば、それに集中してもよいのだが、どうしても綾のことを想ってしまう。

チョットマは、今朝の待ち合わせ場所に使った裏路地に入っており、建物と建物の中に身を潜り込ませた。

今日のピクニックは終了だ。

「今、いいよ」

フライングアイを引き連れた兵士なんて、他人に見られたらどう思われるか知れたものではない。

ましてや、街のカメラに捉えられては、面倒が起らないとも限らない。

「じゃ、また明日」

チョットマの合図と共に、生駒はチョットマの体から離れた。

メインブレインはセパレートブレインが見聞きしたことを、リアルタイムに、そしてまるで自分が体験しているかのように把握していたが、常に綾のことを考えていた。

綾と再会してからというものの、これまでの五百年間を忘れ去ってしまうほどの、喜びに満ちた日々が始まった。

彼女は、あれ以来、毎日やってくる。

彼女との会話の数々は、まだ鮮明なままの記憶として、いつでも再生することができる。

英知の壺で見ていたような誇張された感覚を伴うものではなく、生の記憶として。

結婚はしていないという。

いろいろな職業を経て、様々な街で暮らし、今はニューヨーク市府内の某機関で働いていて、暮らし向きはまずまずらしい。

前回の肉体再生時に、どういうわけか、大阪で暮らした日々の記憶を伴って生き返ったのだという。

そんなことってあるんだくと、綾は闊達に笑ったが、その声とは裏腹に、目からはまた涙がこぼれそうになっていた。

また優お姉さんの搜索をしたいと綾は言うが、生駒はそれを頼むことをためらっていた。

今の綾を大切にしなければ。

その思いが強かった。

過去を引きずるだけの生では、意味がない。

少なくとも今、実体を伴って生きている綾には。

「でも、パパ。私、パパの手足になるためにマトになったのよ」と、言うのだったが、

「いよいよ必要となればね」と、かわしていた。

市民の情報を扱う部所に綾はいるらしい。

それ以上は語らなかったが、外部に漏らしてはいけない事柄を扱っているのだろうと推測している。

そういう部所にいればこそ手に入る情報もあるのだろうが、それ

は現在の市民の情報である。

過去の、しかも六百年も昔に特殊な任務に就いていた優の情報ともなれば、それを探ることに危険を伴うこともあるだろう。

万一、綾の身に何かあれば、今度こそ自分は立ち上がれないだろうと生駒は思うのだった。

「サリっていう子がいるんだ」

生駒は、チョットマやサリ、そしてハクシュウやンドペキのことを話した。

「ニューキーツの住民達だよ」

サリという娘に関心を持ったことも話した。

「チョットマの言うことを聞いていると、サリって子がなんだか優に似てるな、と思ったりしたものだよ。でも違うんだ。サリはメルキト。優はメルキトではない」

「だよね」

「優の子孫ってことなら、あり得ないことではないけどね」

「ということは、優お姉さんがマトになって、ホメモかマトとの間に、子供を生んだってことになるわ」

「うん」

「優お姉さんも、記憶を失くしちゃったのかも」

優がまだ生身の人間だったときに、つまりホメモだったときにマトと結ばれ、子を産み、サリがその子孫だという可能性もあるが、綾はあえてそれ以上は口にしなかった。

もちろん、生駒の心情を思っていることだ。

「サリのこと、調べてみようか」

そう言い出したので、生駒はあわててとめた。

「いや、調べなくてもいいよ。それはチョットマたちがすることだ

から」

実際、チョットマ達にそんな調査能力があるとは思わなかったし、調べようとしてもしないことは分かっていたが、生駒は嘘をついた。

「でも」

「それにね、もしサリが優だったとしたら、僕は傷つくことになる。」

自分を忘れてしまったということになるから。

優は、光の女神と呼ばれ、金沢から大阪の自室まで、どのような方法を使ったにしろ、人間を飛ばすことができるほどの能力を与えられていた。

その彼女が、六百年間にわたって生駒を見つけられないということはないだろう。

しかも、当時は個人情報のセキュリティは今ほど強固ではなく、IDの漏洩などは頻繁に起こっていたのだから。

生駒の言いたかったことを察して、綾はそれ以上、調べてみることは言わなかった。

「今度、ハクシュウという隊長に会ってみようと思うんだ。どうも、同い歳の日本人みたいだし」

そう言えば、綾は無理のない範囲で調べてくれるだろう。

そして、もしかするとそこにサリのヒントも隠されているかもしれない、と思ったのだった。

「パパは、チョットマさんがお気に入りなのね」

「そうだよ」

綾は妬いているのではない。

生駒が幸せな気分で毎日を送ってきたことを、感じただけなのだ。

「典型的なメルキトでね」

生駒は、チョットマのことも話して聞かせた。

ナウセルフのみで生きている。一オールドの記憶もない。知識量も人並み以下。

そのくせ人懐っこくて、メルキトには珍しく、人生を心から楽しんでる……。

オールドとは、再生される期間のことだ。

昔の言い方をすれば、一生ということになる。

「メルキトはたいいてい、自分がいやになっているか、無気力になっているのかなのにね」

「そうだね。でも、その傾向はマトの方がひどいんじゃないかな」

「うん。マトは昔々、自分の生があるときに、死ぬか、アギになるかマトになるか、を選択することができた。それに対してメルキトは最初から再生され続ける人間として生きている。マトは自分で決めたんだからもっと頑張らなくちゃいけないのに、なまじ自分で選んだからこそ、迷いというか後悔というか、割り切れなさがあるのよね」

綾はマトだ。

綾自身はどんな精神状態で、今まで生きてきたのだろうか。

生駒はそう思うが、今、綾を目の前にして聞く必要のないことだ。生き生きとしているのだから。

生駒は一般論を吐いた。

「再生回数が増えれば増えるほど、一から人生を始めるのに飽きて

しまう。そういう感覚はわかるよ」

アギにも言えることだからだ。

綾も歩調を合わせてくる。

サリの話から、もしかすると優の話題から、避けていこうとするかのように。

「あの二百年間、マトの製造が禁止されるまで、毎年世界中で四、五十万人がマトになった。総勢で一億人前後のマトがいる計算になる。でも残存するマトは現状わずか数十万人ほど。ここ数百年のうちに、大多数のマトは消えてしまった」

「アギも同じようなものだよ」

コンフエツションボックスの中で、生駒と綾は会話している。

実像を伴って、向き合っている。

他に誰もいないがらんとした部屋で、他人行儀に向かい合って座っている。

親子なら、もっと自然に自分の居場所を見つけて、自由にくつろいで話をするだろう。

再会したとき、生駒と綾は抱き合った。

頬を寄せて、涙を流しあった。

しかし、そうしたのはあれきり。

今のこの微妙な距離を縮めたい。

政府に傍受されていようが構わない。

生駒は、そう思わずにはいられなかった。

「うん。アギの場合は、思考は途切れることなく続いていくでしょ。それはそれで苦しいのかもしれないけど、マトの場合は死亡という節目があって、そのたびに記憶が消えていく。ある期間の記憶がぼ

っかり失われていくの。なにも残っていない。それに気づいたときのやるせなさといったら」

綾は、涙ぐんでいた。

他人に言えない苦しみがあったのだろう。

記憶を失うとは、どんなに辛いことか。

失われることのない記憶の存在となった生駒にも、その感覚は分かる。

「もうどうでもいい、って何度思ったことか」

生駒は綾を抱きしめたいと思った。

アギであっても、この部屋の中では肉体を持っているし、身なりも整えている。

綾を抱きしめることもできるし、綾が抱きつくこともできる。

しかし、それはそれぞれの神経がそのように反応し、感じていると脳に伝えるだけのことであって、実際は生駒に本物の質量を伴った肉体があるわけではない。

この空間同様、仮想の産物なのだ。

そんなまやかしの肉体であっても、抱きしめてやれば綾は喜ぶだろうか。

「綾ちゃん」

生駒は椅子から立ち上がった。

せめて手を繋ぎたいと思った。

せめて、頬の涙を拭ってやりたいと思った。

せめて、綾の髪に触れたいと思った。

現実には存在しない、仮に見えているだけの手であっても。

「おじさん」

綾も立ち上がった。

そして、テーブルを回り込み、抱きついてきた。
なんとなく、おずおずと。

昔、思春期の頃の綾がそうしていたように。

生駒の目から涙が溢れ出した。

何も言えなくなった。

綾の髪を撫でながら、嗚咽の中からただただ、ありがとう、と繰り返していた。

今はこうしていること。それが幸せだと思った。

離れ離れになった数百年間の空しさは、一度や二度の抱擁では埋められない。

どれほどの時間、そうしていただろう。

やがて綾は胸にうずめた顔を離し、まっすぐ見つめてくる。

「おじさん、私の記憶と変わらないね」

「そりゃ、まあ」

当然なのだ。

仮想の肉体は、当時のままを保っている。

しかし生駒はそうは言わず、「生きてきてよかったと思う」と言った。

「私も。死ななくてよかった」

綾が、自分の涙を生駒の胸に擦り付けた。

「おじさんのことや優お姉さんのことを思い出した途端、人生はガラリと変わったわ」

そして微笑み、自分の指で生駒の涙を拭った。

「生きていく芯ができたというのか、過去も未来も、両方を見ることができるようになったというか」

「なるほどねえ」

あまりいい言葉は出てこない。

こんなにかがときめく瞬間は、もうどれほどなかっただろう。

生駒はまた涙が出てきそうになって、もう一度、綾を抱き寄せた。

過去の積み重ねで、今の自分がある。

それがあるから、先のことも考えることができる。

今まで、そんな風に考えたことはなかった。

誰でも、過去の記憶を心の中から引き出したり仕舞い込んだりすることができるところこそ、明日の自分を思うことができるのだ。

綾が胸の中で言う。

「昨日のことも忘れるようでは、明日のことは考えようもないのね。以前の私は、そういう人間になってしまっていたの」

綾の体が離れた。

生駒の胸に、言いようのない寂しさがこみ上げてきた。

しかし、今日の面会時間は終了だ。

またいつの日か、一緒に暮らせるようになるのだろうか。

そうは思うが、これ以上、悲しい状況を自ら作り出す必要はない。無理をして危険な橋を渡る必要はない。

傍受しているコンピュータがどんな判断を下すか、分かったものではないのだ。

これでいいのだ。

こうして、訪ねてきてくれる綾と会うだけで。

今でも、綾と出会う前の数百年間の状況に比べると、腐りきったどぶ川と南太平洋の大海原くらいの違いがあるのだから。

「ちょっと、やばかったかな。抱きついたりしたし、パパを呼び間違ったりしたから」

綾が、ちよろつと舌を出した。

「じゃ、パパ、またね」

綾が出て行くと、部屋に並べられた椅子が、空しいものに見えた。がらんとした部屋に、座る者のない椅子の群れ。

冷めた空気。仮想で作られた部屋に風が流れることはない。

何の物音さえしない、鼓動のない空間。

そう感じたとたん、生駒はある作業を始めた。

一心不乱に。

「センチメンタルだな」と、呟きながら。

21 オルゴールの声

予想外のことに驚いた。

パパの部屋に入るなり、

「ここよ！ 私の居場所は！」と、綾は叫んだのだった。

いの一番に、子供の頃いつもそうしていたように、見慣れた椅子に座った。背を股に入れて。

「なぜ、こんなことを覚えているんだろ！ 私、いつもここに座っていた！」

生駒が笑った。

「そう、そこで君はいつも宿題をしていたよ。狭いマンションだったから、中学生だったのに自分の部屋をあげられなくて、いつも気にしていたんだ」

「ううん、そんなこと」

「よかった、喜んでくれて」

綾は心底からうれしかった。

涙ぐみそうになるのを堪えて、生駒のオフィス兼住まいの狭い部屋の中を歩き始めた。

かつて私達が住んだ部屋を……。

「うわ！ 凝ってるね。これ！」

サイドボードに飾られたフォトフレーム。

家族三人で行った、北アルプスの白馬雪溪の写真。

「これも！」

綾が優の誕生日に買ってきた、ピアノの形をしたオルゴール。

「まさか」

ゼンマイを回すと、「いい日旅立ち」の曲が流れ出した。それに合わせて、綾は口ずさんだ。

「すごい……。私の記憶、どんどん生まれてくる感じ！」

そんなこともあるのかもしれない。

マトの記憶がどのように削除されていくのか、そのシステムは公にはされていない。

むしろ、再生時に注入されない記憶があるというのが、正しい表現だろう。

不要と思われるものから、ランダムにお蔵入りとなるのだ。

ただ、完全に消去されるということではないようだ。

どこかにそれは保存されている。

現に、完全に忘れてしまった頃のことを急に思い出した、というマトは多い。

今の綾は、まさにその状態だった。

「げ！　こんなものまで」

綾の結納のとき、相手の親が持ってきたオキナとオウナの木彫りの像だ。

結局は離婚して、綾は戻ってきたのだったが。

「ああー」と溜息をついて覗き込んだものは、カウンターの上の水槽だ。

「そういえば金魚を飼っていたこともあるね。金魚すくいでもらったやつ。本当は一匹しか掬えなかったんだけど、おじさんがおまけしてくれたんだった……」

綾は、もう泣き笑いの顔になっていた。

「バーチャルだけちゃんと生きているよ」

「うん。懐かしいものがいっぱい……。あ、そだ。他の部屋も覗いてもいい？」

なぜか今日は、生駒に涙を見られたくなかった。
会えば泣いてばかり。

悪いのは私。

でも、もっとしつかりしなくちゃ。

「もちろん。君の家だろ」

キッチンを覗き、お風呂を覗き、トイレまで覗いた。
そして最後に、寝室に入った。

「わたし、中学生だったのに、いつも三人で川の字になって寝ていたんだ……」

畳の部屋の真ん中で、座り込んでしまった。

そしてとうとう、涙がこぼれ落ちてきた。

「今日は泣かないでおうと思ったのに、涙が……」

パパは静かに笑って、見ていてくれる。

その手が髪に触れて、綾は気持ちを奮い立たせた。

いつまでも、泣き虫じゃダメ。

「ちよつとまずいかも。二回連続でイレギュラーな会話で終わっちゃ

……」

と、無理に笑顔を作った。

たちまち、パパが心配顔になる。

「なにかまずい兆候でもあった？」

「ううん」

コンピュータの監視システムに、変化はない。

パパのIDに付与されたコメントは、何もない。

ただそれは、自分が知らないだけかもしれない。

しかし、安全策を意識した。

ダイニング兼用の仕事場に戻り、自分の昔の指定席に座った。

「自殺願望のマトはとても多いんだよ。それを請け負う闇商売もあるらしいの」

無理やり、現実的な噂話に話題を変えた。

聞かれていることを前提にした会話。

やりきれない思いがしたが、今の状態では仕方がない。

怪しまれてパパの身に何かあれば、それこそ取り返しがつかない。パパさえ無事なら自分はどうなってもいい、ふとそう思った。

「再生しない完全なる死、だね」

生駒も話を合わせてくる。

「そう。どの街にもひとりやふたりはいるらしいよ」

「へえ」

「マトはいつの間にかこんなに数が減ってしまったけど、それは、死亡が確認されない深い海に身を投げたり、自分が再生不可になるために殺人を犯したりした人が多いから。そのどちらもできない人もいるのね。そういう人のための商売」

そんな話を挟みながら、綾は来るたびに、生駒のことを聞こうとしてきた。

そして自分のことも話したかった。

ただ、タブーは多い。

心おきなく話せる、そんな世の中になればいいのに、と思うのだった。

街の外に出れば、政府の監視の届かないところもあるのかもしれない。

テレビカメラやレーダーや、電波を介した会話を拾うシステムも手薄などところがあるかもしれない。

しかし、兵士でない自分が街の外に出ることは、物理的に無理なことだった。

殺傷兵器から身を守ることができなかったし、有毒ガスに耐えられる装備も持っていなかった。

しかも、政府機関で働く者が街の外へ出て行くことなど、どんな理由があるのかと、たちまち怪しまれてしまうことだろう。

しかも、生駒は生身の人間ではない。

声帯を震わせて空气中を伝播する声は出せないのだ。

政府のシステムを使って、電氣的な発声をしているし、聴いたことも電氣的な信号で電腦に送られているのだ。

もちろん、すべて政府のコンピュータに筒抜けになっている。

「私はもう、記憶を完全に抹消されない限り、今の仕事を辞めることはできないの」

綾は、思わず弱音を吐いた。

「そういう仕事に就いてしまったんだから。自分を大切に、としか言いようがないよ」

パパは、少し離れたところに座って、くつろいだ声を出している。心に生じた波を、できるだけ表に出さないようにして。

「そうね。暮らしは満足している。こうしてパパとまた会えて、私は幸せ」

「ぼくもさ」

「妙に言い寄ってくる男もいるしね」

その話をする気はなかったのだが、自然体ということを意識したあまりに、思わず口から出てしまった。

「へえ！ そりゃいい！」

「相手はメルキトなの」

実際、当たり障りのない話題である。

彼に特別な感情はないから。

「ううん、もしかするとアンドロかもしれない。仕事場の人。あいにく、こちらは関心ないけど」

「アンドロ？」

人造人間には、製造目的以外の思考能力はない。

しかし、画一的ではないのも事実である。

「本当は違うのよ」

そんな話をしようと思った。

秘密にしておかねばならない情報ではないはずだから。

「アンドロにもいろんな種類があるの。パパはニューキーツの街の人口、どれくらいだと思ってる？」

「さあ、ニューキーツは世界を見渡しても、小さな街の部類に入らう。一応、全部合わせてせいぜい十五、六万人」

「ハハ、ぜんぜん。百七十五万人。人数の上で、圧倒的派閥はアンドロ」

「そうなのか」

生駒は特別に驚いた声もあげない。

あくまで、淡々とした声だ。

「いわゆる街の人の目にはあまりつかないでしょうけど、街はアンドロによって成り立っているの」

「ああ」

「お店をしたり、兵士をしたりしているマトやメルキトがどうしても目立つけど、彼らはごく少数派。極端な言い方をすれば、私達が

暮らしている部分や、活動していることは、街の機能のいわば飾りの部分だけなの。街の実態はすべて、アンドロが動かしているといってもいいのよ」

当たり障りのない範囲で、アンドロの世界を話した。

地球人口は公式には千万人ほどといわれているが、実際はそれよりもずっと多く、一説では一億人にまで回復しているといわれている。

ただ、そのほとんどが人造人間であるアンドロである。

アンドロが支配している地球、という観念が広まるのはまだ時期尚早という判断がアンドロにはあり、低レベルな労働力としてのアンドロが工場の隅っこで働いているという印象をあえて維持しているというのだ。

「ま、そうだね。うすうすは気づいている」

「アギは徐々にわかっているの。でも、マトやメルキトはわかっていない。いくら知識があっても、思考力は相当に低下しているのね」
「書き割りみたいなこんな薄っぺらな街で、細々とした営みだけで世界が成り立っているはずがない」

「そう。食料やエネルギーだけでなく、ほとんどすべての物が政府によって供給されているわけでしょ。マトやメルキトは、それによって生かされているということなの」

そんなことを漫然と話し合った。

しかし、そろそろ危険水域に達した。

「街の人は気づいていない広大なエリアが、実は街に隣接して存在している、という情報もあるね」

綾は話しすぎたのかもしれない。

生駒は、応えにくい点を突いてきた。
これに返事をするべきではないだろう。

「パパ、あのお花、見に行った？」
と、話を遮った。

話題は、どんどん移り変わっていく。
意識的にそうしている。

しかも、すべてのことをさらりと言う。
あくまで、他愛のない噂話であるかのように。

22 湧き上がる不安の記憶

このニューキーツの街にも、隠された広大な別の市街があるといわれている。

一部のアギによって、ささやかれている噂だ。

政府の機関が集積している巨大な建物は、人の目には見えないが、より大きな建物郡の玄関部分にしか過ぎないというのだ。

かすかに次元の位相を変えることによって、普通の市民には、そのエリアの存在にさえ気づくことはできない。

多くのアンドロはその次元にたやすく行き来することができるという。そういう能力を持ったアンドロが開発されていたということなのだ。

もちろん、最初のアンドロを製造していたのは、ホメモである。

しかし、ホメモの数が急速に少なくなっていった時期に、特殊なアンドロや高度な知能を持ったアンドロを数多く開発し製造した。

地球上のひとつの次元であるアギやマトが住む地上ではなく、生産拠点あるいは行政拠点としての新天地を求めた時期のことである。地上の汚染が過去最悪だった頃のこと、宇宙空間に浮かぶ生産拠点だけではまかなえないし、膨大な物流エネルギーの将来性も危ぶまれたからであった。

そのような次元に、アンドロを送り込み、自らの知性でその世界を運営する必要があった。

アンドロたちが、その新天地に、自分たちの王国を作り始めたのは必然の流れだった。

果たして、まさに桃源郷ともいえる豊かな世界を異次元に築きあげたと言われている。

アギやマトが住む次元は、今やアンドロによって生かされ、運営されているのだ。

中世を懐かしむための博物館のようなものだ。見世物なのだ。そう、一部のアギのメッセージは訴えていた。

すでに削除され、その人物のIDは凍結され、記憶も知識もすべて抹消されてしまったそうだが。

ふと生駒は心配になった。

綾はその世界と紙一重のところで働いている。言い寄ってくるアンドロがいるという。

アンドロは、かつてのロボット代わりの人間ではなく、完全な人間なのだ。

強大なコンピュータによって生かされているアギやマトより、よほど人間らしいといえるかもしれない。

恋をし、結婚し、子供を生み育て、人生の輪廻を人間らしく送っているのかもしれない。

彼らの世界は、かつて人間が御し切れなかった世界中の様々なひずみや、最大の過ちであった世界戦争がなかった場合に進化していたであろう、輝かしい未来の地球の姿であるのかもしれないのだ。

「アンドロは私の仕事場にもたくさんいるよ。というか、アンドロばかり」

綾はそう言った。

「メルキトの方が少ないくらい。マトなんて、ほとんどいないわ」

「政府機関なんだから、そうなんだろうね」

「さすがに上層部ともなるとアンドロとメルキトの勢力は拮抗して

いるけどね。私の上司は、たまたまメルキトだし」

「アンドロの部下のメルキトやマトは、微妙な気分なんじゃないかな」

「ううん。そんな意識はないんじゃないかな」

綾が肩をすくめた。

「アンドロだからって、奴隷じゃないし、マシーンでもないから。仕事場じゃ、対等」

「うん」

「相手の素性なんて、意識もしないし」

「へえ、もうそこまでできているのか」

綾は、アンドロの方が全般的に優秀な人材が多い、と話してくれた。

「仕事ができるという意味でね。人間らしい感覚とか、やさしさとか弱さとか、といった意味では彼らは平板な感じがするけど」

「人間臭くない、ということかな」

「うーん、ちよつと違うかな。人間ってさ、仕事イコール権力とか、仕事イコール名声という方向に繋がりがやすいじゃない。そういう人間臭さっていうのかな。つまり、待遇とか、権力とか、名声とか、を志向するということにかけては、アンドロの方が強いみたい」

「へえ」

それって、まずいんじゃないか、と生駒は言いかけてやめた。

アンドロに対して批判的なことを言うのは避けておいた方が綾のためだ。

ましてや、人造人間ごときが、と聞こえかねないことは口にするべきではない。

「仕事場の友達は、メルキトもいるけど、アンドロもたくさんいるよ」

と、綾も言う。

コンピュータに聞かせる言葉かもしれないし、本当のことかもしれない。

ポツリと、綾が自分のことを口にした。

「ねえ、パパ、親友がいるんだ」

「おっ、いいじゃないか。今度、紹介してよ」

「うん」

自分で言い出しておきながら、綾の口が重たい。

「そうしたいんだけど……。話しておく。なかなか、外には出て来れないやつなんだ」

「そのアンドロかい？」

「ううん。女性なんだけど、とても忙しいみたいで」

生駒は、重ねて聞くことはしなかった。その代わり、話題を変えた。

「ところで、街の外に出てみない？」

チョットマなら、ふたりを連れ出してくれるかもしれないと思ったのだ。

「出るのは、まずいかい？」

「さあ、どうかな。支障はないと思うけど」

「最近、街の外へ出たことはある？」

「ないよ。以前は、私も兵士をしていたことがあるから、そのときは毎日出ていたけど。ニューキーツの街じゃなく、サイロンって街にいたとき」

「そうか、サイロンにいたことがあるのか。あそこはいいだろ。街がどこことなくアジア風で」

「うん。ちょっと暑いけどね。たまには道端に花が咲いていたりね」

話がそれていく。

綾にとって、街の外に出ることは、やはり深入りしたくない話だったのかもしれない。

生駒はサイロンの街もよく知っている。

自分自身はどの街に属しているという概念はないし、パパと呼んで訪ねてくる「子供達」は世界中に散らばっている。

現に今も、サイロンの街にも「息子」がいる。

ぶっきらぼうな男で、心を通わすことのない相手だが。

そんなことを話すうちに時間が来て、綾は帰っていった。

また明日、という言葉を残して。

生駒は、綾と郊外で話したいと切実に思った。

綾の身の安全を考えると、ここできなりきわどい話をする事と、郊外に出かけることの危険度はどちらが大きいだろうか、と考えた。

ただ、ピクニックのお供を頼むかどうかは別にして、チョットマに紹介しようと思った。

23 囚われた思念の色

23 囚われた者の心

ンドペキは落ちつかなかった。

自分が指名された会談は明日だ。

昨日の作戦以来、ハクシュウからは何の指示もない。

自分の役割はなにか。

どう振舞えばいいのか。

教えてくれるものがないばかりか、あの連中が何者なのか、レイチェルとは誰なのか、何のための会談なのか、という基本的な情報さえなかった。

スジウオンやコリネルスらにも聞いてみたが、誰もまともな言葉返してこない。

答えようがないからなのか、自分だけに伏せられていることだからなのか。

いてもたってもいられない気分だった。

とはいえ、口外無用だと、ハクシュウから釘を刺されている。

知人と呼べるものはいなかったし、共用のデータベースにレイチェルという名前をインプットすることもためらわれた。

俺は、なにか大切なことを失念してしまっているのか……。

記憶を呼び戻そうと試みる。
いつものように。

マトになる以前のことは、覚えてはいない。
どこの国の人間で、どんな暮らしをし、なんという名であったか
さえ。

わずか六百年ほど前のことだというのに。

その記憶はどこかにあるのだろうか。

あるいは記録として残されているのだろうか。

それを手繰り寄せることができないだけなのだろうか。

実は、六百年はおろか、数世代前の自分のことさえ、霧の向こう
の人影のようにおぼろだった。

この街の兵士になる前は……。

つまり、一オールド前は……。

アジア大陸のホルンプールという街に住んでいた。

大手の輸送会社に勤めていた。

ンドペキではない名を名乗って。

厳しいノルマがあったが、それなりの暮らしをしていた。ただ、
家族はいない。

独り身の身軽さで、再生を機に、ニューキーツに移り住んだ。
新しく生き直すことにしたのだ。

ただ、最初から兵士になるつもりではなかった。

商売を始めたい。

静かな暮らしがしたい。

そんなホロホロとした思いを持っていた。

しかし、ニューキーツは思った以上に小さな街だった。
小さければ小さいほど、民業は育たない。

あるいは阻止され、街の政府の力は強大となる。

ニューキーツでは、食料、エネルギー、情報通信といった基幹産業はすべて政府直営か、政府系の企業が押さえていたのだ。

製造業や小売業でさえ、これといったものはすべて政府系組織が運営していた。

個人レベルであれ、企業レベルであれ、庶民ができる商売といえば、小さな商い、小さなサービス業程度のもの。

仮にその商売が上手くいっても、少し大きく成長するとたちまち政府に飲み込まれてしまう。

安定した職業といえば、政府の役人か、政府系企業で働くことしかない。昔と変わらないと言えばそれまでだが、その存在は絶対的なものだった。

そして、政府に勤めるということは、常に政府に監視される存在になるということと同義だった。

当時、俺はまだ、世を捨てていたわけではない。

自由でありたい。

そんな淡い気持ちを失いたくはなかった。

俺は兵士になった。

食べていくために。

自分らしく生きていくために。

ただ、兵士のなるのはこれが初めてではない。

むしろ慣れた職業だといえる。

兵士をしながら、チャンスを待とうと思ったのだった。

しかし、チャンスは訪れなかった。

ただ、それだけのことだ。

その間、俺はどんなやつと出会っただろう。

レイチェル……。

その名を記憶の中にいくら転がしてみても、何かに触れることなく、どこかに消えてしまう。

ニューキーツのことだろうか。

あるいは一オールド前か、いや、もっと以前か……。

会談の代表に指名されるのだから、それなりの地位にある者だろうが……。

しかし、俺にはそんな地位も何もない……。

今も昔も……。

思い出そうとする行為。

次々と記憶を失くしていくものにとって、それは身を無理に振るような鈍い苦痛ともいえる。

ンドペキは街へ出た。夜の食事に。

歩きながらも、思い出そうとする。

しかし、その努力はいつも空しい。

いつのまにか、記憶をまさぐるのではなく、意味のない思念にふけていくことになる。

堂々巡りするだけの思念に。

人は誰しも、環境によって作られる。

世界中に誰一人、自分と同じ人間はいない。

同じ境遇に育ったからといって、同じ志向性を持つ人間になることは限らない。

しかし、子供の頃の思い出が楽しいものであるうとなかろうと、それは、自分が今の人間になった大きな要因となるはず。

懐かしく思い出すこと、思い出すのも嫌なこと、甘酸っぱい思い出、悔しかった思い出……。

そういったもろもろの記憶が積み重なって、自分というものがあるのだ。

そう考えるとき、記憶を失くした人間の、なんと悲しく、なんと薄っぺらなことか。

生きていくことの意味とは、多感な子供の時代に蒔かれた種が発芽するように、膨らんでいくものではないのか。

幼い頃の、心がまだ若かった頃の記憶を失くしたものにとって、生きていくことは、土に埋もれたしゃれこうべがかすかに縮みながら石となるのを待つようなものではないか。

延々と続く生。

それは謳歌するものではない。

むしろ戦慄の頸木。

死ねども死ねども、自動的に再生される命。

泡沫のように、微かな意味さえ見出せない生。

鼓動、呼吸、思考、それらすべては自らの意思なく、ただ繰り返すのみ。

生かされているのだ。

永遠の囚人として。

しかし俺は、何に囚われているというのか……。

レストランのプライベートブースに入る。
六十センチ四方の小さな空間に籠って、咀嚼するだけの食事。
その間も、俺の思念は留まることなくくるくると回り続ける。
轍に嵌まった車輪のように。
習慣となった同じ小径を。

サリを殺し、その咎によって、自らの生に終止符を打とうとした。
しかし、サリは消えた。
いや、俺がやったのか。
そんな記憶さえ、おぼろになってしまったというのか。

ところが、罰も受けずに俺は生きている。
もしや、明日の会談のために生かされているというのか……。

チョットマ。
あいつは、サリと同様、俺になついている。
あいつを殺すか。
かなり難しいが……。

いつの頃からだろう。
枯れることのない自死への渴望が、これほどまでに大きくなった
のは。

妄想をもてあそびながら、ンドペキは街を歩いた。
暗い裏路地から、華やかな表通りへと。

縫うようにして歩き回る兵士を気に留めるものはいない。

ンドペキとて、目的があるわけではない。

もちろん、出会いを求めていることでもない。

妄想を昂ぶらせないため。

意識を弛緩させるため。

そして、正気を保つため。

ニューキーツ一番の繁華なエリアに差し掛かる。

賑やかなオープンカフェが軒を並べている。

顔を隠すことなく、生の声で話し込む人々。

通り過ぎる者たちからは、笑い声も聞こえてくる。

マスクをしているものもいるが、総じて無頓着だ。

彼らも、政府に傍聴されていることは知っていようが、だからどうだというのだ、という諦観がある。

「む」

雑踏の中に、見覚えのあるコスチュームを見た。

クシではないか。

すぐに見失ったが、胸騒ぎがした。

戻ってきていたのか……。

チョットマを襲った者はやはり、あいつ……。

クシは元仲間だった男である。

手誰の兵士で、戦闘のために生まれてきたような男。
隊員であるという以前に、ひとりの戦士だった。

仲間という意識はなく、常に単独行動。

作戦にも加わらない。

ただ、東部方面攻撃隊に属しているというだけ。

仲間が危機に陥っていても、我関せずを通す。

見殺しにするばかりか、自分の戦闘を優位に進めるためには仲間さえ殺しかねない冷酷さを持つ男。

業を煮やしたハクシュウが、除隊処分にしたが、それを恨んでいた。

ただ、他の街に移り住んだと聞いていたが……。

クシがチョットマを狙った理由は分からないが、もしかするとサリをやったのも……。

と、そのときだ。

スコープに文字が流れた。

「振り返らずに歩け！」

24 夜は荒野の色

メッセージはキュートモード。文字データに変換した言葉を伝える方法だ。

情報量が少ない分、微弱な電波で送れるが近接した状態でないと届かない。一種の非常用通信モードで、特定者にのみ送ることができる。

ただ、アクセス用のIDは必要だ。

ンドペキのアクセスIDを知る者は多くない。

再生時に変更をしているので、東部方面攻撃隊のメンバーのみといてもよい。

すぐに次のメッセージが流れた。

「話がある」

「見せたいものがある」

「誰だ」

それには応えず、メッセージが続く。

「今夜」

雑踏の中で送ってきたということは、政府に盗聴されたくないということだろう。

きわめて短い文章が流れて、また間をおく。

「十時」

「西門を出ろ」

「北へ」

「走れ」

ンドペキは歩きながら、それとなく辺りを見回した。目を合わす者はいない。

知った顔はない。

マスクをしているものもいるが、キュートモードで声を掛けるためのゴーグルをしているものは見えない。

「信頼してもらっている」

やはり、どこかでこちらを見ているのだ。

「途中で合流する」

「誰にも言うな」

「ひとりで来い」

そういつて、メッセージは途切れた。

ンドペキは迷わなかった。

死を決意している身だ。

この誘いが危険に満ちたものであろうが、トラップが待ち受けているようが、構わない。

メッセージは、見せたいものがあるという。

そこに興味を引かれたのだった。

言われたとおりに、西門を出て北に向かって走った。

もちろん、フル装備である。

夜に兵士が城門を出ても怪しむものはいない。

東部方面隊ということになっているが、どこで狩をしようが自由だ。

しかも、東部方面攻撃隊はハクシュウ隊と呼ばれて、誰もが一目置く存在である。

城門を固める守備隊も、駆け抜けるンドペキをチラリと見るだけで、気にする様子もない。

ニューキーツの街が遠ざかり、闇の中を突っ走る。

さあ、お望みどおり、来たぞ。
姿を現せ。

ンドペキが砂塵を巻き上げているこの辺りは、グリーンフィールド地方と呼ばれているが、実際は草が所々に生えているだけの荒地である。

めばしい建物もない。

掃討する対象の少ないエリアだ。

ハクシユウの訓練以外では、めったに来ることはない。

かなり走ってから、ようやくメッセージが流れた。
また、キュートモードである。

「今、もう少し先にいる。スコープで覗いてみて。真正面にいるのが私」

どことなく、ニュアンスは女だが……。

夜の荒野を走るため、ンドペキは暗視モードにしている。

「む」

ほどなく、スコープが熱を感知した。

前方、一キロ余り。

熱のポリリュームから判断すると、人間だ。

こいつか。

クシか……。

徐々に輪郭が見えてくる。

ズームに姿形がはっきりと捉えられた地点で、ンドペキは停止した。

女だった。

「昨日のお昼間は、ひどいご挨拶だったわね」
なるほど、あいつだ。

クシではない。

サリの捜索中に会った女だった。

「明日、あなた、代表として会談に臨むでしょ。これから忙しくなるかもしれないから、今晚中に」

「どういうことだ」

「私が誰かってことに興味はないのね」

「ない。話とは」

「ここでは話せない」

女はちょこつと手を上げると、突然走り出した。

「近づかないで、それに話しかけないで、ついて来て」
ンドペキは追った。

「見せたいものは、ここにはないから」

おおよそ三百メートルの距離をあけてついていった。

「そうそう、GPSはオンにしちゃだめよ。まさか現在地を捕捉されるものは切ってると思うけど」

数えるほどしか星のない暗い夜だった。

女はみるみるスピードを上げていく。

緩やかな起伏が続き、時として前に行く女を見失いそうになる。

なぜか、女の姿は既にスコープに映し出されなくなり、肉眼で追うしかない。

一時間ほど走り、百キロは来たろうか。

再び女が口を開いた。

ラバーモードに切り替えている。特定の者にだけ聞こえる音声通信だ。

「約半分ね」

「どこへ行く」

「向こうで説明する。でも、道順は覚えておいてね」

「なぜだ」

「きっと、今度はあなたが人を案内することになると思うから」

それから、女とンドペキはポツリポツリと言葉を交わした。

「このあたりは政府の監視カメラも通信傍受システムも手薄よ。衛星の監視はあるけどね」

「もっと距離は十分とれない？ ペアで動いていると思われたいから」

「このあたりは、左手に川が迫ってるわ」

「暗くて見えないけど、昼間だと前方にミリ山脈がよく見える」

「この大きな木は、カエデ。目印よ」

「この廃屋は発電所の跡。このあたり、昔は風力発電の風車がたくさん立ってたのよ」

といった内容ばかりで、肝心のことになると、後でね、と言うのだった。

登り坂になってきた。

地面は砂礫の荒地から、巨石が積み重なった地形に変わっていた。ふたりとも空中走行のため、地面の状態は支障ではない。

突然、森に入った。オレゴーナ地方の入り口まで来たということだ。

「もう、離れていなくても大丈夫」

女が立ち止まった。

ンドペキは女に近づいた。

「休憩する？ そんな必要はないわよね」

女がまた走り出した。

ンドペキもすぐ後に続く。

径を辿っているのか、女は迷うそぶりもない。

深い木立に、星の光は届かない。

暗闇で、一寸先も見えはしないが、女の位置がスコープに映し出されるようになっていた。

その白い点は、大きく弧を描いて移動することはあっても、小さな進路変更をすることはなかった。目的地に向かって一直線に進んでいるようだ。

白い点。

つまり、非戦闘員である。街の住民で、どの隊にも属していないということになる。

しかし、これだけの走行ができる市民は多くはない。

「道順は覚えてる？」

「自信がない」

「大丈夫？」

「一応、走行モニタで記録している」

「それって、やばいんじゃないの？……どこか別のところに情報が蓄積されるってやつじゃないの？」

「いや、通信機能はない。ここに蓄積される」

と、ンドペキは自分のヘッダーをつついてみせた。

「なんだか、怪しいな。絶対に誰にも知られないようにして。いざという日までは」

「なんだ、いざという日ってのは」

「それは私にもわからない」

「じゃ、誰がわかってるんだ」

「ううん、たぶん、その必要があるだろうってこと」

女はそういうと、一段とスピードを上げた。

ンドペキはついていくのがやっとで、短い会話はそれで打ち切りとなった。

いつしか深い山地に分け入っていた。

ンドペキが荒野を突っ走っているところ、生駒は気を揉んでいた。
今日、まだ綾の訪問がない。

もうとつくに来てもいい時間。

いつもなら、仕事帰りに寄るという時間帯に綾は顔を出してくれるのに。

いや、まだ、十時。

落ちつこう。

就寝時間まで、まだ間がある。

午前零時になれば自動的に思考が停止してしまうが、それまでには来てくれるだろう。

きつと、仕事が忙しいのだ。

重大な会談前夜のことでもあるし、政府機関内は右往左往しているかもしれない。

綾も帰るに帰れない状態かもしれない。

今夜は無理かな。

しかし、よもや綾の身に何かあったのではないかという悪い予感も、拭いきれないでいた。

交わした会話の中に、監視システムがアラームを発するようなことがあったのだろうか。

ハクシユウの情報？

抱き合って涙を流したこと？

綾がパパと呼ばずに、おじさんと呼んだこと？

アンドロが住む別次元の話題？

そもそも、連日アクセスしてきたこと？

考え出すと、不安で堪らなくなるのだった。

同じころ、チョットマはコリネルスから仕入れたクシの情報を反芻していた。

けっ、卑怯者め。

フン、見損なってもらったら困るぜ。

それにしても、何だって私が。恨むならハクシユウだろ。

でも、蛇みたいに執念深いやつだったら、嫌だな。

彼がいうように、警戒だけはしておかないとね。

チョットマはくわばらくわばらと呟きながら、ベッドにもぐりこんだ。

なぜ、蛇は執念深いって言われるんだろ。

どうでもいいか。

蛇がどんな動物なのか、知らないし。

そしてものの三分もしないうちに、寝息をたて始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8460j/>

ニューキーツ

2011年12月17日21時52分発行